



● ● ●
日本大学FD推進センター

日本大学FD研究

第10号

日本大学FD研究 第10号

目 次

研究論文

- スポーツチャンバラを教材とした大学体育授業における受講者の共感性および社会的スキルの変化 1
川井 良介・菅野 慎太郎・山崎 紀春
- コロナ禍における大学サークルの困難と可能性
—フォルクローレ演奏サークルを事例として— 15
間篠 剛留

研究ノート

- 教職員と留学生が対等に交流することの意義—交流会参加者のアンケート分析から— 27
張 家寧・杜 姝瑾・廖 穎彤

活動報告

- 再履修者を対象とした初年次教育に関する授業報告 35
小堀 裕子・齋藤 山人・山本 守和

学生レポート

- 「学生が変わる日本大学」
—「令和4年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」に関する報告書— 43
土屋 怜王・田中 花奈・中澤 駿之介・宮川 美月・大保 航貴・境野 哲美・本橋 侑也・渡 祐太・
柴田 大輝・曾山 はるか・宮口 昌也・垂見 麻衣

『日本大学FD研究』投稿要項及び執筆要項 79

令和3年度 日本大学FD推進センター活動報告書 87

編集後記

日本大学全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループメンバー
日本大学工学部教授 齋藤 義雄

研究論文

スポーツチャンバラを教材とした大学体育授業における 受講者の共感性および社会的スキルの変化

川井 良介*¹⁾, 菅野 慎太郎²⁾, 山崎 紀春¹⁾¹⁾日本大学文理学部, ²⁾日本大学松戸歯学部

Changes in empathy and social skills of university physical education students using Sports Chanbara as a teaching material

Ryosuke KAWAI¹⁾, Shintaro KANNO²⁾, Kiharu YAMAZAKI¹⁾¹⁾Nihon University, College of Humanities and Sciences, ²⁾Nihon University, School of Dentistry at Matsudo

This study aimed to examine if general physical education instructions applying Sports Chanbara (Spochan) teaching materials changes the social skills and empathy of participants.

Fifty-eight students attending health classes at Nihon University, College of Humanities and Sciences, and enrolled in the Health who have also Sports Education subject Spochan were recruited for this study. The Multi-dimensional Empathy Scale (MES) and Kikuchi's Scale of Social Skills: 18 items (KiSS-18) were administered after the 1st, 7th, and 15th class meetings. The data of 34 students who returned complete responses some scales (24 male, 10 female; average age: 18.8 ± 1.2) were analyzed using one-way Analysis of Variance (ANOVA).

The results of the MES suggested that the abilities to understand one's partner's point of view and display other-oriented responses improved significantly after the Spochan instructions. In addition, according to the KiSS-18, all factors (basic and more advanced skills, emotional processing, conflict avoidance, stress management, and planning) were enhanced compared to before the Spochan instructions. This suggests that the Spochan instructions may be improving empathy and better social skills.

キーワード：健康・スポーツ教育科目, 健康・スポーツ教育実習, スポチャン, 対人競技

Keywords:

Health/sports education subject, Health/sports education practice, Spochan, Interpersonal competition

緒 言

大学の一般教養における体育授業（以下、一般体育）は、「豊かな人間性を備えた学生を育成するための教育」（全国大学体育連合ら、2009）として、それぞれの大学の特色を踏まえたカリキュラムの中に編成されている。近年の研究により、スポーツ活動や身体活動を含む一般体育が、受講者のコミュニケーションスキル（杉山、2008）およびリーダーシップやフォロワーシップ（清水ら、2010）などの社会的スキルの醸成に有効であることが示唆されている。ここで言う社会的スキルとは、Goldstein et al. (1986) によって、①初歩的なスキル、②高度なスキル、③感情処理のスキル、④攻撃に代わるスキル、⑤ストレスを処理するスキル、

*E-mail: kawai.ryosuke@nihon-u.ac.jp

投稿：2022年4月5日 受理：2022年10月20日

⑥計画のスキルに大別されており、「対人関係を円滑にはこぶために役立つスキル（技能）」（菊池，1988）を指す。また、グループワークやコミュニケーションづくりを意識した授業を展開（野口ら，2013）したり、授業中の身体活動量を増加（橋本，2012）させることで、受講者の社会的スキルの向上に効果があることも明らかとなっている。

最近の我が国の一般体育の潮流について、Kajita et al. (2019) は、健康に関わる学習や技能の向上よりも心理・社会的な側面における成長を重視する傾向にあると指摘している。この背景には、心理・社会的不適応状態を呈する大学生の割合（平野，2005）や、社会的スキルが学習されていないことから、円滑な友人関係が築けず、対人関係上の問題を示す青年（松永・岩本，2008）が増加していることが挙げられる。このような状況を打開すべく、一般体育は小学校から高等学校の学習指導要領に記載されている体力の向上や健康の維持・増進などの保健体育科の目的に加え、対人場面で活用される社会的スキルを獲得させる、または向上させることをねらいに展開されている。このことは、我が国の一般体育に共通した教育目標と位置付けられ、それに寄与する体育授業を展開することは、教育の質を保証する観点において極めて重要である（奈良・木内，2021）。また、2018年11月に中央教育審議会が公表した「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」には、世界的規模の激しい社会的変化が予想される時代において、「AIには果たせない真に人が果たすべき役割を十分に考え、実行できる人材が必要となる」（中央教育審議会，2018）と記述されている。以上のことから、受講者が社会的スキルを獲得するためのきっかけを提供する場として、一般体育を大いに活用すべきであるということには言を俟たない。

筆者らが所属する日本大学文理学部の一般体育は、健康・スポーツ教育科目という名称で基礎教育科目の中に位置づけられている。具体的には、半期1単位の実習科目である健康・スポーツ教育実習（以下、健スポ実習）と半期2単位の講義科目である健康・スポーツ教育論の2科目が設置されている。前者の健スポ実習に着目すると、「スポーツや身体運動の実践を通して、体力・運動技能の向上を目指すだけでなく、身体感覚や身体知を獲得するとともに、自己表現やコミュニケーション能力を養うこと」（日本大学文理学部，2021）が目的として掲げられている。この健スポ実習は、前・後学期を通して50コマの授業が開講され、それらの授業で取り扱われる種目は「スポーツ競技を主体とした種目」と「健康増進を主体とした種目」に分類され、学生の多様なニーズに対応できるように配慮されている。また、調査実施時の文理学部においては、新型コロナウイルス感染症の拡大状況を踏まえ、受講者が対面形式または遠隔形式（Zoomを利用した同時双方向型、オンライン学習支援システムを通じたオンデマンド型など）のいずれかの形式を選択・決定し、受講していた。そして、2021年度からは、スポーツ競技を主体とした種目の中にスポーツチャンバラ（以下、スポチャン）が導入された。スポチャンとは、1971年に田邊哲人によって創始されたニュースポーツの1つである。日本国内においては、多くの大人が幼少期に遊戯として経験した「チャンバラごっこ」と「小太刀護身道」を基に、スポチャン面とエアソフト剣（短刀、小太刀、長剣など）、楯や籠手を用いるスポーツ競技である（田邊，2002）。筆者らが健スポ実習の新種目としてスポチャンを導入した背景には、教材としてのスポチャンが受講者の共感性を高めることができると考えたためである。

本研究で言う共感性とは、たとえ親しくない相手であっても具体的なスキルを適切に発揮するために必要（鈴木・木野，2015）な概念を指す。この共感性は、異質な集団における多様性を理解する姿勢や、自律的・相互作用的な学びにつながる能力の1つとして、重要な位置を占めている（井芹，2016）と考えられている。元嶋・坂入（2019）は、男女中学生（63名）を対象に剣道授業が生徒の共感性に与える影響を検討している。その結果、剣道授業は生徒の共感性に肯定的な影響を与えることを明らかにしている。鳥ら（2020）は、一般体育において柔道実習もしくはテニス実習を受講した男女大学生（43名）を対象に、運動種目に対するイメージや共感性、社会的スキルに関する質問紙調査を行なっている。その結果、柔道実習を受講した学生は、テニス実習を受講した学生と比較して、共感性（特に、視点取得）が高まったことを報告している。

これらは、川戸・長谷川（2019）の「柔道や剣道などの身体接触を伴う武道では、その身体活動を通じて技能を高めること情意を育むこと」という考えを支持する結果である。筆者らはこれらの知見を踏まえ、至近距離で相手と対峙し、相手を打ったり、相手に打たれたりするような競技場面に有するスポチャンの活動を通じて、受講者の共感性を高めることができると考え、スポチャンの導入に至った。別の観点として、一般体育に武道種目をそのまま導入することも検討したが、スポチャンと類似した身体活動である剣道に対しては、生徒から「痛い」、「臭い」、「怖い」などの否定的イメージ（糸岡ら、2011）が強い傾向にある。また、教員からは剣道具の着装に時間がかかる（柴田・根本、2015）などの声を多く耳にするため、今回は剣道ではなく、剣道と比較して打ち合いの楽しさを重視したスポーツであり、基本指導の時間短縮や早期に互角稽古が導入できる利点（木原ら、2004）があるスポチャンを採用した。さらに、スポチャンはリハビリテーションとしての効果が期待され（池田ら、1997）、障害者でも工夫次第では十分な運動能力を発揮できるスポーツとして高く評価されている（白崎ら、2001）。そのため、学校体育の教材として有効活用できる可能性があるものの、先行研究を概観しても剣道の代替種目としての有用性を検討することに留まっており（木原ら、2009；岡澤ら、1999）、スポチャンが受講者へ与える影響や受講者が獲得できる能力について検討を加えた研究は極めて少ない。

以上のことから、スポチャンを教材とした一般体育を受講することで、受講者の社会的スキルや共感性にどのような変化が生じるかを検討することを本研究の目的とした。また、本研究において教材としてのスポチャンの有用性や一般体育における教育活動によって受講者が得られる効果について検証することで、今後の一般体育の授業改善への示唆や大学における教育の質保証・向上の一助となるような知見を得たい。

方 法

1. 調査対象者および調査時期

サンプルサイズについては、G Power Ver.3.1 を用いた事前の検定力分析を用いて推定した（水本・竹内、2011）。本研究はスポチャンを教材とした授業が受講者の共感性および社会的スキルがどのように変化するかを検討するため、水本・竹内（2011）を参考に、対応のある一元配置分散分析による、有意水準 0.05 (α)、検定力 0.8 ($1 - \beta$)、効果量中程度 ($f > 0.25$) を条件に設定した。その結果、計 28 名のサンプルサイズが必要であることが分かった。これを参考に、調査対象者（以下、対象者）は、2021 年度に日本大学文理学部で開講された健康・スポーツ教育実習（スポーツチャンバラ）（以下、本授業）を受講した学生 58 名のうち、質問紙の回答に不備がなく、対面形式で授業に参加した 34 名（男性：24 名、女性：10 名）とした。本研究ではスポチャンを教材として、打突や打ち合いを行なうことで受講者の共感性と社会的スキルがどのように変化するかを検討することを目的としていたため、対面形式の受講者のみを対象とし、遠隔形式で授業に参加した学生は対象者から除外した。調査対象者には、本講義開始前に本研究の目的・内容に関する説明を口頭で行ない、同意が得られた者を対象に調査を行なった。なお、本研究は日本大学文理学部研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：02-51）。

調査時期は、2021 年 9 月～2022 年 1 月（2021 年度後学期）であった。本授業の授業内容（全 15 回）は Table.1 に示した通りである。本研究では受講者の共感性や社会的スキルの変化を縦断的に調査・検討するため、全 15 回（90 分／回）で行なわれる授業の第 1 回目、第 7 回目、第 15 回目の 3 時点で調査を実施した。なお、調査結果については、第 1 回目で収集した回答を「1st」、第 7 回目で収集した回答を「2nd」、第 15 回目で収集した回答を「3rd」とした。

Table.1 健康・スポーツ教育実習（スポーツチャンバラ）の授業計画の概要

回数	授業計画
1	ガイダンス【遠隔授業】 ※1stアンケート実施 ・Zoomを用いた同時双方向型 ・授業の進め方や成績評価，スポーツチャンバラに関する説明
2	アイスブレイク・スポーツチャンバラを見てみよう【遠隔授業】 ・Zoomを用いた同時双方向型 ・BORに分かれて，数種のアクティビティを用いたアイスブレイクを実施
<u>3</u>	スポーツチャンバラの基本動作とストレッチング【対面授業】 ・ペアになって，ストレッチング ・スポーツチャンバラの基本動作の説明，打ち方と受け方の実践
<u>4</u>	スポーツチャンバラの試合：個人戦【対面授業】 ・ペアになって，スポーツチャンバラの打ち方と受け方を実践 ・個人戦（リーグ戦）を数回（1人5～6試合程度）実施
5	スポーツチャンバラの試合と戦術【遠隔授業】 ・Zoomを用いた同時双方向型 ・BORに分かれて，前回授業の試合の様子を撮影した動画を視聴しながら感想や改善点を共有
<u>6</u>	スポーツチャンバラの形を学ぶ【対面授業】 ・ペアになって，スポーツチャンバラの形の練習 ・4～5名程度のグループになって，形を披露し合いながら練習
7	体力テスト：下肢の筋力／形の練習【遠隔授業】 ※2ndアンケート実施 ・オンライン学習支援システムを通じたオンデマンド型 ・自宅のできる体力テストを実施後，オンデマンド資料を見ながら形の練習
8	体力テスト：持久力／形の練習【遠隔授業】 ・オンライン学習支援システムを通じたオンデマンド型 ・自宅のできる体力テストを実施後，オンデマンド資料を見ながら形の練習
9	体力テスト：筋持久力／形の練習【遠隔授業】 ・オンライン学習支援システムを通じたオンデマンド型 ・自宅のできる体力テストを実施後，オンデマンド資料を見ながら形の練習
10	体力テスト：柔軟性、平衡性・バランス能力／形の練習【遠隔授業】 ・オンライン学習支援システムを通じたオンデマンド型 ・自宅のできる体力テストを実施後，オンデマンド資料を見ながら形の練習
11	スポーツチャンバラの形を披露する【遠隔授業】 ・Zoomを用いた同時双方向型 ・4～5名程度のグループになって，形を披露し合いながら感想や改善点を共有
<u>12</u>	スポーツチャンバラの試合：団体戦【対面授業】 ・4～5名程度のグループになって，グループごとにウォーミングアップを実施 ・団体戦（リーグ戦）を数回（1人3～5試合程度）実施
<u>13</u>	スポーツチャンバラの試合：団体戦（乱戦と合戦）【対面授業】 ・4～5名程度のグループになって，グループごとにウォーミングアップを実施 ・団体戦（乱戦，合戦）を数回（1人3～5試合程度）実施
14	スポーツチャンバラの審判法【遠隔授業】 ・Zoomを用いた同時双方向型 ・様々なスポーツチャンバラの試合を見て，審判の判定を疑似体験
15	審判法のテストと授業の振り返り【遠隔授業】 ※3rdアンケート実施 ・オンライン学習支援システムを通じたオンデマンド型 ・Webテストの実施，授業全体やWebテストの内容の振り返り

※回数に下線が付いている授業回：授業内で身体的な接触があった授業回

※BOR：ブレイクアウトルーム（1ルーム4～5名程度で構成）

2. 調査内容

本研究は、本授業を受講した学生の共感性や社会的スキルの変化について検討するため、2種類の質問紙を用いて比較・検討を行なった。

2-1. 共感性

鈴木・木野（2008）が作成した多次元共感性尺度（Multi-dimensional Empathy Scale：以下、MES）を用いた（Table.2）。本尺度は、他者の感情や意見に影響されやすいことを示す「被影響性」、他者に焦点づけられた情緒反応を示す「他者指向的反応」、自己を架空の人物に投影させる認知傾向を示す「想像性」、相手の立場からその他者を理解しようとする傾向を示す「視点取得」、自己に焦点づけられた情緒反応を示す「自己指向的反応」の5因子24項目で構成されている。回答はいずれも「全く当てはまらない（1点）」、「たいてい当てはまらない（2点）」、「どちらともいえない（3点）」、「たいてい当てはまる（4点）」、「とても当てはまる（5点）」の5件法で求め、各因子を構成する項目の合計を下位尺度得点とした。

Table.2 本研究で用いた多次元共感性尺度（MES）の質問項目

因子	回答順	質問内容
<第1因子：被影響性>	1	物事を、まわりの人の影響を受けずに自分一人で決めるのが苦手だ。
	2	まわりの人がそうだとすれば、自分もそうだと思えてくる。
	8	自分の感情はまわりの人の影響を受けやすい。
	16*	自分の信念や意見は、友人の意見によって左右されることはない。
	22*	他人の感情に流されてしまうことはない。
<第2因子：他者指向的反応>	3*	悩んでいる友達がいても、その悩みを分かち合うことができない。
	7	まわりに困っている人がいると、その人の問題が早く解決するといいなあとと思う。
	12	悲しんでいる人を見ると、なぐさめてあげたくなる。
	14*	他人が失敗しても同情することはない。
<第3因子：想像性>	5	空想することが好きだ。
	11	面白い物語や小説を読んだ際には、話の中の出来事がもしも自分に起きたらと想像する。
	18	感動的な映画を見た後は、その気分いつまでも浸ってしまう。
	24	自分に起こることについて、繰り返し、夢見たり想像したりする。
<第4因子：視点取得>	25*	小説の中の出来事が、自分のことのように感じることはない。
	4	常に人の立場に立って、相手を理解するようにしている。
	9	自分と違う考え方の人と話しているとき、その人がどうしてそのように考えているのかを分かろうとする。
	10*	相手を批判するときは、相手の立場を考慮することができない。
<第5因子：自己指向的反応>	17	人と対立しても、相手の立場に立つ努力をする。
	23	人の話を聞くときは、その人が何を言いたいのかを考えながら話を聞く。
	6	他人の成功を素直に喜べないことがある。
	13	他人の失敗する姿を見ると、自分はそうなりたくないと思う。
<第5因子：自己指向的反応>	15	痛みを苦しんでいる人を見ると、気持ちが悪くなる。
	19	苦しい立場に追い込まれた人を見ると、それが自分の身に起こったことでなくてよかったと心の中で思う。
	21	他人の成功を見聞きしているうちに、焦りを感じるが多い。

*は逆転項目

2-2. 社会的スキル

菊池 (1988) が作成した社会的スキル測定尺度 (Kikuchi's Scale of Social Skills: 18 items : 以下, KiSS-18) を用いた (Table.3)。KiSS-18 は, 対人関係を円滑に営むスキルとしての社会的スキルを総体的に測定する尺度として使われている。本尺度は, 「初歩的なスキル」, 「高度なスキル」, 「感情処理のスキル」, 「攻撃に代わるスキル」, 「ストレスを処理するスキル」, 「計画のスキル」の6因子18項目から構成されている。回答はいずれも「いつもそうでない (1点)」, 「たいていそうでない (2点)」, 「どちらともいえない (3点)」, 「たいていそう (4点)」, 「いつもそう (5点)」の5件法で求め, 各因子を構成する項目の合計を下位尺度得点とし, 各下位尺度得点の合計を合計得点とした。

2-3. データ分析および統計処理

MES は各下位尺度得点の平均点と標準偏差を算出し, KiSS-18 は各下位尺度得点と合計得点の平均値と標準偏差を算出した。そして, 質問紙を回答した時点 (1st, 2nd, 3rd) の要因について対応のある一元配置分散分析を行なった。まず, Mauchly の球面性検定を用いて各項目の等分散性を分析した。等分散 ($p > 0.05$) の場合に, 一元配置分散分析を用いて主効果の検定を行ない, 不等分散 ($p \leq 0.05$) の場合には, Greenhouse-Geisser の ϵ 補正による一元配置分散分析を用いて主効果の検定を行なった。一元配置分散分析の結果, 有意差が認められた場合 ($p \leq 0.05$) は, Bonferroni 法による多重比較検定を用いて, 各時点間での比較を行なった。また, 群間の差の大きさを評価するために効果量 η^2 を算出した。効果量の目安として Cohen (1988) や水本・竹内 (2008) を参考に, $\eta^2 = 0.01$ を効果量小, $\eta^2 = 0.06$ を効果量中, $\eta^2 = 0.14$ を効果量大とした。

Table.3 本研究で用いた社会的スキル測定尺度 (KiSS-18) の質問項目

因子	回答順	質問内容
初歩的なスキル	1	他人と話していて、あまり会話が途切れないほうですか。
	5	知らない人とでも、すぐに会話が始められますか。
	15	初対面の人に、自己紹介が上手にできますか。
高度なスキル	2	他人にやってもらいたいことを、うまく指示することができますか。
	10	他人が話しているところに、気軽に参加できますか。
	16	何か失敗したときに、すぐに謝ることができますか。
感情処理のスキル	4	相手が怒っているときに、うまくなだめることができますか。
	7	こわさや恐ろしさを感じたときに、それをうまく処理できますか。
	13	自分の感情や気持ちを、素直に表現できますか。
攻撃に代わるスキル	3	他人を助けることを、上手にやれますか。
	6	まわりの人たちとのあいだでトラブルが起きても、それを上手に処理できますか。
	8	気まずいことがあった相手と、上手に和解できますか。
ストレスを処理するスキル	11	相手から非難されたときにも、それをうまく片付けることができますか。
	14	あちこちから矛盾した話が伝わってきても、うまく処理できますか。
	17	まわりの人たちが自分とは違った考えをもっている、うまくやっていけますか。
計画のスキル	9	仕事をするとき、何をどうやったらよいか決められますか。
	12	仕事の上で、どこに問題があるかすぐに見つけることができますか。
	18	仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感じないほうですか。

その後、算出された有意確率、サンプルサイズ、効果量を用いて検定力 ($1 - \beta$) の算出も行なった。なお、統計処理は SPSS ver. 27.0 (SPSS Inc. Chicago, IL) で実施し、有意水準を 5%未満とした。

結 果

1. 共感性

Table.4 に、共感性 (MES) の各下位尺度得点の平均値と標準偏差の推移と一元配置分散分析の結果を示した。その結果、他者指向的反応 ($F(2, 66) = 4.105, p < 0.05, \eta^2 = 0.111, 1 - \beta = 0.996$) と、視点取得 ($F(2, 66) = 5.567, p < 0.01, \eta^2 = 0.145, 1 - \beta = 0.999$) に有意な主効果が認められた。多重比較検定は Table.4 の通りである。

2. 社会的スキル

Table.5 に、社会的スキル (KiSS-18) の各下位尺度得点の平均値と標準偏差の推移と一元配置分散分析の結果を示した。その結果、初歩的なスキル ($F(2, 66) = 29.014, p < 0.001, \eta^2 = 0.468, 1 - \beta = 1.000$)、高度なスキル ($F(2, 66) = 18.219, p < 0.001, \eta^2 = 0.356, 1 - \beta = 1.000$)、感情処理のスキル ($F(2, 66) = 12.909, p < 0.001, \eta^2 = 0.282, 1 - \beta = 1.000$)、攻撃に代わるスキル ($F(2, 66) = 9.495, p < 0.01, \eta^2 = 0.224, 1 - \beta = 0.999$)、ストレスを処理するスキル ($F(2, 66) = 6.765, p < 0.01, \eta^2 = 0.171, 1 - \beta = 0.999$)、計画のスキル ($F(2, 66) = 10.795, p < 0.001, \eta^2 = 0.247, 1 - \beta = 0.999$)、合計得点 ($F(2, 66) = 26.945, p < 0.001, \eta^2 = 0.450, 1 - \beta = 1.000$) に有意な主効果が認められた。多重比較検定は Table.5 の通りである。

Table.4 共感性 (MES) の一元配置分散分析の結果 (n = 34)

因子	1st (第1回目)	2nd (第7回目)	3rd (第15回目)	F値	p	多重比較検定
被影響性	3.0 ± 0.8	3.0 ± 0.8	3.1 ± 0.7	0.409	0.666	n.s.
他者指向的反応	3.9 ± 0.6	4.0 ± 0.5	4.1 ± 0.6	4.105	0.021	*
想像性	3.4 ± 0.6	3.4 ± 0.6	3.4 ± 0.6	0.112	0.894	n.s.
視点取得	3.9 ± 0.5	3.9 ± 0.6	4.1 ± 0.6	5.567	0.006	**
自己指向的反応	3.3 ± 0.6	3.3 ± 0.6	3.3 ± 0.6	0.415	0.662	n.s.

Values are Mean ± SD.

*: $p < .05$, **: $p < .01$, n.s.: not significant

Table.5 社会的スキル (KiSS-18) の一元配置分散分析の結果 (n = 34)

因子	1st (第1回目)	2nd (第7回目)	3rd (第15回目)	F値	p	多重比較検定
初歩的なスキル	9.6 ± 2.8	10.8 ± 0.4	11.9 ± 2.3	29.014	0.000	***
高度なスキル	10.3 ± 2.6	11.0 ± 2.5	11.9 ± 2.2	18.219	0.000	***
感情処理のスキル	9.9 ± 2.6	10.7 ± 2.4	11.6 ± 2.0	12.909	0.000	***
攻撃に代わるスキル	10.0 ± 2.4	11.1 ± 2.4	11.2 ± 2.5	9.495	0.001	**
ストレスを処理するスキル	11.0 ± 1.8	11.6 ± 2.4	12.1 ± 1.8	6.765	0.002	**
計画のスキル	9.8 ± 2.2	10.8 ± 2.5	11.3 ± 2.3	10.795	0.000	***
合計得点	60.5 ± 11.9	65.9 ± 12.9	70.1 ± 11.2	26.945	0.000	***

Values are Mean ± SD.

: $p < .01$, *: $p < .001$

考 察

本研究は、スポチャンを教材とした一般体育を受講することで、受講者の社会的スキルや共感性がどのように変化するかを検討することを目的とした。

1. 共感性の変化

鳥ら(2020)の研究において、単に対人競技種目を実施すれば共感性が高まるわけではなく、種目によって共感性の変化に及ぼす影響要因が異なる可能性が示唆されている。これを踏まえ、ここでは一般体育における教材としてのスポチャンが、受講者の共感性にどのような変化を生じさせたのかについて検討する。

まず、他者指向的反応の得点が、1stと比較して3rdで有意に向上していた。他者指向的反応は、他者に焦点づけられた情緒反応を示す因子で、共感性の中心的な下位概念である(木野・鈴木, 2016)。先行研究において、青年期にあたる大学生は情緒面(他者指向的反応・自己指向的反応)が変化しにくい(三木, 2015)ことが示唆されている。しかしながら、本研究においては他者指向的反応のみであったが、授業後にこの下位尺度得点が向上したことは特筆すべき点である。このような結果となった要因として、スポチャンの特徴でもある打具を用いて「相手を打つこと」や「相手に打たれること」によって、受講者の相手への配慮が喚起されたためと推察できる。剣道を教材とした元嶋・坂入(2019)の研究においては、竹刀を介して相手を直接打突する、互いに痛みを共有するという剣道の種目特性が、自分が主体となった先行経験(剣道授業における打たれた痛み)を相手に同一視することによって他者理解が深まり、「相手も同じように痛いかもしれない」という相手への配慮と打突への抵抗感が生まれたと推測している。本授業においては、剣道で使用する竹刀と比較して、打たれても痛みが少ないエアソフト剣を用いたため、剣道とは異なり、「痛み」によって相手への配慮が喚起された可能性は低い。一方で、受講者が日常生活の中で他者を「打つ」、「叩く」場面に遭遇することは極めて稀である。また、そのような場面は体育のような身体活動を行なう場面においても、武道種目以外には経験することは難しいものである。特に、打具を用いて積極的に相手を「打つ」または「打たれる」という場面に遭遇することは少ない。そのため、スポチャンに取り組む中で経験した「相手を打つこと」や「相手に打たれること」が受講者の他者指向的反応に影響を及ぼした可能性が高い。また、現在のコロナ禍においては、ソーシャルディスタンスが推奨されているため、受講者は他者との身体的な接触頻度が少ない傾向にある。こういった状況下での他者との身体的な接触や日常生活で経験することのない活動(相手を打つことや打たれること)をしたことが、この下位尺度得点を向上させた可能性もある。だが、本研究の Protokol では言及することはできないため、1つの可能性として挙げておきたい。

そして、視点取得の得点が1stおよび2ndと比較して3rdで有意に向上していた。視点取得は、相手の立場からその他者を理解しようとする傾向を示す因子である。換言すると、相手の立場に立って考えたり、予想を立てたりする能力とされているため、対人競技種目に取り組むことで向上が望める因子である。スポチャンの競技特性上、至近距離で相手と対峙し、複雑かつ高速な攻防の中から有効打突の獲得を目指さなければならない。そのため、自分勝手に打突をするのではなく、相手の反応を見ながら打突を行なうことが要求されることから、この下位尺度得点が向上したと考えられる。また、スポチャンでは「打っても打たれない、勝たなくても負けない」という護身道の考え方を尊重しているため、自身が有効打突となり得る打突をしたとしても、同時に相手から打突をされてしまう攻撃の仕方は戒められている(相打ちの戒め)。つまり、自身が相手を打突する際に自身の視点や考え方のみで攻防を組み立ててしまうと、相手からの反撃を受けやすくなってしまふ。そのため、常に相手からの視点や考え方を持ちながら自身の攻防を展開する必要がある。上述のような駆け引きを繰り返し行なったことも視点取得の向上に寄与したと考えられる。

また、加納・山本（2020）によると、課題を制約することは、共感の育成にも適用可能であることが示されている。そのため、本授業においても様々な制約を付して授業を展開したことが、結果に影響した可能性も考えられる。最も大きな制約は、先述の「相打ちをすることはいけない」というものであるが、本授業において受講者に提示した制約の例としては、有効な打突範囲を上半身のみ、下半身のみに絞った試合や長剣対小太刀のように使用する打具に変化を持たせた点が挙げられる。このように制約を付しながら授業を展開することで、相手がどのように打ってくるかという意図をより理解しやすくなり、受講者の共感性の変化に影響した可能性もある。

さらに、視点取得については2nd から3rd においても向上をしていたが、これには本授業の後半部分（第12回目、第13回目）で通常の団体戦に加え、合戦や乱戦形式の団体戦を実施したことがこのような結果につながったと考えられる。スポチャンでは、1対1の個人戦を数試合行なう通常の団体戦だけでなく、合戦や乱戦形式の団体戦も実施することができる。武道種目における団体戦では、団体戦と言いつつも1対1で対戦する形式のため、試合場の中で他のチームメイトと協力・連携をすることはできない。しかしながら、スポチャンにおいては、バスケットボールやサッカーのように同じ試合場の中で役割分担をしたり、コミュニケーションや連携を取りながら試合を行なうこともできる^{注1}。また、言語コミュニケーションが取りにくい交流においては、より意識的に対象の視点に立つ機会が多くなるため、視点取得の下位尺度得点が向上する（三木、2015）ことが報告されている。スポチャンの合戦や乱戦形式の団体戦においては、面を着用して競技を実施することに加え、チームメイトと距離を取って競技を行なう場面もあるため、こういった状況も結果に作用した可能性がある。以上のことから、授業後半においても視点取得が向上していたと考えられる。

2. 社会的スキルの変化

本研究の結果から、対象者のKiSS-18における全ての下位尺度得点が授業前よりも授業後に向上していた。この結果は、学校体育やスポーツ活動の経験が受講者の社会的スキルを向上させるという先行研究の知見（野口ら、2013；杉山、2005）を支持するものであった。高橋ら（2019）によれば、単に継続的な運動を行なうだけでは、社会的スキルは効果的に向上しないことが示唆されているため、本授業が対象者の社会的スキルを変化させた要因について考察する。

まず、KiSS-18の合計得点が1st から3rd にかけて向上した。この結果については、授業全体を通して、アイスブレイクを実施し、その後に実施した対面授業や遠隔授業において、積極的にグループワークを実施したことが結果に関与したと推察できる。また、高山（2016）の研究において、大学生を対象とした剣道授業における技術練習の際に、相手を固定したグループでは社会的スキルの向上が見られないものの、毎時の技術練習を異なる相手と実施したグループでは社会的スキルが有意に向上することが報告されている。本授業においても、大部分で相手を固定せずに運動や課題などを実施したため、この点が受講者の社会的スキルの向上に寄与したと考えられる。また、受講者のこれまでの運動経験やスポチャンと類似した身体活動である剣道の経験により技能の修得状況に差があったことが、社会的スキルの向上に寄与した可能性もある。梅垣ら（2018）によれば、体育授業においてチームを編成する際、メンバーの技能が異質な場合^{注2}、お互いの技能差が大きいため、様々なアドバイスが行なわれ、集団的、協力的な関わり合い活動が活発に行なわれることを示唆している。さらに、受講者全員がスポチャンという教材を初体験であったことも影響していると考えられる。本授業で教材としたスポチャンは、本授業の受講者の9割が幼少期に遊戯として経験した「チャンバラごっこ」に類似していたが、スポーツとしての競技ルールが明確に定められており、そのルールに則って競技を行なうことが求められる。したがって、ルールの理解を深めるためのコミュニケーションが受講者同士で図られた可能性や、後半では団体戦（合戦や乱戦を含む）による授業が実施されたことから、戦略や戦術に関するグループ内での話し合いなどの活動が自身の試合時間以外の時間（休憩含む）で活発に行な

われたことがこのような結果につながったと推察できる。

続いて、社会的スキルを構成する各下位尺度についても、対応のある一元配置分散分析を行なった。その結果、「初歩的なスキル」、「高度なスキル」、「攻撃に代わるスキル」、「計画のスキル」は1stと比較して、2ndで有意に向上していた。本授業の前半ではアイスブレイクの実施や対面形式での授業によって、他の受講生との関係開始が求められる授業展開であったこともあり、社会的スキルの中でも関係開始に関連する「初歩的なスキル」と「高度なスキル」の得点が2ndで有意に向上したと考えられる。また、第3回目と第4回目の授業では、ペアを組んでのストレッチやスポチャンの打ち方や受け方を実践するなど、相手の状況に配慮しながら学習を進めていく内容であったことから、相手を助けることやトラブル処理に関連する「攻撃に代わるスキル」の得点が2ndで向上したことが考えられる。そして、第5回目と第6回目の授業ではBORを用いてグループごとに試合動画を視聴し、良い点や改善点を共有したり、4～5人グループになって形を披露し合うことで、形をより良く行なうための意見交換などが行なわれたことにより、問題解決場面において必要とされる「計画のスキル」の得点が2ndで有意に向上したことも考えられる。

「感情処理のスキル」および「ストレスを処理するスキル」は3rdで有意に向上する結果となった。これは、授業の後半である第12回目と第13回目の授業で団体戦（合戦や乱戦を含む）を実施したことがこのような結果につながったと考えられる。団体戦では、個人戦と比較して受講者自身やチームメイトの感情が表出する場面が多く、その感情をコントロールすることが求められる状況だったことや、戦術や戦略などグループでの話し合いの場面で、様々な意見が飛び合う状況においても感情をコントロールしながら課題解決に向かうことが求められる状況だったことから、これらの得点が2ndではなく、3rdになって有意に向上したと考えられる。

このように、「初歩的なスキル」、「高度なスキル」、「攻撃に代わるスキル」、「計画のスキル」については2ndで有意に向上し、また「感情処理のスキル」、「ストレスを処理するスキル」は3rdにおいて有意に向上するという結果となり、それぞれのスキルで変化の仕方に違いが見られた。安藤（1994）によれば、社会的スキルにおける自己開示は、世間話をする第1段階、知り合いに関する話題や軽い関心ごとを取り上げる第2段階、自分の意見や考えをいう第3段階、感情を表す第4段階に発展するとしている。本研究の結果は、概ねこの発展段階に沿っており、本授業が段階を踏んで受講者の社会的スキルを醸成する内容であったことが示唆された。加えて、スポチャンという教材が身体活動だけでなく、一般体育のねらいの1つでもある受講者同士の相互作用やコミュニケーションを育むためにも有用な教材であると考えられた。

3. 今後の検討課題

本研究はスポチャンを教材とした一般体育が、受講者の共感性や社会的スキルにどのような変化を生じさせるかを検証した先導的な研究であるため、多くの限界を内包している。まず、本研究の調査対象者が少数であったため、今後はより対象者数を増やし、本研究で得られたデータの再現性や妥当性を確認する必要がある。本研究ではコントロール群や他種目の健スポ実習受講者との比較を行っていないため、本研究で得られた結果がスポチャンの実践によるものなのか、健スポ実習における身体活動によるものなのか、明確に言及することはできない。また、須田（2011）や高橋ら（2019）の研究では学校体育やスポーツ活動の経験が社会的スキルに影響を与えない可能性があることも指摘されているため、この点については検討の余地がある。さらに、本研究で焦点を当てた共感性や社会的スキルについては、家庭環境や友人関係、教育環境が関与するため（Boele et al., 2019）、これらの要因に関する調査も必要である。鳥ら（2021）が「学校体育のような教育環境は、多種多様な運動・スポーツ種目の経験や、友人関係の構築を伴う場でもあるため、学校体育のどのような要素が共感性の向上に有用であるかについて、慎重に検討する必要がある」と指摘するように、この部分については、今後より詳細に検討をしていく必要がある。

最後に、本研究の対象者は大学生であったため、中学生や高校生を対象とした検証を行なうことで、学校体育の教材としてのスポチャンの活用につながると考えられる。さらなる研究を積み重ね、スポチャンの優位点を見出すことができれば、学校体育においてスポチャンが活用される事例も増え、スポチャンの普及・発展に寄与することができると思う。

結 論

本研究は、日本大学文理学部で開講されている健康・スポーツ教育実習（スポーツチャンバラ）を受講した学生の共感性および社会的スキルがどのように変化するかを明らかにすることを目的に実施した。その結果、以下の知見を得ることができた。

- ① 受講者の共感性（他者指向的反応、視点取得）は、授業前と比較して授業後で有意に向上した。
- ② 受講者の社会的スキル（初歩的なスキル、高度なスキル、感情処理のスキル、攻撃に代わるスキル、ストレスを処理するスキル、計画のスキル）は、授業前と比較して授業後で有意に向上した。

今後、さらなる検証が必要ではあるが、スポチャンの授業が受講者の共感性や社会的スキルの向上に有効である可能性が示唆され、一般体育における教材としてのスポチャンの有用性を確認することができた。

注釈

注1 合戦では、チームの中で総大将を決め、自チームの総大将を守りながら相手チームの総大将を倒しに行く形式のゲーム設定が可能である。また、相手全員を殲滅するようなゲームにおいては、チームを編成する際に、構成人数や性別、使用する用具を適宜変更することによって、多種多様なゲーム展開が期待できる。

注2 技能、性格、あるいは、知識に関して差異の大きい者同士がメンバーとして集まった場合を指す。

引用・参考文献

安藤清志（1994）「見せる自分／見せない自分：自己提示の社会心理学」，サイエンス社：東京。

Boele, S. Van, Der. Graaff, J., de. Wied, M., Van. der. Valk, IE., Crocetti, E., and Branje, S. (2019) 「Linking Parent-Child and Peer Relationship Quality to Empathy in Adolescence: A Multilevel Meta-Analysis.」 『J Youth Adolesc』, 48 (6) : 1033-1055.

中央教育審議会（2018）「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」 https://www.mext.go.jp/content/20200312-mxt_koutou01-100006282_1.pdf, (参照日：2022年1月1日)。

Cohen, J. (1988) *Statistical power analysis for the behavioral sciences* (2nd ed.). Hillsdale, NJ : Lawrence Erlbaum.

Goldstein, A. P., Sprafkin, R. P., Gershaw, N. J., and Klein, P. (1986) 「The adolescent: social skill training through structured learning.」 Pergamon Press.

橋本公雄（2012）「体育実技授業における心理社会的要因を媒介としたメンタルヘルス改善・向上効果のモデル構築」『大学体育学』第9号, 57-67ページ。

平野優子（2005）「大学低学年生におけるデイリー・ハッスルと入学前後のストレスフルで重大な出来事との関連」『学校保健研究』第47巻(3), 201-208ページ。

- 池田耕二・岩本雅浩・武部恭一・金子翼・武政誠一・長尾徹（1997）「車椅子スポーツチャンバラの紹介：リハビリテーションの一環として」『理学療法学』第24回大会号，557ページ。
- 井芹まい（2016）「大学生の共感性研究の動向」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』第24号，99-107ページ。
- 糸岡夕里・日野克博・中岡祐紀・佐伯沙織・池内裕紀（2011）「中学校における「剣道」の授業実践：生徒の剣道に対するイメージに着目して」『愛媛大学教育学部紀要』第58巻，137-144ページ。
- Kajita, K., Kiuchi, A., Park, K., Lin, P., Hasegawa, E., and Nakagawa, A. (2019) 「A comprehensive and comparative survey study reveals the current status of physical education in liberal arts higher education courses at colleges and universities in Japan, Korea and Taiwan.」『筑波大学体育系紀要』第42巻，57-61ページ。
- 加納岳拓・山本裕二（2020）「他者への共感の育成に向けた体育授業の可能性—小学校1年生の教室授業と体育授業における行動の分析—」『スポーツ心理学研究』第47巻（1），13-28ページ。
- 川戸湧也・長谷川悦示（2019）「大学体育における柔道授業の授業設計の実態」『大学体育スポーツ学研究』第16巻，27-42ページ。
- 木原資裕・江口大祐・森明日香・草間益良夫・坂東隆男（2009）「小学校における簡易試作用具を用いた剣道授業実践」『武道学研究』第42巻（1），1-9ページ。
- 木原資裕・本村賢二・江口大祐（2004）「剣道初心者指導における使用道具の検討」『武道学研究』第37回大会号，29ページ。
- 菊池章夫（1988）「思いやりを科学する—向社会的行動の心理とスキル—（第3版）」川島書店：東京，187-204ページ。
- 木野和代・鈴木有美（2016）「多次元共感性尺度（MES）10項目短縮版の検討」『宮城学院女子大学研究論文集』第123号，37-52ページ。
- 松永真由美・岩本澄子（2008）「現代青年の友人関係に関する研究」『久留米大学心理学研究』7号，77-86ページ。
- 三木澄代（2015）「保護者養成のための実習と大学生の共感性に関する一考察」『環太平洋大学研究紀要』第9巻，15-20ページ。
- 水本篤・竹内理（2008）「研究論文における効果量報告のために—基礎的概念と注意点—」『関西英語教育学会紀要英語教育研究』第31号，57-66ページ。
- 水本篤・竹内理（2011）「効果量と検定力分析入門—統計的検定を正しく使うために—」『より良い外国語教育のための方法 外国語教育メディア学会（LET）関西支部メソドロロジー研究部会2010年度報告論集』48巻，47-73ページ。
- 元嶋菜美香・坂入洋右（2019）「中学校剣道授業が生徒の共感性に与える影響—ダンス授業との比較から—」『長崎国際大学論叢』第19巻，21-30ページ。
- 奈良隆章・木内敦詞（2021）「大学体育授業における自己開示経験がライフスキル獲得に及ぼす影響」『体育学研究』第66巻，515-531ページ。
- 日本大学文理学部（2021）「学部要覧（2021年度）」正文社印刷：東京，63ページ。
- 野口和行・須田芳正・村松憲・村山光義・加藤大仁（2013）「学生の社会的スキル向上を目指した体育実技実践の試み」『慶應義塾大学体育研究所紀要』第52巻（1），11-20ページ。
- 岡澤祥訓・辰巳喜之・竹住和宏・河野成伸（1999）「体育授業におけるスポーツチャンバラの有効性の検討」『教育実践研究指導センター研究紀要』第8号，81-88ページ。
- 柴田一浩・根本真希（2015）「中学校における剣道の授業改善の試みと成果」『流通経済大学スポーツ健康科学部紀要』第8巻，1-11ページ。
- 島孟留・中雄勇人・田井健太郎・霜触智紀・木山慶子・新井淑弘・鬼澤陽子（2021）「大学生の運動・スポーツ活動の頻度や体力・運動能力と共感性の関連」『群馬大学共同教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編』第56巻，109-117ページ。
- 島孟留・田井健太郎・霜触智紀（2020）「体育実習が大学生の共感性並びに社会的スキルに及ぼす影響—柔道実習の効果に対する一考察—」『群馬大学教育学部紀要 芸術・技術・体育・生活科学編』第55巻，61-67ページ。
- 清水安夫・尼崎光洋・煙山千尋・宮崎光次・武田一・川井明（2010）「大学体育における野外教育活動の可能性の検討：プロ

- ジェクトアドベンチャー・プログラムを導入したキャンプ活動におけるリーダーシップ及びフォロワーシップの養成」『大学体育学』第7号, 25-39 ページ.
- 白崎研司・安井友康・増田貴人 (2001) 「障害者のスポーツチャンバラ：北海道における取り組みから」『年報いわみざわ：初等教育・教師教育研究』第22号, 135-142 ページ.
- 須田和也 (2011) 「大学生の社会的スキルとスポーツ経験および運動有能感に関する研究」『共栄大学研究論集』第9号, 37-53 ページ.
- 杉山佳生 (2005) 「スポーツによるライフスキルとソーシャルスキル」『体育の科学』第55巻 (2), 92-96 ページ.
- 杉山佳生 (2008) 「スポーツ実践授業におけるコミュニケーションスキル向上の可能性」『大学体育学』第5号, 3-11 ページ.
- 鈴木有美・木野和代 (2008) 「多次元共感性尺度 (MES) の作成—自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて—」『教育心理学研究』第56巻, 487-497 ページ.
- 鈴木有美・木野和代 (2015) 「社会的スキルおよび共感反応の指向性からみた大学生のウェルビーイング」『実験社会心理学研究』第54巻 (2), 125-133 ページ.
- 高橋正則・難波皓平・猪俣克・磯貝浩久 (2019) 「大学テニス部員のコミュニケーションスキル向上を目指した介入プログラムの効果」『総合文化研究』, 第24巻 (1), 175-194 ページ.
- 高山昌子 (2016) 「ライフスキル獲得を目指した剣道授業に関する一考察」『太成学院大学紀要』第18巻, 31-36 ページ.
- 田邊哲人 (2002) 「スポチャンをやろう！」叢文社：東京.
- 梅垣明美・大友智・上田憲嗣・深田直宏・吉井健人・宮尾夏姫 (2018) 「社会的スキルの向上を促す体育における指導モデル (ASKS モデル) の検討：チーム編成に着目して」『体育学研究』第63巻 (1), 367-381 ページ.
- 全国大学体育連合・日本体育学会・日本女子体育連盟・日本体力医学会・全国体育系大学学長・学部長会・日本教育大学協会 (2009) 「学士課程教育に関する共同声明」<http://daitairen.or.jp/2013/wp-content/uploads/2014/08/7469eb961a8c88f812bb9a473abab12d.pdf>, (参照日 2022 年 1 月 2 日).

研究論文

コロナ禍における大学サークルの困難と可能性 —フォルクローレ演奏サークルを事例として—

間篠 剛留*

日本大学文理学部

Difficulties and Possibilities of University Circle Activities During the COVID-19 Pandemic: A Case Study of Andean Music Performance Circles

Takeru MASHINO

College of Humanities and Sciences, Nihon University

This study sought to clarify the actual situation of university circles during the COVID-19 pandemic and to obtain suggestions about the meaning of the actions taken by each circle. Although prior studies have indicated that circle activities are in crisis in the pandemic, there has been little accumulation of descriptions of specific situations of difficulty. In response to this trend, this study conducted a case study of an Andean folk music performance circle—an example of minor music performance circles—by interviewing their current university student members (N=6) and alumni (N=3) to uncover the specific restrictions to which it was subject; the survival strategies it adopted in the face of such restrictions; and how the university, graduates, and the local community were involved in these strategies. Restrictions on circle activities differed greatly from one university to another, partly due to student government activities. The different situations across universities made it difficult to share know-how and realize the benefits of such knowledge exchanges, which made circle-circle cooperation difficult. On the other hand, differences in resources across universities and circles encouraged cooperation between circles at different universities. Generally, each circle worked to maintain a student culture in which playing minor music was an enjoyable activity; notably, the pandemic may have prompted circles to rebuild relationships with people or groups outside their current members to achieve this purpose.

キーワード：課外活動，サークル活動，コロナ禍，卒業生，地域社会

Keywords:

Extracurricular Activities, Circle Activities, COVID-19 Pandemic, Alumni, Local Communities

はじめに

本研究は、コロナ禍における大学サークルの実態を明らかにするとともに、現在のサークルの危機から学生たちがサークル活動にどのような可能性を見出そうとしているのかを明らかにすることを目的とする。

2020年にはじまるコロナ禍において各大学の教育活動は大きく制限されたが、その制限はサークル活動

*E-mail: mashino.takeru@nihon-u.ac.jp

投稿：2022年5月11日 受理：2022年11月17日

に対して特に強いものだった。全国大学生生活協同組合連合会（2022）によると、1年生のサークル所属は2019年秋の82.8%から2020年秋には48.7%と大きく減少した。単に所属率が低下しただけでなく、課外活動が満足に実施できていない状況についても様々な大学で報告されている（e.g., 東京大学消費生活協同組合, 2021; 立命館大学出版社, 2020）。2021年半ばになると、文部科学省が課外活動における感染症対策について情報共有を行うなど（文部科学省, 2021）、活動再開に向けて歩みは進められたが、それでも課題は多い。2021年夏に朝日新聞・河合塾が共同で実施した調査によると、「各大学の学長が現在大きな課題と考えている項目」のうち、最も回答が多かったのは「課外活動の実施」だった。「授業」・「研究」については「全学生に許可」する大学が8割を超える一方、「課外活動」は34%にとどまっており、課外活動に関して再開が遅れている状況が見られる（『朝日新聞』2021年9月27日朝刊24面）。活動制限の長期化はサークルの文化継承を困難にし、活動存続の危機を引き起こしている（石田, 2021）。

サークル活動への参加が大学生活への適応や多様なスキル獲得などに影響を与えていることはすでに複数の研究で指摘されてきた（e.g., 池田・伏木・山内, 2018; 武内・浜島, 2005; 田澤・梅崎, 2011）。サークル活動が大学生活や大学教育に対して持つ意味は少なくない。しかし、コロナ禍での実態に関しては十分に明らかになっていない。課外活動の中でも大学スポーツに関しては、教員が関わることも多いこともあってか、研究や報告は少なくないが（e.g., 江原, 2021; 佐々木, 2021; 吉田, 2021）、サークル活動に対しては相対的に関心が低い。サークル活動は、学生が自主的に立ち上げた課外活動団体の活動であるため、その実態も明らかになりにくいと考えられる。大学教育学会2021年大会では「コロナ時代の大学教育の挑戦—大学教育と学生生活の両面から—」と題するシンポジウムが開催されたが、サークル活動の危機は扱われなかった。日本高等教育学会『高等教育研究』第24集ではアフターコロナの「新たな大学像の模索」を目的とした特集が組まれたが、ここでもサークル活動はごく一部の言及にとどまった。

サークル活動の危機も含んでコロナ禍の影響を検討したものとしては、茨城大学人文社会科学部法律経済学科労働経済論ゼミナール・茨城大学学生団体学びと交流の秘密基地（2021）が挙げられる。ここではサークルに関して、大会やイベントの中止、そしてそれに伴い経験を十分に積めないまま下級生への引継ぎを迎えることなどによって、存続の危機に陥る団体があることが報告されている。しかしながら、サークル活動の具体的な実態はここでは扱われてはいない。そこにはサークル活動があまりに多様であり、実態をつかむのが困難だということもあるだろう。そこで本研究では、特定のサークル活動に限定して、そのサークルがコロナ禍によりどのような影響を受け、そのなかでどのように活動していたのかを明らかにする。

1 研究の方法と対象

上記の関心の下でとりうる方法は多様に考えられるが、本研究ではマイナー音楽サークル、具体的にはフォルクローレ演奏サークルを事例としてインタビュー調査を行う。マイナー音楽演奏サークルを取り上げる理由は、コロナ禍における活動の困難が特に大きいと考えられるからである。音楽演奏サークル、特に歌や管楽器の演奏を含むサークルは、感染対策上、通常期と同じような活動が難しい。さらに、マイナー音楽は他のメジャー音楽に比べて新入生に経験者が少ないため個人での練習が難しく、それゆえ新入生の獲得や演奏技術伝達に関しても苦戦が強いられたと考えられる。厳しい環境に置かれた事例を検討することによって、サークル支援を考える際に見落としがちな検討材料を得ることができるほか、危機に面して生じたサークルの可能性を見出すことも可能であろう。また、コロナ禍における学生の状況に関しては、前述の各種調査のようにアンケート調査がすでに多数実施されている。しかし、サークル活動の危機の具体的な状況は見えにくいし、大学間の差異も十分明らかにされてはこなかった。そのため、本研究では複数の大学の学生に対

してインタビュー調査を行い分析するという方法をとる。

分析に当たっては、サークル外との関係に注目する。サークルは趣味で集まる学生の閉じた世界と考えられがちだが、実際にはそうではない。大学当局や学内他団体との関係もあれば、他大学の同種のサークルや、卒業生、地域社会との関係もある。後述の通り、これらの関係は、危機に直面した各大学サークルの特徴を鮮やかに示すものとなっている。

インタビュー対象者は表1の通りである、各大学サークルの公式SNSを通じて協力を募るとともに、スノーボール法を用いて獲得した。必ずしも各サークルの代表者に限定せず、活動について十分説明できる程度に参加している者を対象者とした。インタビュー対象となった大学生はいずれも2019年入学者で、コロナ禍以前のサークルを9か月程度経験していた。卒業生はいずれも2019年卒業者であり、在学期間はコロナ禍と重なっていない。また、同じ大学の大学院に進学した者についても同サークルの卒業生として扱った。インタビューはZoomを用いたオンライン形式で約60分～90分、半構造化インタビュー法で実施し、対象者の承諾を得てICレコーダーで録音した。録音記録から逐語録を作成し、逐語録を本研究の分析データとした。また、本文の初稿はインタビュー対象者に送付し、発言内容について、事実と異なる箇所や、発言者の意図とは異なる恣意的な切り取りがないことを確認してもらった。質問項目は表2の通りである。なお、本研究の実施に当たっては、日本大学文学部研究倫理審査委員会の承認を得た（承認番号03-67）。インタビュー前には書面及び口頭にて、研究目的、研究協力の任意性と撤回の自由、研究成果の公表、匿名化等のプライバシーへの配慮などについて説明し、同意を得た。

2 コロナ禍前後でのサークルの活動の変化

インタビュー調査をもとに、各大学サークルのコロナ禍以前の活動概要（表3）、2020年度の活動（表4）、2021年度の活動（表5）をまとめた。大学祭や学生自治体、サークル棟等には大学ごとの固有名称があるが、匿名化のため一般的な名称に書き換えてある。インタビューの直接引用中にそれらがある場合、下線を付して示した。また、各大学によるサークル活動の制限については、可能な限り大学の公式発表に照らして確認を行った。例えば、インタビュー中に、学内でクラスターが発生したので活動禁止になったという旨の発言があった場合、大学の公式発表でその旨が明示されていない場合は大学の発表に合わせる形で示した。

表1 インタビュー対象者リスト

ID	所属/元所属	身分	インタビュー実施日
A	U大学(東北地方、国公立)	大学生	2022年1月17日
B	V大学(東京都、国公立)	大学生	2022年1月5日
C	V大学(東京都、国公立)	卒業生	2022年1月10日
D	W大学(東京都、私立)	大学生	2022年1月10日
E	X大学(神奈川県、私立)	大学生	2021年12月28日
F	X大学(神奈川県、私立)	卒業生	2021年12月27日
G	Y大学(神奈川県、私立)	大学生	2022年1月18日
H	Z大学(中部地方、国公立)	大学生	2022年1月17日
I	Z大学(中部地方、国公立)	卒業生	2022年1月22日

※カッコ書きで記した所在地は、各大学の本部ではなく、当該サークルが主として活動するキャンパスの所在地である。

表2 質問項目

現役大学生対象
1. サークルの活動概要
2. あなた自身にとって、大学のサークル活動とはどのようなものか
3. コロナ禍ではどのようにサークル活動を行ってきたか。そのなかでの問題や悩みにどのようなものがあったか
4. コロナ禍において、大学からサークルに対してどのような規制と支援があったか。また、大学からサークルに対してどのような支援が必要だと思うか
5. コロナ禍において、学外(他大学や卒業生、楽器店や地域社会等)とどのような連携をとっているか。また、どのような連携が必要だと思うか
卒業生対象
1. 当時のサークルの活動概要
2. あなた自身にとって、大学のサークル活動とはどのようなものか
3. コロナ禍の前後で、現役大学生との関わり方に変化はあったか
4. 卒業生は大学生のサークル活動どのように関与すべきだと考えるか
5. 大学からサークルに対してどのような支援が必要だと思うか

2-1. コロナ禍以前の活動

今回対象とした演奏サークルは、定期的に演奏練習を行い、学園祭をはじめとするイベントで演奏するのを主たる活動としている。表3に見られるように、コロナ禍以前には年間を通じて演奏機会が多数あった。

サークル外との関係では、複数の大学フォルクローレ演奏サークル合同で行う、春・冬の定期演奏会や「アンデス民俗音楽の調べ演奏会」がある。「コスキン・エン・ハポン」（以下「コスキン」と略）は福島県川俣町で開催されている日本最大のフォルクローレの演奏イベントであり、大学サークルだけでなく、一般のフォルクローレ愛好家やゲストとして呼ばれたプロの演奏家も演奏を披露する（www.cosquin.jp）。今回調査対象としたサークルの全てがこのコスキンに参加しており、同イベントは大学や地域、立場を越えた交流の機会となっていた。また、各大学サークルは地元地域の団体や施設から依頼されて演奏を行う機会があり、それが部員のモチベーション向上に寄与するとともに、大学サークルと地域との接点を提供していた。

2-2. 2020年度の活動

上記のように多様な活動を行っていたサークルであるが、2020年度になるとその活動は一変する（表4）。

2020年度前期は多くの大学において課外活動は禁止された。対面での新歓イベントは今回調査対象としたどの大学でも行われなかった。オンラインでの新入生勧誘も行われたが、その後サークルとしての活動が

表3 コロナ禍前の各大学サークルの年間の活動（著者作成）

	U大学	V大学	W大学	X大学	Y大学	Z大学
4月	・新入生歓迎イベントでの演奏 ・新入生勧誘	・新入生歓迎イベントでの演奏 ・新入生勧誘	・新入生歓迎イベントでの演奏 ・新入生勧誘	・新入生歓迎イベントでの演奏 ・新入生勧誘	・新入生歓迎イベントでの演奏 ・新入生勧誘	・新入生歓迎イベントでの演奏 ・新入生勧誘
5月	・合宿（新入生との親睦会）	・お寺での演奏会 ・大学祭（街頭演奏） ・春の定期演奏会（関東の大学合同）	・春の定期演奏会（関東の大学合同）	・春の定期演奏会（関東の大学合同）	・春の定期演奏会（関東の大学合同）	
6月	・特別支援学校での演奏	・サークルの定期演奏会			・大学祭	・大学祭
7月						・七夕演奏会
8月		・夏合宿	・地域の夏祭で演奏	・夏合宿	・夏合宿	・合宿
9月			・大学説明会で演奏 ・神社の行事で演奏	・夏ライブ		
10月	・コスキン参加 ・大学祭	・コスキン参加	・コスキン参加	・コスキン参加	・コスキン参加	・コスキン参加
11月		・大学祭（街頭演奏と室内演奏）	・大学祭（ステージ演奏、室内演奏）	・大学祭（ステージ演奏、室内演奏）	・大学祭（ステージ演奏）	
12月	・クリスマスコンサート	・冬の定期演奏会（関東の大学合同）	・大学のクリスマス会（ステージ演奏） ・冬の定期演奏会（関東の大学合同）	・冬の定期演奏会（関東の大学合同）	・冬の定期演奏会（関東の大学合同）	・サークルの定期演奏会
1月						
2月	・追いコン（卒業生を送る会）	・冬合宿		・冬合宿	・冬合宿	
3月		・卒業ライブ ・アンデス民俗音楽の調べ演奏会参加	・春合宿 ・地域の桜祭で演奏	・卒業ライブ ・アンデス民俗音楽の調べ演奏会参加	・アンデス民俗音楽の調べ演奏会参加	・アンデス民俗音楽の調べ演奏会参加
通常活動日（練習日）	週1回	週1回	週2回	週2回	週2回	週3回
その他	・依頼演奏（イベントでの街頭演奏や、高齢者介護施設等での演奏）が年4～6回	・依頼演奏が年2～3回		・依頼演奏が年1～2回	・依頼演奏が年に2回程度	・卒業生を招いての品評会を数回 ・依頼演奏が月1回程度
部員数（1学年）	5人前後	10人弱程度（内学外生が2人程度）	2人程度	5～10人程度	5人程度	10人前後

できないため、部員獲得に大きな困難があった。それは例えば次のような語りに見られる。

4月とかはオンラインの方で勧誘してたりはしてたんですけど、でも入ってもらってもやることがない、やらせることがないっていうか、やり様がなかったので、2020年は[新入部員は]0人でした。(Bさん)

今年 [= 2021年] も去年 [= 2020年] もオンラインでの新歓で興味を持ってくれた方は数人ずついたんですけど、[中略] 入ってもらったところで実際練習ができなかったなのでその結局その入ってくれた方々に何のケアもできないまま1年、2年と過ぎてしまったので。(Eさん)

特に東京・神奈川にキャンパスのある私立大学W・X・Yではほぼ1年間対面活動が休止となったため、この影響は大きかった。オンラインセッションという可能性もありはしたし、実際にY大学のGさんは他大学の学生とそうした活動を行っていた。しかし、通信遅延なくセッションを行うには専用のアプリケーションや機器が必要となるため、多くの大学生には難しかったと考えられる。対面活動ができなければ初心者への指導も難しいし、実店舗での楽器選びに付き合うこともできない。サークルが集団としての凝集性を高めるには目標を共有し様々な活動を行っていくことが必要であるが(横山, 2011)、対面活動ができないこ

表4 各サークルの2021年度の活動と各大学の状況(著者作成)

U大学	<ul style="list-style-type: none"> ・5月までは授業は実施されず、サークル活動も禁止 ・県外移動については事前届け出が必要とされ、従事できるアルバイトについても許可制がとられた ・6月～12月は、県内で県内者のみでの、練習等の活動のみ許可(学外での演奏会等は実施できず) ・10月の大学祭、12月のクリスマスコンサートは中止 ・1月半ば～3月半ばまで、再び活動禁止(追いコンはオンラインで実施) ・授業は、前期は基本的にオンライン、後期は一部対面授業が再開
V大学	<ul style="list-style-type: none"> ・前年度3月末からサークル活動禁止 ・8月上旬に活動再開となるが、サークル棟は荷物の取り出しを除いて使用不可、活動は外部で行うことに ・春の大学祭が9月にオンライン開催(サークルとしては学外の公園等で録画した演奏を配信) ・秋の大学祭が11月にオンライン開催(スタジオを借り音響機器をつけて録画した演奏を配信) ・11月に同大学の別のサークルで活動中に発生したとみられる陽性者が複数確認されたが、キャンパス外で発生した事例だったこともあり、サークル活動自体は禁止にはならず ・授業は前期は基本的にオンライン、後期は語学科目について2週に1回対面授業再開
W大学	<ul style="list-style-type: none"> ・年度を通してサークルの対面活動が禁止となったため、実質的に活動ができず ・授業も原則的にオンライン
X大学	<ul style="list-style-type: none"> ・サークル活動に対しては自粛要請が出され、対面式の新歓活動は全面禁止 ・6月上旬までキャンパス立入禁止で、6月以降もサークル活動はオンライン以外全面的に自粛することが求められた。 ・大学祭はオンライン開催(サークルとしては事前に録画した演奏を配信) ・3月から部室に入室することはでき、申請したうえでの活動もできたが、演奏に対する規制は依然厳しく、十分な活動はできず ・授業は前期は基本的にオンライン、後期に対面が一部再開
Y大学	<ul style="list-style-type: none"> ・新歓は大学全体で無し ・2020年度はSNSも含めて何も動けず ・部室には30分間3名だけ入れたが、許可申請の手間もありあまり入れず、埃やカビが発生し、だめになった楽器もあった。 ・共有楽器のうちカビさせてはいけない大事なものは、インタビュー対象者が個人的に持ちかえって保管していた ・授業は基本オンラインで、後期から対面が一部再開
Z大学	<ul style="list-style-type: none"> ・学期当初からずっと活動禁止で、対面での新入生勧誘活動も禁止 ・6月に対面での新入生勧誘が解禁されたが、入部しても活動ができないため実質的に勧誘はできず ・前期のイベントは全ては中止 ・9月に活動解禁となり10月から活動を再開したが、それまで18時～21時に行っていたのを17時からに前倒して活動することに ・活動解禁時はサークル棟は通常通り使用可能だったが、大学の教室を借りて練習することはできず ・12月の定期演奏会は中止し、小規模な部内演奏会を学内で開催(10月から入った新入生の発表の場としても活用した) ・外部から演奏の依頼はあっても、受けられず ・その後感染状況によって、活動時間の短縮が求められることもあったが、2020年度の間は活動禁止にはならず ・授業は基本的にオンライン

とによってそれが非常に困難となった。これら3サークルでは、2020年度の新入部員は0名だった。

また、大学の正課の教育活動がコロナ禍への対応を進める中で、個人的な練習やオンラインの活動の時間を確保することが難しくなったという状況もある。Gさんは次のように語っている。

大学のオンライン授業ってすごい課題の量が多くて質が悪いみたいな話があって、[中略][課外活動と課題の]どっちかを削るか命を削るかみたいな感じで、なかなかしんどかったですね。[中略]他の部員の子とかは本当に一切楽器に触れることなんてしなかったっていう風には聞いています。

オンライン授業の質をこのように一般化できるかについては疑問の余地があるが、勉強とサークル活動の両立が困難になったことは確かだろう。実際、学生の1週間の大学の勉強時間は、2019年が337.3分、2020年は441.1分、2021年は494.8分と、大幅に増加している(全国大学生生活協同組合連合会、2022)。

一方、今回の調査では、国公立大学における活動再開が早かった。東北地方のU大学では6月から、東京都のV大学と中部地方のZ大学では後期から、それぞれ対面活動が解禁された。しかし、大学を挙げての新歓イベントがなくなってしまったこともあって、2020年度の新入部員はそれぞれ2名、0名、4名と、通常より少なかった。狭い部室で練習することが感染リスク上できなくなったり、通常の練習場所が使用禁止になったりするなど、活動場所の確保にも困難が伴っていた。さらに、演奏会が中止になったことにより、モチベーションの維持も大きな問題となった。Z大学のHさんは次のように語る。

演奏機会がなかったり練習できないから演奏できないっていうのはもちろんなんですけど、その大前提として先が見えなくて、いつ自分の発表の場所があるかわからないし、いつ活動が中断するかわからない、いつこの新歓で人が来て演奏を見に来てくれるかわからないっていう中で、音を出し続けるモチベーションの維持みたいなのはすごく大変だったなって思います。

後述の通り、後から見れば早い時期に活動が解禁されたZ大学は恵まれた環境にあったと言えるかもしれない。しかし、先が見えない中で気持ちを維持することの困難は、他の大学の状況と同じものだった。

また、Dさんはオンライン授業とサークル活動の相性の悪さも指摘している。オンライン授業を大学で受けられる環境が整備されていなければ、授業は自宅で受けなければならず、特に遠方に住んでいる学生はサークル活動に参加しづらい状況があった。この状況はZ大学ではその後改善されていったようであるが、受講環境の整備はサークル活動を支援することにもつながると言える。

2-3. 2021年度の活動

2021年度になるとサークル活動をめぐる状況について大学間の差が広がっていった(表5)。前年度比較的早い段階で活動が再開された国公立のV大学・Z大学はほぼ継続して活動を行っており、オンライン開催となった大学祭にも参加し、新入部員も獲得できている。

ここには学生の自治団体の存在が大きいように思われる。例えばV大学では、大学祭実行委員会からサークルに対して、オンライン開催のための補助金が約30万円給付された。これによってV大学のサークルは、外部のスタジオを借りて演奏動画を撮影することについて金銭的・精神的負担が軽くなったという。また、春の大学祭が9月に延期になった際も、結果は春開催中止となったが、ぎりぎりまで同委員会が大学当局と交渉していたようだったとBさんは語っている。さらに、キャンパスの自治会が大学当局に訴えたことも、サークル活動解禁が早まった要因だったのではないかと語っている。同様にZ大学でも、サークルの大学施設利用に関して文化系サークル取りまとめる学生団体が大学と交渉していたとHさんは語っている。

文化系サークルをまとめている学生団体っていうのがあるんですけど、すごく頑張ってくれたみたいで。別にZ大学フォルクがすごく抗議したわけじゃないんですけど、やっぱり他にもそこを使いたいで言っているサークルがいたみたいで、なんか貸してくれるようになりました。[中略] Z大学は優しくて、場所と時間さえ、この時間なら1年生がいっぱいいる校舎の前で演奏していいよって言うので、ゲリラ演奏みたいな形で路上演奏もできたので、本当に感謝ですね。それを何とか掴んでくれた学生団体には本当、ありがとうって気持ちです。[中略] 学生運動の名残みたいな考えが強めの団体で、基本的には大学の方針には反対っていう前提の団体なので [中略] 今回はそれがすごくプラスに働いてくれたなという感じです。

上記2大学とは異なり、国公立の大学で苦しんだのが東北地方のU大学である。感染拡大に伴って5月に活動が再び制限され、6月に延期して企画していた合宿は中止となった。いくつかの演奏依頼やコスキンも、練習時間が確保できなかったことから断念している。11月の依頼演奏や12月のクリスマスコンサートは実施できたものの、1月には再び活動禁止となった。そのため、いつサークル活動が禁止になるかわからない状態で活動に対するモチベーションを維持するのが苦しいとAさんは語っている。

一方で、私立でありながらV大学・Z大学に似た状況が現れたのがY大学である。Y大学は比較的大規模の大学であるが、文化系サークルを取りまとめる学生団体が大学当局と交渉することで、緊急事態宣言明けの11月に秋新歓が実施された。また、同団体は毎年公認サークルに交付金を支給しているが、2021年度は通常の交付金に加えてコロナ給付金31万円を支給した。Y大学のサークルでは部室に入れなかった期間にカビや埃の被害により部の所有楽器のいくつかが使用不能になってしまったが、この給付金によってそれらを新たに買いそろえることができた。また、上手な生の演奏を聞く機会が乏しいという点に対しても、この交付金を使って、外部で開催されているフォルクローレのライブ演奏を聞きに行くという対策がとれた。

これに対して、大規模私立大学のX大学では、インタビュー調査の限りでは、大学当局と学生団体とのやりとりがうまくいっていなかったことが見て取れる。Eさんは次のように語っている。

オンライン新歓の話も、あれは学生団体が主催でやってるもので、大学からのものではなかったですし、大学ポータルサイトにぽつんとニュースで載っていて。[中略] そもそも新歓サイトの存在を知らないような1年生でいっぱいだと。[中略] 今までだったら入学式の時にサークル紹介のパンフレットも配られたと思うんですけど、今年は入学式ができてないのでそういうのもないですし、みんな自力で探すしかなかったんですね。Twitterとかネット検索とかでっていうのがちょっとこちらから見て大変そうだなと思ったので、そっちをもうちょっと大学がサポートできたのかなっていう感じはします。

大規模な大学の場合、サークルの利益をまとめる学生団体と大学当局のやりとりが、サークル活動に対する制限や支援に大きく関わっていると言える。

中小規模大学においては、別の状況が見られる。私立中小規模のW大学では、大学学生部の職員とサークル部員とが丁寧に交渉して、現状でできる範囲の取組を模索していた。W大学のDさんは次のように語る。

とても人数が小規模な大学ということもありまして、とにかく私が学生課の方に、存続のためにあれしたいこれしたいとか案を持っていったら、実現できた企画はとても少なかったのですが、親身に話を聞いてくださったりとか、何とかして実現してあげようという姿勢とかもすごく感じることはできたので。W大限定かも知れないけれど、行けば助けてもらえるという、行けば支援はいただけるという状況はありました。

表5 各サークルの2021年度の活動と各大学の状況（著者作成）

U大学	<ul style="list-style-type: none"> ・4月の部活紹介は無かったものの、ミニコンサートは実施 ・4月半ばから、県内の大会やイベント等への参加は届け出を行ったうえで許可された ・5月には市のコロナウイルス警戒レベル引き上げに伴って、大会やイベント等への参加が再び不可となり、6月に企画していたサークル合宿を中止せざるを得なくなった ・地域の文化交流センターから演奏の依頼が来ていたものの、練習時間が確保できないため断った ・7月、オンラインで行われたオープンキャンパスに演奏動画を配信 ・9月にオンライン開催されたコスキンには、練習時間不足のため参加を断念 ・11月、高齢者学習サークルからの依頼演奏 ・12月、クリスマスコンサートを実施 ・感染状況に応じて、対面授業も学期途中にオンラインに切り替わることがあった
V大学	<ul style="list-style-type: none"> ・5月、学内施設を利用したサークル活動が解禁され、サークル棟も16時まで使用可能に。ただし、それでは授業後に参加することができないため、活動を土曜13時-16時に設定 ・春の大学祭は5月にオンライン実施の予定だったが、直前に突然の延期発表がなされ、9月に延期となった ・7月から入構制限が緩和され、学外者が入構できるようになった ・10月、W大学の学生がV大学キャンパス内での活動に参加 ・11月、秋の大学祭がオンライン開催（一般人は入構不可だったが学外部員や音響機器業者は入構できたため、学内で演奏を撮影） ・授業は、体育科目・語学科目が対面授業
W大学	<ul style="list-style-type: none"> ・対面の新歓活動は禁止され、大学主催でZoomを使ったオンラインイベントが開催された。他のサークルとの合同説明会の形で、ブレイクアウトセッションで興味のある団体のルームに移る形式がとられた ・前期には対面活動が解禁された期間もあったが、緊急事態宣言が発出されると対面活動は禁止され、対面活動ができたのは4月上旬と、6月下旬から7月上旬で、数回しかなかった ・後期には10月から対面活動が再開された ・10月にV大学キャンパス内でV大学のサークルの練習会に参加 ・授業は原則対面授業だが、学期中に一部オンラインに切り替わることもあった
X大学	<ul style="list-style-type: none"> ・オンライン以外の活動の自粛は6月の緊急事態宣言解除まで継続 ・新入生勧誘のための演奏会を検討したものの、事前に参加者（聴衆）の氏名・学籍番号を把握し、参加者が未成年の場合には保護者の同意も得たうえで申請する必要があったため、現実的でないと判断し、演奏会は実現せず ・学生団体によるオンライン新歓イベントに参加したが、新入生の入部はなし ・6月下旬から活動の際の手続きは緩和されたが、サークルとして学内施設を使つての練習が再開できたのは8月半ば ・9月からは申請書なしでサークル棟に入室できるようになり、9月には小規模ではあるものの夏ライブを開催 ・11月の大学祭は大学関係者のみ参加可能な対面開催だったが、サークルとしては不参加（マスク使用に関する交渉が長引き、準備が間に合わなかったため） ・1月に卒業生等学外生を招いての演奏会を企画していたが、感染拡大によって再び活動禁止となり、企画は断念 ・授業は対面の割合が増えたが、オンラインが主だった
Y大学	<ul style="list-style-type: none"> ・新歓は対面でも行われたが、時間が限定され楽器の生の音を出すことも禁止されたため、録音したものを流すとともに、オンラインも併用 ・練習や新入生向けの楽器体験は、学内施設が使えず、地域の公民館等も使えなかったため、近隣の広い公園で許可をとって実施 ・7月の大学祭はオンライン開催（演奏動画の配信） ・9月にオンラインで開催されたコスキンに参加（演奏動画の配信） ・10月の大学祭はオンライン開催（演奏動画の配信） ・11月に部室入室の制限が緩和され、学外者もキャンパス内に入れるように ・11月に、文化系サークルを取りまとめる学生団体が秋の新歓（食堂に合同企業説明会のような形でブースを設け、興味のある学生がそこに聞きに行く形式）を企画し、それにサークルとしても参加 ・前年度後期に引き続き、オンラインが基本で一部対面授業
Z大学	<ul style="list-style-type: none"> ・2020年度秋学期から引き続き活動できており、新歓はオンラインも併用したが、ほぼ対面で実施 ・5月から大学の教室も活動に使えるように ・6月の大学祭はオンラインで実施（外部施設を借りて演奏をオンライン配信） ・宿泊を伴う合宿は中止したものの、スタジオを借りて連日通う形で実施 ・8月末から9月一杯は対面活動が全面禁止（サークルとしての大きなイベントはなかったため、影響は少なかった） ・11月、卒業生による現役生向けのライブが開催 ・12月、定期演奏会開催（対面で実施し、オンライン配信も実施） ・授業は対面が一部再開したもののオンラインが中心

実際に実現したこととしては、学内での街頭演奏（文化祭直前）や、衣裳やポスターの展示、大学ポータルサイトからの宣伝がある。その他、W大学でも大学からサークルに対してコロナ禍援助金5万円があり、カビが生えてしまった楽器を買い直すことができたという。サークルと大学当局や担当部署との関係づくりは、サークル部員個人の性格に依存するところも少なくない。ただ、小規模大学においてはそうした直接的な関係づくりが行いやすい可能性はあるだろう。

大学とサークルとが直接関係をつくるのか、大学団体が介在するのか、その大学団体が大学当局とどのような関係を結ぶのかによってサークルの活動の在り方は大きく変わってくると言える。

3 コロナ禍における大学サークルの困難と可能性

以上、コロナ禍での大学サークルの活動を概観してきた。そこでまず指摘できるのは、危機の時代にあつては特に、サークル単体での活動に限界があるということである。そもそも他者に向けて演奏する機会がなければモチベーションの維持は難しく、集団の凝集性を維持することも困難となる。学内外の他者に向けた演奏の機会が必要となれば、サークル外との関係づくりは不可欠である。コロナ禍においては、その関係づくりが一方では難しくなり、他方では必要性に駆られて新たに生じていったと言える。

前者について言えるのは、ノウハウの共有の難しさである。今回調査対象としたサークルのうち東京・神奈川にキャンパスのある4大学は、コロナ禍以前から合同で定期演奏会を開催しており、サークル間での個人的な交友関係もあった。また、それ以外の大学サークルでも、コスキン等の演奏を通じて交友関係が築かれることがあったという。そのため、オンラインでの新入生勧誘について他大学サークル部員との個人的なつながりの中で相談していたことはあった。しかし、各大学によって状況があまりに違うため、適用・応用できる点が少なかったという。そのため、インタビュー対象者のほとんどが廃部の危機について語っていたものの、直接的な部員獲得という点に関しては、大学サークルを越えて協力し合おうとする動きはなかなか立ち上がらなかった。また、そもそも「マイナー音楽サークルという点が非常に大きくて、実際の楽器を演奏することもできないし、[中略] オンラインということで余計空気感が伝わりにくいので、そもそも興味を持ってもらえない」(Dさん)という、オンライン活動に対する悲観的な見方も強かった。

しかし、2021年度に入り、徐々に活動が再開されると、単に新入生を獲得するということではなく、演奏技術の向上という、サークル活動の本旨に関わるところで、サークル間の連携や卒業生との連携が強まる機運が見られた。Y大学ではGさんの個人的な交友関係も活用して、Y大学やV大学の卒業生等を練習に招き、演奏指導を行ってもらっている。U大学でも同様に、フォルクローレ演奏の社会人サークルに所属している県内の卒業生を招いて指導を行ってもらっている。フォルクローレには一般的に2種類の管楽器と2種類の弦楽器、太鼓が用いられるが、部員が少ない場合それらを兼任することになり、専門性の低い上級生が下級生を教えなければならない場面が出てくる。そうした技術の不足を補うために自大学や他大学の卒業生を頼らざるを得なくなり、それが卒業生との関係を新たに築いていくことにつながるのである。

こうした関係は直接的な演奏指導に限られない。マイナー音楽の場合、そもそも上手な演奏を生で体験する機会が乏しい。「何がうまい演奏かわからないしどういう風に演奏したらいいのかわからないから演奏ができない」(Gさん)という不安がコロナ禍では特に付きまとう。そのため、上手な演奏を新入部員が生で聞く体験を担保するため、卒業生が協力している例もある。Z大学では地元で就職する人も多く卒業生との関係が強く、コロナ禍以前には卒業生を招いて現役大学生の演奏の品評会を行っていた。しかし、コロナ禍以降にはそれだけではなく、2021年には現役生向けのライブ演奏会を特別に開催することもあったという。

また、現役大学生同士の合同練習も実現している。これは大学ごとの状況が異なるからこそ生まれた連携

だと言える。W 大学は卒業生との関係も前述の大学程は強くなく、演奏技術について大きな不安を抱えていた。そこでV大学の練習にW大学サークルの部員が参加するという合同練習が2021年11月に開催された。W 大学と V 大学はコロナ禍前にも定期演奏会に向けた練習等で交流はあった。しかし、コロナ禍での対応という点で、新たな連携が生まれたのである。W 大学 D さんはこの合同練習に関連して、新入生に対して部部の存続に対しても誠実に向き合う態度を示している。

今の時期 [= 2021 年秋学期] に入ってくれても、私たちは就活で教えることができずに、無責任な状態で勧誘するということになってしまいます。前期に関しても、一時期、入ってくれた子が入ってくれるのを躊躇していた時期がありまして、理由を聞いたら、「先輩がもう三年生で、今のところ新入生が私しかいない中、自分が入ったらどうなってしまうんだろうという不安が大きかった」と聞きました。それでその、他大学と交流が持てたら一緒に演奏できるかもしれないし、新しく入ってくる子も、先輩がいなくなるかもしれないけれど、他の方と交流があるならと安心感を持って新歓をすることもできますので、[中略] 私のサークルに関しては存続するかしないかという状況だったので、そういった安心して活動できる場を整えることが、他大学の方に協力していただけることによってできたので、そういった面でも本当に、非常に大きかったです。

さらにその後、V 大学卒業生 C さんの呼びかけによって卒業生主催の合同練習会が 2021 年 12 月に開催された。これに先立って C さんは各大学の卒業生を結びつける組織を立ち上げており、そこで参加者を募り、会場費を卒業生が負担して実施された。この練習会には関東の複数の大学サークル部員が参加したが、新たな展開の可能性も見せている。G さんはこう語る。

曲をするにしても、1 年生と、あんまり練習ができなかった、1 年間ブランクが空いてしまって練習できなかった 3 年生っていう、クオリティ的にもすごい心配な面があるので、[中略] 他の合同練習会もしたいなって。OBOG 会には頼らない形のものも。

実際に卒業生との練習会に参加し、練習の在り方を直に経験して学ぶことによって、それを現役の大学生だけでできる形に応用しようと検討しているのである。それは卒業生をいずれ締め出そうという意図からではなく、卒業生が参加するものだけでなく、現役生だけで運営できる形を探ろうという前向きな考えから生じている。大学を越えた連携が、卒業生を介する形で新たに展開し始めているのである。

では、地域との関係づくりに関してはどうか。2018 年までのコスキンには大学生がボランティアスタッフとして参加し、運営を支援していたという。2019 年にはこれが台風で中止となり、2020 年度・2021 年はオンライン開催となったため、この関係は途切れかかっている。また、各大学サークルが行っていた依頼演奏も、多くの場合途切れている。依頼があっても大学の規制によって断らなければならないこともあり、もどかしさや苦しさも見える。A さんは大学と地域の温度差を指摘しており、それが大学当局に対する不満につながる可能性もある。B さんは依頼演奏のノウハウや、どこからどのような依頼があったかの情報が下の代に伝わっていかないことを心配している。

しかし、V 大学の別の卒業生がコスキンの運営の補助を行っており、これも卒業生を介して再び結びつく可能性がある。そして地域からの依頼演奏についても、同様の可能性が見える。2021 年に対面・オンライン併用で実施した Z 大学の定期演奏会には、毎年依頼演奏に行っていたデイサービス施設の方が来て、挨拶をしてくれたという。このことも踏まえて H さんは次のように語っている。

私もそのどこに普段依頼に行っていたのかとか、全然わからないんですけど、1回繋がった縁なんで、そのうちまた繋がるかなってというのはあるなと思っていて。活動を続けていてそれをホームページに定期演奏会やりますとか載せて、活動を発信してさえいればいつか、もう一回ああそういえばフォルクローレ聞きたいなと思ったときにお声がかかるんじゃないかなと思って、まあ別にいいかなと思ってます。

この発言からは、サークルに関して途切れさせてはいけないものの優先順位を読みとれるように思われる。これまで、コロナ禍におけるサークルの危機について見てきたが、存続すべきと考えられているのはサークルそれ自体ではない。形だけ存続させようとするのであれば、活動の内実をよそに新入部員をとにかく入れるという活動に躍起になっただろう。しかし、少なくとも今回インタビューした中では、そのような動きは見られなかった。また、マイナー音楽文化の存続が一義的にあるわけでもない。サークルは「マイナーなスポーツや文化活動を学生が経験する入り口となり、ファン層の確立にひと役買って来た」(石田, 2021)ことは確かであり、セミプロレベルの卒業生が現役の大学生に協力することには文化継承の意図もあるだろう。しかし、結果として文化継承という側面があったとしても、学生にとってそれは中心ではない。

中心にあるのは、マイナー音楽を楽しむ学生文化の存続である。マイナー音楽の存続だけであれば、社会人サークルに参加するという選択肢がどの学生にもありうる。しかし、そうではなく、卒業生との合同練習会も、あくまで大学サークルが自律的に活動できるようにするための補助として機能していた。先のGさんの発言に見られるように、学生からは現役生による合同練習会の案も出ている。U大学も社会人サークルに吸収されればよいとするのではなく、社会人サークルの場も活用しながら、大学サークルの活動を継続させている。また、地域とのつながりは重要なものではあるが、それも一義的なものではない。確かに依頼演奏はモチベーション維持のための重要な要素ではあるが、最低限必要な活動としてあるわけではない。

コロナ禍におけるサークルの危機が明らかにしたのは、サークル活動の一義的な目的であったといえる。各大学サークルは極めて限られた状況の中で活動することを強いられた。優先順位が改めて問われ、一義的な目的があぶり出されたのである。各大学サークルで行われていたのは、その目的を中心に置いて他との関係を再構築していく試みであった。

おわりに

本稿で扱ったのは、多様な大学サークルがある中での一部分に過ぎないし、全国のフォルクローレ演奏サークル全てを調査できたわけでもない。しかし、この限られた例からも、大学サークルがコロナ禍の危機に面して、サークル外との多様な関係の中で自らの意義を問いながらその在り方を再構築していることが見て取れる。フォルクローレというマイナー音楽を楽しむ学生文化を、当該サークルは存続させようとしている。それを中心に構成するのでなければ活動に無理が生じ、サークル自体を形だけ存続させたとしても、地域との繋がりだけを存続させたとしても、サークルが育む学生文化は失われてしまうだろう。

では、そこから大学や大学教育に対してどのような示唆を得ることができるだろうか。大学当局にできるのは、そうした活動の一義的な部分を支援すること、あるいは邪魔しないよう配慮することであろう。本稿が明らかにしたのは大学サークルが多様な他者との関係の中で成立しているということである。それによって学生にどのような成長があるのかについては本稿の範囲外である。それが学生に豊かな学びの場を提供していることは明らかである。であれば、大学側の施策がそのつながりにどのような影響を与えてしまうのかということについて、大学側はこれまで以上に注意を向けてもよいだろう。

本稿の査読期間中、40年以上の歴史を持つある大学フォルクローレサークルが、2022年度末をもって廃

部することを SNS で発表した。当該発表によると、卒業生の協力を得て新入生勧誘を行っていたものの、メンバー全員が4年生で就職活動等のため定期的な活動もできず、苦戦した結果、廃部決定となったようである。コロナ禍によってサークルのもつ学生文化を味わう前に活動が制限され、サークル活動に価値を見出せないままに終わってしまった学生たちもいただろう。「サークル活動は学生の自主的な活動なのだから、存続の意志がないならそれまで」と切って捨ててしまってもよいだろうか。意図的・目的的な教育活動は確かに重要であるが、サークル活動はその範疇に入らない価値を持つものである。危機の時代にその豊かさを守るために大学に何ができるか、改めて検討がなされてもよいはずである。

引用・参考文献

- 池田めぐみ, 伏木田稚子, 山内祐平 (2018) 「大学生のクラブ・サークル活動への取り組みがキャリアレジリエンスに与える影響」『日本教育工学会論文誌』42 (1), 1-14.
- 石田かおる (2021) 「学園祭も合宿も未経験 大学のサークル文化継承に赤信号」『AERA』34 (48), 24.
- 茨城大学人文社会科学部法律経済学科労働経済論ゼミナール・茨城大学学生団体学びと交流の秘密基地 (2021) 「コロナ禍における学生生活調査」 (https://www.ibaraki.ac.jp/news/uploads/2021/12/coronakaniokeru_gakuseiseikatsuchousa2021.pdf) (2022年3月20日閲覧).
- 江原謙介 (2021) 「大学スポーツの学生組織に関する事例的研究—新しい組織のあり方に着目して」『阪南論集 社会科学編』57 (1), 145-158.
- 佐々木達也 (2021) 「新型コロナウイルス禍における大学スポーツが受けた影響と城西大学の対応について」『城西大学経営紀要』17, 1-19.
- 全国大学生生活協同組合連合会 (2022) 『CAMPUS LIFE DATA 2021 —第57回学生の消費生活に関する実態調査報告書』.
- 田澤実・梅崎修 (2011) 「大学生生活への意欲と達成が自尊感情に与える影響—大学1年生に対する縦断調査—」, 『京都大学高等教育研究』17, 65-71.
- 東京大学消費生活協同組合 (2021) 「「緊急 大学生・院生向けアンケート」結果速報」 (<https://www.utcoop.or.jp/news/news-758/>) (2022年1月30日閲覧).
- 武内清・浜島幸司 (2005) 「部活動・サークル活動」武内清編『キャンパスライフの今』玉川大学出版会, 31-55.
- 文部科学省 (2021) 「各大学の課外活動における感染症対策の事例」 (https://www.mext.go.jp/sports/content/20210707-spt_stiiki-000016575-1.pdf) (2022年1月30日閲覧).
- 横山孝行 (2011) 「大学のサークル支援に関する一考察」『東京工芸大学工学部紀要』34 (2), 8-14.
- 吉田卓史 (2021) 「コロナ禍における大学スポーツの活動状況に関する一考察」『福山大学経済学論集』45, 17-30.
- 立命館大学新聞社 (2020) 「【詳報】立命館大学生1115人が回答《コロナ禍における学生生活実態調査》」 (<https://ritsumeikanunivpress.com/07/01/4257/>) (2022年1月30日閲覧).

教職員と留学生が対等に交流することの意義 —交流会参加者のアンケート分析から—

張 家寧*, 杜 姝瑾, 廖 穎彤

日本大学文学研究科教育学専攻

The Significance of Equal Relationships Between International Students, Faculty, and Staff: An Attempt of an International Student-led Exchange Meeting

Jianing ZHANG, Shujin DU, Yingtong LIAO

College of Humanities and Sciences, Nihon University

In order to find a way to support international students in dealing with their anxieties and concerns in the COVID-19 pandemic's aftermath, a project called "Networking Sessions as a Space for Relaxed Talk" was implemented. This project was led by international students, aiming to create opportunities for themselves, the faculty, and staff to interact with each other, and give voice to their worries and anxieties through discussions in a relaxed atmosphere. An analysis of the questionnaires regarding the exchange sessions revealed the following. In order to achieve equal communication in a relaxed atmosphere and provide support based on the international students' needs, establishing equal relationships between these students, teaching staff, and Japanese students, is an important prerequisite for communication.

キーワード：交流会, 対等的な交流, 留学生の悩み, 留学生支援, 学生と教職員の関係

Keywords:

Exchange Meetings, Equal Exchange, Concerns of International Students, Support for International Students, Student-Faculty/Staff Relationships

はじめに

2020年度前期は多くの大学で全面遠隔授業となり、学生の生活は激変した。友人、家族および教職員との接触が制限され、授業や課外活動等において、他者とのコミュニケーションの機会が著しく減少した。濱名(2021)によると、日本の学生はコロナ禍で学習と生活の両面で様々な困難に直面しながら勉学に臨んでいる。2022年度前期には多くの大学で対面授業が再開されたが、それに伴い学生の中に新たな不安が生まれた。留学生もコロナ禍の約2年間に様々な困難に直面し、不安を抱えており、それによるストレスや悩みが多くなっている。その中には、個人での解決が難しく、大学側による適切な支援が必要なこともあると考えられる。そこで、コロナ禍以降、留学生がどのような不安や悩みを抱いているかを解明し、それに対してどのような支援をすべきかを考えるのが重要な課題となる。以上の課題に取り組むために留学生主導による

*E-mail: jianingzz0601@gmail.com

投稿：2023年1月21日 受理：2023年2月24日

交流会を試験的に実施し、それについてのアンケート調査を分析した。

1 先行研究と先行事例の検討

各大学には、留学生の学習や生活を支援し、教室内外で生じた困難や悩みに対応するための機関が設けられている。そして、カウンセリング制度、留学生チューター制度などを通じて留学生の環境整備に努めている。しかし、これらの留学生支援制度には課題がある。例えば、留学生を対象としたカウンセリングには支援者側の異文化理解が必要である（金城，2007；許と松田，2016）。また、猪又と西村（2022）はチューター制度に関して、チューター学生のニーズと留学生のニーズのズレによって留学生の期待にチューターが答えられないことがあるため、留学生にサポートしてほしい内容やニーズを事前に調査するべきであると指摘している。しかし、木村（2022）によると、教職員が学生に学生相談機関の利用を勧めるにあたり、まず学生の相談ニーズを把握する時点で困難を感じるという。

このような研究を踏まえると、留学生には本当の悩みや不安およびニーズを話せる場が必要であり、支援側としての学生や教職員には留学生の声を直接ヒアリングし相互理解を促進させる機会が必要である。留学生と教職員の交流会はその意味で重要な活動であるが、交流会の形式によってはねらいが達成されないこともあるため、望ましい交流会の形式について探究する必要がある。

そう考えると、次の活動が参考になる。京都産業大学では、学生の主体性や学習モチベーション発揮に向けた支援を模索するための取り組みとして、「学生×教員×職員 シャベリ場」という活動を実践した。その活動の目的は本実践と異なるが、「学生×教員×職員」の三者が参加するシャベリ場という形に注目したい。「シャベリ場では、学生の手を直接ヒアリングすることを通じて、オンライン授業の物理的・心理的な障壁を明らかにすることができた」（福原と岡，2021）と評価されており、学生の手を直接に聞く機会として重要なものだったといえる。これは留学生交流会にも応用できると考えられる。教職員が交流会に参加し、留学生の手を直接ヒアリングすれば、コロナ禍以降に生じた留学生の不安や悩みが明らかになるであろう。また、一般の日本人学生は留学生との付き合いや交流に不安や悩みを持ちながらも、留学生との異文化交流を求めている（梶原，2020）。そのため、交流会には留学生だけではなく、教員、職員、日本人学生といった多様な立場に立っている人々の参加を求めることが重要である。

一方で、留学生と日本人学生の交流活動において、援助する側とされる側の関係が一方向的に固定されるのは両者間の関係の発展にとって好ましいことではない（横田，1999）。交流活動を考える時、関係の構築という視点を取り入れることも必要である。このような交流においては、「対等な関係」の必要性も指摘されている（花見，2000）。援助する側とされる側の関係が一方向的に固定されるのではなく、対等な関係の下で交流を進めることができれば、参加者のニーズも共有されやすいであろう。

以上の考察を踏まえ、①留学生の手を直接に聞く、②留学生だけではなく、多様な立場に立った人の参加を求める、③参加者はリラックスして対等に話せる、という3点を重視した交流会を実施した。本交流会は一過性の留学生支援にとどまらず、他の留学生支援の改善にも応用できると推測する。また、学生×教員×職員の交流において、互いに対等な交流を成立させるための条件とは何か、今回の実践を通じて再考察できると考える。本稿では、参加者のアンケートを分析しつつ、交流の場やその形式の可能性という視点から留学生への支援のあり方を探索する。

2 事前準備と交流会の概要

交流会のプログラムを工夫するために、事前準備として予備調査と予備交流会を実施した。

まず、予備調査について説明する。コロナ禍以降に留学生がどのような悩みを持っているのかを把握するため、予備交流会を実施する2週間前にアンケート調査を行った。実施期間は2022年6月6日から同年6月16日まで、調査対象は文理学部に在籍する留学生で、回答者は19名であった。事前アンケートでは、「授業面」「サポート体制や支援のあり方」「授業面とサポート体制や支援のあり方以外の悩みや問題」「大学以外の生活面」の4つの面から、問題点、不満・不安、悩みを聞いた。回答結果を内容ごとに整理すると、回答者の悩みは「人間関係（教員との関係、日本人学生との関係）」「卒業後の不安」「学内設備」「授業・成績関連」「奨学金の充実」の5つの項目に分類することができた。

次に予備交流会であるが、期間は2022年6月30日15:00～17:00、場所は日本大学文理学部本館5階ML/TL教室で開催された。予備交流会の参加者は、留学生10名（学部生6名、大学院生4名）、教育学科助手2名（うち中国人1名）、教員2名の計14名である。交流会のねらいは、①交流会の企画・実施を学生主導で行うことにより、交流相手にとっても自分たちにとっても有益な交流活動を実現すること、および②教員・職員・留学生の三者が協働して、混合チームを構成し、コロナ禍で生じたそれぞれの悩みや困難をテーマに交流すること、である。予備交流会は、①予備アンケートの結果報告、②留学生、教職員の悩みやその解決策についての自由交流、③クイズ形式のゲームという流れで進行した。予備交流会【当日は「予備交流会」ではなく、「交流会」という名称を使った】の後には、学生参加者に対しアンケートを実施した。アンケートには自由記述と併せて、「本日の交流会について、感想をお聞かせください」という項目を設けた。この項目への回答は留学生7名から得られ、回答の内容を精査した結果、普段の教室での個人的な交流とは違い、リラックスした雰囲気の中で、先生の違う一面を見ることができ、先生との距離が縮まったと留学生が感じていることがわかった。

これらの取り組みから、筆者らが最初に想定した実施方法の意義が見えてくる。即ち、①留学生の声を直接に聞く、②留学生だけではなく、多様な立場に立った人の参加を求める、③参加者は対等に話することができる、という3つの切り口で、リラックスした雰囲気をつくることである。そこで、本番の交流会のデザインも、リラックスした雰囲気の醸成に重きを置いた。

交流会は、2022年10月30日15:15～16:30、「日本国際教育学会第33回研究大会」のなかの1つのセッションとして、zoomにて開催された。参加者は、留学生10名（うち2名は他大学所属）、日本人学生3名、教職員6名（うち2名は他大学所属）の合計19名であった。それ以外に、交流会の企画者である留学生3名と指導教員1名がいたが、全員日本大学に所属している。開会の挨拶の後、交流会の流れは、①事前準備の結果報告と交流会の説明、②グループに分かれて交流、③グループ交流の感想を全員に向けて自由に発表、というものであった。②については、5つグループに分かれて、可能な限り学生や教職員、大学内部参加者や外部参加者などが固まらないように属性による振り分けを行った。

3 アンケートの分析と考察

ここでは、主に本番交流会の事後アンケートを分析し、そこから得られた知見について考察する。必要に応じて、予備調査のアンケート・予備交流会の事後アンケートの記述、および2回の交流会の様子も分析の対象とする。なお、筆者補足や注釈を入れる場合は亀甲括弧を用いている。

アンケート記入者の属性構成は、留学生8名、日本人学生2名、教員1名、職員2名（うち他大学所属1名）、合計13名である。また、留学生は学部生4名と大学院生4名（うち他大学所属1名）、日本人学生は全員日本大学の大学院生であった。アンケートには、属性に関する質問以外に、「4 交流についての考え」「5 交流会を通じて得られたもの」「6 交流会の全体的な感想」という3つの質問を設定した。本節では、アンケート結果の分析から交流会の役割を明らかにし、参加者の間で対等な関係を構築することの意義を考察する。

表1は、アンケートの「4 交流会についての考え」の結果をまとめたものである。交流会では、参加者たちがそれぞれ異なる立場の考えを知り、相手の立場に立って考え、リラックスして対等な交流ができたことがわかった。質問項目[4-1]では、回答者13名のうち12名が「そう思った」と回答した。そして、参加者が一番評価していたのは、対等な交流ができたことである。「対等な関係を求める交流には、共通の目標や課題、テーマに対し、同じ役割を与えると同時に、インタラクティブな活動を働きかけること、といった工夫がみられる」と茂戸(2012)は指摘しているが、今回の交流会はこの知見に合致するものだった。今回の交流会は「コロナ後の悩み」をテーマとしたことで、多様な立場の参加者が悩みや情報を共有する場として機能し、相互にアドバイスしあうという協働の関係が形成されていたといえる。

では、対等な交流会は、どのような役割・意義を持っているのだろうか。主に二点考えることができる。一点目は、対等な交流会は、留学生のニーズの把握に役立つということである。対等な交流会では、予備アンケートに記述された悩みや不安について直接に話し合い、教職員が留学生のニーズをより正確に把握できるようになった。例えば、ある教職員からの回答には「留学生の悩みを知れてよかったです。1.グループディスカッションについての悩み 2.キャリア形成についての悩みなど〔中略〕」、「〔中略〕就職についての悩みは予想していましたが、予想外の〔中略〕」などがあった。このように、対等な交流会は、教職員が留学生のニーズを把握するのに役立った。

二点目は、対等な交流会は、学生×教員×職員の相互理解・異文化理解を促進するということである。表1の質問項目[4-6]・[4-7]では、大多数の回答が「そう思った」「ややそう思う」であるため、参加者は、異なる立場の人の考えを知り、また相手の立場に立って考え、異なる立場の人を理解し始めたと考えられる。具体的には、教職員からの回答として「〔省略〕異文化のギャップが伝わる経験を共有していただき、目が開かれる思いがしました」というものがあつた。留学生も「ディスカッションについて行けない問題は日本語の問題だけでなく、文化の差もあるかもしれない」と回答し、文化の差異が円滑な交流の妨

表1 質問項目「4 交流についての考え」

質問項目	そう思った	ややそう思う	どちらとも言えない	あまりそう思わない	そう思わない
4-1 対等な立場で話し合いができた	12人	1人	0人	0人	0人
4-2 リラックスして会話に参加できた	8人	3人	2人	0人	0人
4-3 悩みを共有することができた	9人	3人	1人	0人	0人
4-4 自分の悩みに対して他の人からアドバイスがもらえた	9人	3人	0人	1人	0人
4-5 他の人の悩みに対してアドバイスができた	5人	5人	1人	2人	0人
4-6 異なる立場で考えを知ることができた	9人	4人	0人	0人	0人
4-7 相手の立場に立って考えることができた	7人	5人	0人	1人	0人

げとなる可能性を認識し始めた。また、日本人教職員からは「日本は意見や結論をはっきり言わない文化がある」などの日本特有の文化についても紹介された。交流会の参加者は、留学生のニーズを把握しながら、お互いの文化の差異に気づき、その上で、相互理解・異文化理解へと進んでいった。「1 先行研究と先行事例の検討」で紹介したチューター制度については、留学生支援の他に、異文化理解・体験の場でもあるという認識であり、留学生とチューターの相互理解を図る場を設けることを今後検討したいと述べた(猪又と西村, 2022)が、対等な交流は相互理解を図る場を設ける際のヒントになるかもしれない。

対等な交流会は、悩みや情報を共有する場として機能することで、留学生のニーズの把握と異文化理解に寄与する。では、今回の交流会が対等な交流を担保できたのはなぜだろうか。

第一に、今回の交流会には一定程度匿名性があり、参加者の間で利害関係がなかったことが考えられる。学外からも教職員や学生が参加したことにより、大学横断的な交流となった。また、注目すべき回答として、外部の職員の「留学生・日本人学生の方の生の声を聞くことができたのは貴重でした。(自身が所属する機関の学生さんは、気を使ってくれて悩みをダイレクトに伝えてくれないこともあります。)」がある。その学生は、なぜ自分が所属する機関の職員に悩みを話さないのだろうか。同じ大学の関係者に相談する場合には、自分の知り合いに伝わる恐れがあるため、本音で話しにくくなると推測できる。一方、他の大学の人に対しては、名前を出しても、個人の詳しい情報までは伝わらないため、一定の匿名性が保たれる。また、直接の利害関係もないため、気軽に悩みを伝えることができる。大学の枠を超えた交流会は、利害関係のなさや匿名性によって、参加者に気にせず話せる環境を担保していたのである。

第二に考えられるのは、対等な交流会では、「師弟関係」や「支援する側—支援される側」の間に存在する権力関係が緩和されているということである。最初の予備アンケートでは「誰とどこで相談するか [わからない]」、「先生と相談する勇気がない」などの回答が多かった。教職員は学生にとって権力的な存在であり、教員に相談しようとしても、硬い雰囲気の中で思ったことを気軽に話すのは難しい。一方、交流会後のアンケートでは、「悩んでいるとき、学科室・先生と相談してみる」という前向きな回答が多く見られた。交流会を経て、留学生は教職員と距離を縮めてより良い関係を築き、教職員に支援を求める姿勢を取れるようになったと考えられる。また、予備交流会では、教職員や留学生とのコミュニケーションを通じて、問題解決策を互いに提案することで、「先生との距離感が縮小し信頼感・安心感を感じた、大学の一員としての責任感や帰属意識を持つことができた」と述べる留学生もいた。ここから、交流会は、留学生にとって、教職員との関わりを豊かにし、教職員への信頼感を生み出し、良好な関係を育む場としても機能することがわかった。対等な交流会の実現には、学生と教職員との距離を縮めることや、権力関係の緩和が重要と考えられる。

また、一般的な学生支援の活動にも権力関係があることが伺える。留学生対象のアンケートには、「メンタル問題を討論することが多いです。[中略] まず、専門のカウンセリングがたりない状況が存在している同時に、支援の時差別な話を無意識に言いましたことがあります」という回答があった。実際にこの学生がどのような発言を差別的なものだと感じたのかはわからないし、専門の学科や窓口のことを言っているのかカウンセリングの専門家のことを言っているのかはわからない。しかし、教職員が支援を行う時に、差別的な言葉を無意識に使ってしまうことで、留学生がさらに傷つき、今後支援を求めない姿勢になることも考えられる。そうならないために、教職員には異文化理解が求められるのだが、差別的な言葉を無意識に使ってしまう可能性は捨てきれず、特に一对一の場面ではその問題性に気づきにくい可能性がある。他の留学生の回答には、「1回目のグループ分けは私以外は先生しかいなかった。心配したが、あとは司会も加えたおかげで無事で終わった」というものもあった。司会役という第三者が入ったおかげで、一对一の時に感じた権力関係が緩和されたのであろう。つまり、交流会では、多様な立場の人の参加によって、権力関係を緩和させることができ、一对一の支援の限界にも対応することができる。しかし、留学生がどのようなサポートを

期待しているかを事前に調査すれば、サポートすることがなく疎遠になるという課題（猪又と西村，2022）を解決できるかもしれない。即ち、留学生のニーズ把握を当然のこととし、それらの悩みやニーズに対応できる支援体制を構築することも重要である。そこで、交流会が留学生のニーズ把握の役割を担い、そこで得られた知見を他の支援サポート機関と共有し、これを支援サポートの一環として機能させることも期待できる。

一方で、別の見方をすれば、これまでは、学生支援が行われる際に、支援する側と支援される側という非対称的な関係性であり、権力関係が生じる恐れを孕んでいたということが考えられる。留学生支援に関して、先行研究では、カウンセリング制度や留学生チューター制度に関心が集まったことにより、結果として留学生の悩み把握の方法や支援の方法についての分析が、「支援する側—支援される側」という枠組みに限定されてきたことが指摘されている（中川，2012）。この状況においては、支援側が相手を「助けてあげる」という不対等なパートナー関係が生じ、その結果、留学生の真のニーズを把握できず、権力関係がもたらす象徴的な暴力が発生する危険性も孕んでいる（虎岩，2014）。もっとも、こうした学生と教職員間の権力関係を解消するために、教職員は常に自分自身の権力性を認識した上で、学生に接する際には対等性が担保されるよう対応の仕方を検討していかなければならない。「支援」という言葉自体は、不可避的に権力関係を前提とする。ただ、重要なのは、支援する側と支援される側の間に権利関係があることを認識し、いかにして対等な関係を築くかということである。支援する側は、善意の行動であっても、自らを優位な立場に置き、相手を劣位に置く可能性があるため、権力関係を意識しなければならない。

以上、今回の交流会では、悩みや情報を共有するというテーマのもとで、異なる立場の参加者に同じ役割を持たせ、「師弟関係」または「支援する側—支援される側」の間に存在している権力関係を緩和させることができ、対等な関係のもとでの交流ができたといえる。

おわりに

本稿では、コロナ禍以降、留学生が抱えた不安や悩みに対応できる留学生支援のあり方を模索するため、リラックスして話せる場として交流会を実施し、アンケートを分析した。その結果、指摘できたのは次のようなことである。まず、留学生のニーズに合った支援を実現させるためには、留学生と教職員、日本人学生の間で対等な関係を築いて交流することが重要だと考えられる。そして、こうした対等な交流会は、情報・経験共有、関係作りなどの場として機能し得る。また、大学の枠を超えた交流では、より多角的な視点が得られる可能性があり、また、匿名性があるために利害関係を気にせずに、参加者が話しやすいというメリットがある。留学生支援においては、支援する側と支援される側の間に、権力関係があることが考えられる。こうした権力関係を解消するために、教職員は常に自身の権力性を認識し、対等性が担保されるよう学生に接していく必要がある。

引用・参考文献

- 猪又由華里・西村政子 (2022), 「留学生チューター制度の現状と課題」『Journal of Inclusive Education』第11巻, 131-140 ページ.
- 梶原雄 (2020), 「日本人学生は外国人留学生をどう見ているか—同志社大学の日本人学生からの視点—」『同志社大学日本語・日本文化研究』第17号, 93-111 ページ.
- 木村真人 (2022), 「大学教職員が学生に学生相談機関の利用を勧める際に感じる困難と工夫」『国際研究論叢：大阪国際大学紀要』第35巻第3号, 147-159 ページ.
- 許倩, 松田英子 (2016), 「在日中国人留学生の異文化適応支援の現状と問題—異文化ストレス, 留学生のパーソナリティからの分析—」『東洋大学大学院紀要』第53号, 63-76 ページ.
- 金城かおり (2007), 「留学生担当者のための異文化理解教育の意義と必要性」『言語文化研究紀要』第10号, 121-142 ページ.
- 茂戸藤恵 (2012), 「留学生との交流による日本人学生の変容—海外勤務志向への変化に着目して—」『Works Review』第7号, 22-35 ページ.
- 虎岩朋加 (2016), 「日本の留学生政策と実践に内在する象徴暴力」『ジェンダー & セクシュアリティ』第11号, 79-89 ページ.
- 中川かず子 (2012), 「日本人学生と留学生の異文化交流—異文化接触, 協働的活動を通じた大学教育への適応と意識変容」『ウェブマガジン「留学交流」』第13巻, 1-10 ページ.
- 花見横子 (2000), 「日本人学生と留学生との交流：対等な関係の模索（その1）」『三重大学留学生センター紀要』第2号, 53-66 ページ.
- 濱名篤 (2021), 「コロナ禍における学生の不安と支援のあり方 安全対策以上に求められる安心対策 学生の実態状況調査」『リクルートカレッジマネジメント』第39巻第2号, 30-33 ページ.
- 福原由衣・岡和寛 (2021), 「教育支援研究開発センター「学生×教員×職員 シャベリ場」活動報告」『高等教育フォーラム』第11号, 67-70 ページ.
- 横田雅弘 (1999), 「留学生支援システムの最前線」『異文化間教育』第13号, 4-18 ページ.

再履修者を対象とした初年次教育に関する授業報告

小堀 裕子*, 齋藤 山人, 山本 守和

日本大学芸術学部

Class report on first-year education courses for repeater

Yuko KOBORI, Yamato SAITO, Morikazu YAMAMOTO

College of Art, Nihon University

In this paper we report the practice of a first-year course for repeating students. Since the course was designed specifically for repeaters, we considered that we could not expect students' regular attendance or active participation if we repeated the same topics and lecture style of the previous academic year. Therefore, the teachers examined themes and class style so that we could maintain students' attendance and participation. Themes for each class were selected from topical news and topics of interest to students.

According to the questionnaire, the overall evaluation of the course was positive, with 64% of the students saying the course was good and 32% saying fair to good. Overall the theme selection received a positive evaluation. In particular, students gave the highest evaluation to the class on manga. We consider it is because the theme was based on a topic that is familiar to students so they could develop a logical and academic discussion of it.

キーワード：初年次教育, 再履修者, 授業改善

Keywords:

First-Year Experience, Repeater, Class Improvement

1. はじめに

本稿は、再履修者向けの全学共通初年次科目（以下「初年次教育科目」）に対する取り組みについての報告である。

日本大学芸術学部では、2021年度まで必修科目として、初年次教育科目を開講していた。しかし、2022年度よりカリキュラム編成の見直しに伴い、履修形態が選択科目に変更となった。そのため、2021年度以前入学者のうち、単位未修得者を対象とした初年次教育科目を新たに開講するに至った。2021年度の初年次教育科目では、専門の8学科の担当教員が各々の専門分野から設定されたテーマに基づいて、オンライン上で6-7名程度のグループを作成し、ディスカッションを行う授業方法を採用していた。したがって、学生には積極的な講義への参加が求められていた。しかし、新たに開講した初年次教育科目の主な受講者は、前年度までに、単位を習得できなかった学生である。そのため、従来と同様の講義テーマ・授業の方法では、学生の意欲的な参加が難しいと考えられた。そこで、より学生が興味をもって講義に参加できるように

*E-mail: kobori.yuko@nihon-u.ac.jp

投稿：2022年9月30日 受理：2022年12月13日

テーマ選定と授業の方法について検討を行った。

初年次教育に関する報告・論文は枚挙にいとまがないが、その中でも再履修者に着目した報告は数が少ない状況である（例えば南 2014。情報教育に関する報告としては笠見 2008, 小川・新井 2011 などが挙げられる）。本報告は、再履修者向けの初年次教育科目に関する講義実践例を示すことで、今後の初年次教育科目における授業改善に寄与することを目的とする。

以下、まず、本講義の概要及び講義準備に関して着目した点について述べる。次に、本講義を受講した学生へのアンケート調査の分析結果を示す。

2. 再履修者を対象とした初年次教育科目について

2.1. 講義の概要

本稿で対象としている講義は、2022年5月21日～7月9日までの土曜日、1・2時限（9：00～12：10）に開講した「自主創造の基礎1」（以下「本講義」）である。全15回の授業は、全てZoomを用いたオンライン講義で行った。基本的な講義のタイムスケジュールは、図1である。なお、テーマの内容によっては、個人ワークの時間を調整した。

従前の初年次教育科目は、学生同士が積極的に発言をすることを前提とした講義がなされていたが、本講義で対象とする学生は必ずしも人前で話すことが得意ではない可能性があると考えた。そこで、本講義の進行としては、基本的に教員が司会役を務め、テーマに関する発言を学生に求めた。この発言は、Zoom上での声を出した発言のみに限定するのではなく、チャットやGoogleフォームなどを活用することで、コミュニケーションが苦手な学生にも配慮をした。そして、テーマに対する学生からの意見を収集した後、その意

1時限		2時限	
9:00-9:05	Zoomへ入室開始・入室許可	10:40-10:50	1時限目の結果を踏まえ、追加の解説
9:05-9:30	授業テーマ説明	10:50-11:05	解説を踏まえた調査及び個人ワーク
9:30-10:00	テーマに関する調査及び個人ワーク	11:05-11:45	個人ワークの提出（Googleフォーム、チャットなど）とディスカッション
10:00-10:30	個人ワークの提出（Googleフォーム、チャットなど）とディスカッション		
10:30-10:40	休憩	11:45-12:10	課題作成及び提出

図1 基本的な講義タイムスケジュール

見に対して、教員が新たな情報を付加して説明し、議論を深めるように進化した。

2.2. 講義テーマの設定

各回の講義テーマについても再履修者向けという点を考慮し、より議論に参加しやすい環境となるよう、検討を行った。従前の初年次教育科目では、芸術学部の各学科に関連する講義テーマを設定した。しかしながら、文学、映画、写真など多岐にわたるテーマ設定であったため、結果として、範囲が広汎になってしまい、一部の学生にとっては必ずしも取り組みやすいテーマとは言えなかったと考えられる。

以上を踏まえて、新たに講義テーマを検討するにあたっては、芸術分野に限定せず、話題性のある内容や学生が身近に感じられるように設定した。これにより、学生が授業に対して興味を持ち、より積極的に講義に参加できると考えた。各回の講義テーマは表1に示したとおりである。

また、講義で使用する教材やソフトについては、受講者数が少なく、操作に対して教員のサポートが可能であることから、動画の視聴や Google のマイマップなど、Zoom に付随される機能だけでなく、各テーマにおいて必要となる教材を、適宜使用した。

表1 各回の講義テーマ

講義回	開講日	授業テーマ
1回目	5月21日	授業ガイダンス及び情報検索について
2回目	5月28日	「推し」を論理的？に紹介してみる
3回目	6月4日	「人への伝え方」-論点整理（主に裁判の視点から）
4回目	6月11日	未来都市の形を考える
5回目	6月18日	災害について考える（東日本大震災を踏まえて）
6回目	6月25日	「正義」とは？（某漫画・アニメから考えてみる）
7回目	7月2日	メタバースについて考える（今、未来は？）
8回目	7月9日	振り返り

*）最終回（8回目）を除き、1、2時限の講義である。

3. アンケート実施及び概要

3.1. 初回講義時のアンケートについて

初回の講義の際、昨年度の講義に関するアンケート調査を行った。また、8回目の講義において、本講義に関する授業アンケートを実施した。図2が昨年度の講義に関するアンケートの結果である。出席状況については、“全て出席した”9%である一方、“全く出席していない”72%であり、ほとんどの学生が欠席過多によって、単位を取得できなかった状況が確認できる。また、“自主創造の基礎1を学ぶ理由の理解度”に関する質問では、“よく理解できた”16%、“全く理解できなかった”69%であったことから、初年次教育科目を受講する意義に対する理解が低いことも、出席率に影響を与えたと考えられる。講義に対する興味や関心については、“そう思う”16%、“どちらかといえばそう思う”3%であり、“あまりそう思わない”3%、“そ

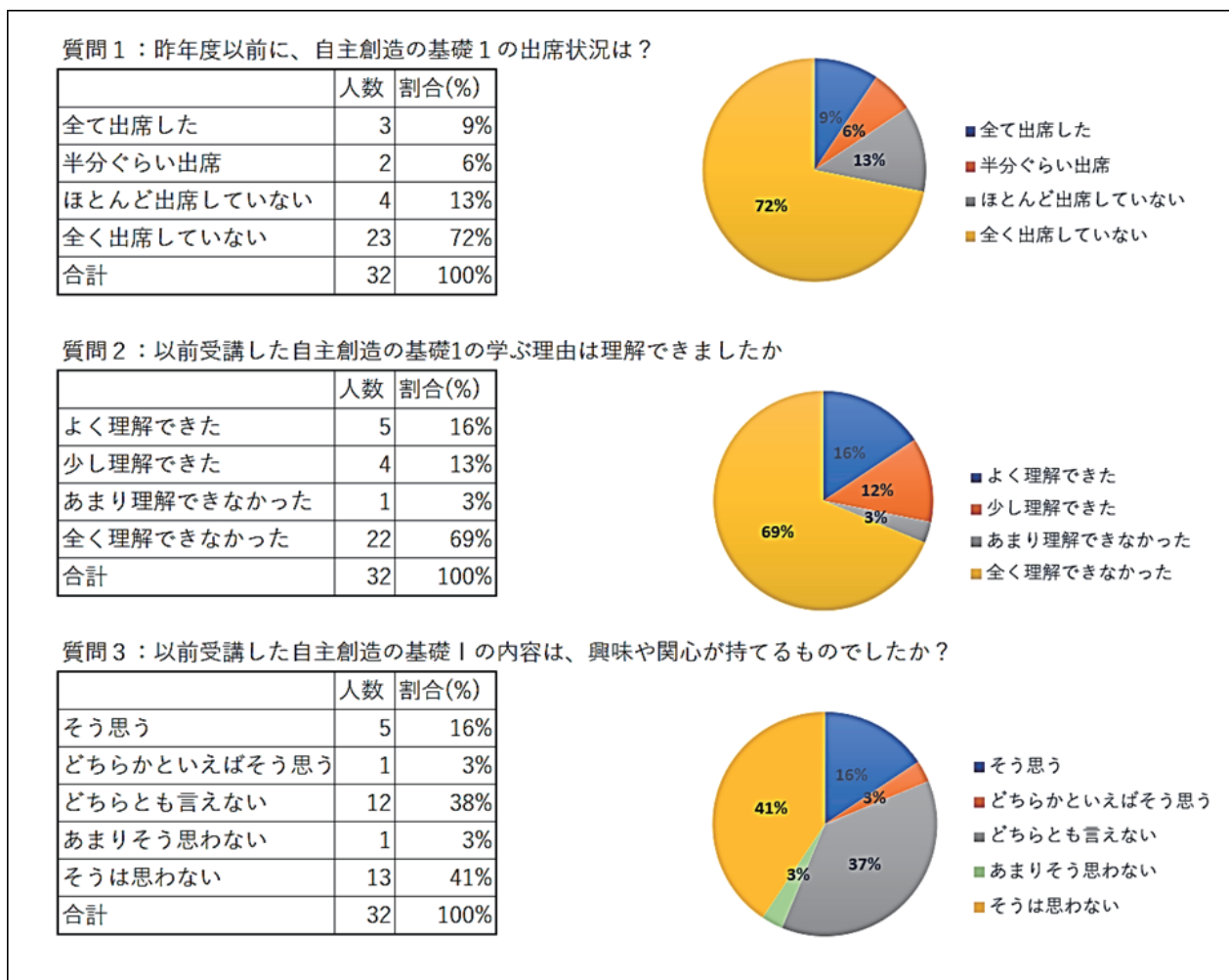


図2 昨年度の講義に関するアンケート調査

うは思わない”41%であり、前年度の講義に対する興味を持てなかったことが一因と考えられる。

以上より、再履修に至った理由としては、当初より授業に対する興味・関心が低く、そのことが授業参加度に影響したためと推察される。

3.2. 講義後アンケートの結果

講義最終回に、各回の講義テーマに関する評価アンケートを行った。その結果が、図3である。講義に関して総合評価としては、“良かった”64%，“まあまあ良かった”32%であった。また、“内容は興味や関心が持てるものでしたか”の質問に対しては、“そう思う”48%，“どちらかといえばそう思う”44%であった。全体的な評価として、今回の講義内容は肯定的評価を得ることができたと考えられる。しかし、本講座の時間割登録者数は51名である一方で、最終日のアンケートの回答者は25名となっており、最終回の出席者は約50%である。再履修者ということを考え、講義開始前から、講義参加に関する呼びかけなどを行ったが、全く講義に出席しなかった学生も8名存在している。よって、講義に関する改善だけでなく、開講以前の段階で、何らかの準備や学生に対する働きかけが必要だと考えられる。

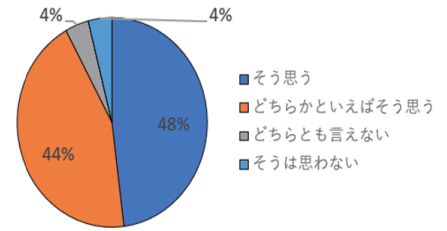
ただし、各回のテーマについては、全体的に見ると、学生にとって興味ある設定がなされたものと思われ

質問1：今回の授業に関する総合的な評価

	人数	割合(%)
良かった	16	64%
まあまあ良かった	8	32%
普通	1	4%
あまり良くなかった	0	0%
良くなかった	0	0%
合計	25	100%

質問2：今回、受講した自主創造の基礎1の内容は興味や関心が持てるものでしたか。

	人数	割合(%)
そう思う	12	48%
どちらかといえばそう思う	11	44%
どちらとも言えない	1	4%
どちらかといえばそう思わない	0	0%
そうは思わない	1	4%
合計	25	100%



質問3：各授業テーマについて、興味や関心が持てたか評価してください。

	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目
持てた	11	12	9	9	12	16	11
少し持てた	6	6	6	8	6	5	7
普通	7	4	5	7	6	3	5
あまり持てない	1	2	5	1	1	1	2
全く持てない	0	1	0	0	0	0	0

(*) 人数

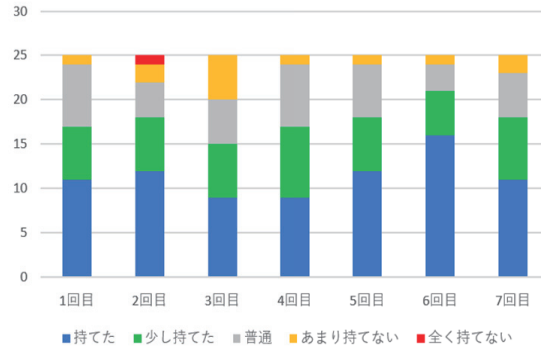


図3 本年度の講義に関するアンケート調査

る。各回の比較では、第6回のテーマが最も評価が高く、“興味を持てた”“少し持てた”を合わせた肯定的評価が21名、次いで、2回目と5回目のテーマの評価が高く、各18名であった。評価が最も高かった、第6回目のテーマは、漫画のストーリーを題材にして、主人公の行動などを、実際の法令に照らし合わせたときの正当性や「正義」の語について議論したものである。法的問題や「正義」という漠然とした観念について考えるという難しいテーマであると考えられるが、漫画と関連させることで、興味あるテーマとして考えることがしやすかったと推察される。次に評価の高かった第2回目は、「推し」という言葉を、論理的に考え、単なる「好き」と何が違うのかななどを議論したものであり、第6回目は、東日本大震災後の岩手県大槌町の状況調査動画を提示し、震災に対する考え方を議論したものである。一見、内容が大きく異なるようなものであるが、いずれも、学生にとって身近な話題を、論理的、学術的に捉えて、テーマとしたことが、良い評価を得られたと思われる。

一方、今回設定した中で相対的に評価が低かったのは、3回目の「人への伝え方」—論点整理（主に裁判の視点から）」である。講義としては、他のものと同様の資料を用いて実施したが、実際の判例などの解説を行うなど、専門用語が多く、やや取り扱う内容としては難解であったと推察される。この点については、評価の高かったテーマのように、判例についても、芸術学部の学生にとって身近な事案と関連付けたものを取りあげ、その事案に対する議論展開をするなどの改善が必要であると考えられる。

全体としては、どの回も評価が高かったことから、学生の関心に沿ったテーマ設定という点では、昨年度に比べて、改善されたと思われる。

講義についての感想などに関する自由回答の結果が、表2及び表3である。自由回答については、形態素解析により、出現頻度が高い単語の集計を行った。

抽出した品詞は、名詞、動詞、形容詞である。その中から、出現頻度が比較的高いものについて集計した。集計結果をみると、“テーマ、講義、講義、先生、内容、楽しかった、よかった”などの出現頻度が高かった。また、実際のデータを確認すると、No.3や12など、肯定的な意見を複数確認できることから、興味を

表2 自由回答による回答

No.	自由回答の記述
1	土曜の朝はしんどい
2	先生方のテーマ選定に試行錯誤を感じて、頑張ってるなーと他人事ながら感じました
3	メインで専攻して学んでいる内容とはやや離れた分野での学びになるので、新鮮でかつ有益な情報が得られてとてもよかった。
4	現在の社会問題に対しての視野が広がった
5	自分を見つめ直すきっかけになる授業もあり人生の勉強になる講義になりました
6	メタバースや近代の最先端に触れる講義は、私たちにとって重要な内容だと考えているので興味を持ちました。
7	全体的に面白い内容で楽しく講義をうけることができました。
8	ありがとうございました
9	一年の授業よりわかりやすく楽しかったです。ありがとうございました。
10	おもしろいと思う、難しい内容もあると思います。
11	普段はあまり考えないけど身近なテーマばかりで、新たな発見ができたと思います。毎回違うテーマを学べるのが楽しかったです。特にミニマップが面白かったです。
12	自分だけでは思いつかないようなテーマで学ぶことができ、色んな分野に興味を持ち、知ることは有意義なことであるとわかりました。芸術分野のことだけでなく、色々なことを学びたいと思いました。
13	日常すぎて今まで考えないようなことまで考えることができたので楽しかった。
14	例年の授業形態よりもつつきやすく楽しかった。 先生方も三人いらっしゃることで分野の異なる方面からのお話を聞くことができ興味深かった。 また、グループワークがなかったことでそれにまつわるストレスがなかったことが本当に気が楽でよかった。
15	自主創造とは何をやる授業なのだろうと、シラバスを読んでもいまいち掴めずにいたのですが、それぞれ違う分野の3人の先生方が毎週テーマごとに話し合っている様子を見て、良い意味で授業感を感じず、とても入り込みやすい講義でした。 また普段普通に生活していたら気にもしないようなことを振り返って考えてみたり、他の生徒の意見を聞けたりと、多くの気づきを得るきっかけにもなりました。
16	ちょっと寝たりしてすみませんでした！楽しかったです！
17	自主創造？と思っていたが、先生が3人いらっしゃったこともあり、ラジオを聞いている感覚で楽しめた。勉強にもなった。
18	今年の講義は色んなテーマについて考えてみる時間ができてけっこう良かったと思います。すこし残念なのは自主創造と言えば学生同士で話し合うと言うのが特徴だったんですが、それができなかったことです。お疲れ様でした。ありがとうございます。
19	いろんな考えに触れられよかった
20	先生方が寄り添ってくれている感じがしてよかったです。
21	特になし
22	通常では学ぶことの出来ない範囲から様々な視野から学べてよかったです
23	よかった
24	前年と比べてとても面白かったです
25	受けやすかった。

もって講義をうけることができた学生が多数に上ったと考えられる。一方で、“いまいち、難しい”など否定的なコメントや、No.16や21など、必ずしも積極的に講義に参加できていない学生も存在していた。特に、今回は、再履修者ということを考慮し、教員が受講者からのコメントを取りまとめる形で、ディスカッション形式の講義を行っていたが、学生同士の意見交換が必要であるというNo.18の意見がある一方で、No.14学生のみグループワークがなかったことを肯定的に捉える意見もあった。ディスカッションのあり方については、今後、十分な検討が必要であるといえる。授業テーマについてはNo.11をみると、学生の専攻に関連しないテーマであっても、より身近なテーマであれば、興味をもって取り組むことが可能であると思われる。

表3 形態素解析による単語抽出

言語	頻度	品詞	言語	頻度	品詞
テーマ	6	名詞	でき	2	動詞
講義	5	名詞	できた	2	動詞
授業	5	名詞	なかった	2	形容詞
先生	5	名詞	なり	2	動詞
分野	5	名詞	わかり	2	動詞
楽しかった	5	形容詞	違う	2	動詞
思い	5	動詞	学び	2	動詞
内容	4	名詞	学ぶ	2	動詞
よかった	4	形容詞	興味	2	名詞
自主	3	名詞	視野	2	名詞
創造	3	名詞	持ち	2	動詞
して	3	動詞	自分	2	名詞
できて	3	動詞	色	2	名詞
なる	3	動詞	人	2	名詞
感じ	3	動詞	普段	2	名詞
考え	3	動詞	勉強	2	名詞
考えて	3	動詞	面白かった	2	形容詞
あり	2	動詞	話し	2	動詞
きっかけ	2	名詞			

4. まとめ

今回は対象となる受講生が再履修者のため、限定的な結果であるが、アンケート結果をみると、概ね授業改善ははかられたと思われる。各講義の授業テーマについては、必ずしも学生の専攻分野に配慮する必要はなく、身近なテーマや話題になっている物事について取り上げる方が、より積極的に参加できるのではないかと考えられる。ただし、従来採用していたディスカッションによる学生同士の積極的な意見交換を希望する学生もいれば、コミュニケーションが苦手であるために、学生のためのグループワークがないことを肯定的に捉える学生もいる。そのため、授業の進行方法については、人とのかかわり合いが苦手な学生に配慮しつつ、初年次教育で重要となる大学での能動的な学びや、大学卒業後も必要となるコミュニケーションスキルを身につけられるよう、さらなる検討と改善が必要であると考えられる。

参考文献

- 南愛 (2014), 「初年次教育としての「自立と体験1」再履修 授業実施報告」, 『明星大学明星教育センター研究紀要』第4号, 97-100頁.
- 笠見直子 (2008), 「情報リテラシー授業の再履修クラスにおけるニーズ分析と学習意欲向上をめざした「3I」導入の試み」 『日本教育情報学会第24回大会 年会論文集』, 242-243頁.
- 小川真里江・新井正一 (2011), 「情報系基礎教育科目での再履修者向け授業の試み: 3D 仮想空間をツールとして活用した協調学習」, 『大学ICT推進協議会2011年度年次大会論文集』, 496-498頁.
- 永野峻祐・小根山裕之・大口敬・鹿田成則 (2012), 「形態素解析を用いたアンケート調査自由記述欄の分析手法に関する研究—路面電車利用意識調査データを用いたケーススタディー—」, 『土木学会論文集 D3 (土木計画学)』第68巻5号, I_973-I_981頁.
- 松河秀哉・大山牧子・根岸千悠・新居佳子・岩崎千晶・堀田博史 (2018), 「トピックモデルを用いた授業評価アンケートの自由記述の分析」, 『日本教育工学会論文誌』第41巻3号, 233-244頁.

「学生が変える日本大学」

—「令和4年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」に関する報告書—

土屋怜王^{1), 2)}, 田中花奈^{1), 3)}, 中澤駿之介^{1), 4)}, 宮川美月^{1), 5)}, 大保航貴^{1), 6)}, 境野哲美^{1), 7)}
本橋侑也^{1), 8)}, 渡 祐太^{1), 9)}, 柴田大輝^{1), 10)}, 曾山はるか^{1), 11)}, 宮口昌也^{1), 12)}, 垂見麻衣^{1), 13)}

¹⁾「令和4年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」コアスタッフ,

²⁾日本大学経済学部経済学科3年, ³⁾日本大学生物資源科学部海洋生物資源科学科2年,

⁴⁾日本大学危機管理学部危機管理学科4年, ⁵⁾日本大学スポーツ科学部競技スポーツ学科4年,

⁶⁾日本大学理工学部交通システム工学科3年, ⁷⁾日本大学理工学部まちづくり工学科4年,

⁸⁾日本大学理工学部精密機械工学科3年, ⁹⁾日本大学工学部情報工学科3年,

¹⁰⁾日本大学生物資源科学部生命化学科3年, ¹¹⁾日本大学生物資源科学部動物資源科学科3年,

¹²⁾日本大学生物資源科学部森林資源科学科3年, ¹³⁾日本大学通信教育部商学部商業学科2年

はじめに

「日本大学 学生 FD CHAmmiT」とは、全国の大学が集結する「学生 FD サミット」の「日本大学版」である。「学生 FD サミット」とは全国の大学から学生 FD 活動に取り組む学生・教員・職員が一堂に会し、各大学における活動や成果を発表しあい、大学教育における課題等を共有し、議論する場である。一方、「CHAmmiT」とは、chat と summit をかけ合わせた造語であることから分かります。大学をテーマに友だちとチャットをするように気軽に話し合い、その成果を発表する場である。私たちが学ぶ大学の教育をより良くしたいという思いに基づき、学生のみならず、教職員が参加していることも大きな特徴である。

今回で10回目を迎える「令和4年度日本大学 学生 FD CHAmmiT」（以下、CHAmmiTとする）は、オンラインと対面のハイブリッド形式で開催され、255名の参加があった。新型コロナウイルス感染症対策のため、室内の換気と備品のアルコール除菌を徹底して行った。大学に通うそもそもの理由に立ち返って、教育改善につながるアイデアの共有をした。今年度のテーマは、「あなたにとって大学とは、何ですか?」である。学生が大学に求めるものは人それぞれであり、理想と現実とのギャップに向き合うことで大学教育の改善につなげたいと考えた。そのため、今年度のCHAmmiTでは、コロナ禍での大学生活を経験した今だからこそ、改めて学生一人一人にとっての「大学の在り方」を見つめ直し、何を目的に学んでいるのかを考えてもらうことで、大学教育の改善に繋げてほしいという期待を込めてテーマを設定した。

1. 今年度の「CHAmmiT」の概要と流れについて

1 第1回スタッフミーティング（令和4年7月2日）

第1回ミーティングはコアスタッフと教職員のみで開催し、互いに自己紹介をして交流を深めた上で、CHAmmiTの概要と、今年度のCHAmmiTで行うメインのテーマについて話し合った。この2年間、オンライン授業にまつわるテーマだったので、その意図に沿いながら新しい教育改善につながるテーマを検討した。

2 第2回スタッフミーティング（令和4年7月16日）

第2回ミーティングでは、CHAmmiTについて学生スタッフに説明し、開催方法や大学全体としての教育改善について話し合いを行った。話し合った内容をGoogle Jamboard（以下、Jamboardとする。）にまとめ、全体で共有した。

大学全体としての教育改善については、全学的に推進でき、且つ教育改善に繋がる事として、授業中の交流が少ないが為に情報の共有ができていない状況を改善する事、授業や学習環境については施設に関しても含めて改善する事、授業内に於けるITツールを活用した対面授業を実施する事、オンライン授業とのハイブリッド化を行う事等が意見として挙げられた。

3 第3回スタッフミーティング（令和4年8月23日）

第3回ミーティングは今年初の対面と、オンラインのハイブリッド形式での開催であった。内容は今年のCHAmmiTの主題であった「あなたにとって大学とは何ですか？」をテーマとして、Jamboardを用いて意見をまとめ、考えの共有を行った。

グループによって「大学とは」のまとめ方に違いがみられ、理想と現実とを分けて考えるグループ、何のために大学での学修があるのかを深く考察するグループなど、それぞれに個性が出ていた。まとめると「ビジネス」（就職訓練校としての大学）、「アカデミック」（研究機関としての大学）のような大学の捉え方に分けられ、加えて友人と学びあう、人格形成のためといった意見も見られた。議論を進めるうちに自分が理想を求めて入学した理由と現在とのギャップに触れ、問題点について述べていたグループも多くあった。大学が何のためにあるのかを改めて全体で確認するとともに、現状との違いを深く考察できる機会になったミーティングであった。

ミーティング後には林理事長による懇談会が行われ、普段の学生生活での不満を直接伝えられる場が設けられた。多くの意見が学生側から挙げられ、それに対する理事長の見解をお聞きすることができ、有意義な時間を過ごした。

4 第4回スタッフミーティング（令和4年9月10日）

第4回ミーティングも対面とオンラインのハイブリッド形式での開催となり、本番さながらに、セッションテーマを使用して、それぞれのセッションテーマを深く掘りさげた。今回からグループのファシリテーターはコアスタッフではなく、学生スタッフが担当し、練習を兼ねた。

学生スタッフからは、まだまだファシリテーションに不安な声もあったが、グループワークの結果、専門的学修に対する満足感が指摘される一方で、オンライン授業と対面授業のバランスに対する不満が多く挙げられた。近年、オンラインでの授業が増えたものの、その手法が活かされないまま対面授業に戻るのは勿体無いため、オンライン授業と対面授業の双方の良い点は活かし、よりよい学生生活を送りたいという、学生

の学修意欲に対する強い意志を感じる意見交換が活発に行われたように感じる。学修の在り方について再確認する良いきっかけになった。

5 第5回スタッフミーティング（令和4年10月1日）

第5回ミーティングも、前回同様に対面とオンラインのハイブリッド形式で開催し、本格的なファシリテーションマニュアルの読み合わせを行った。

中でも、セッション1の「大学で、何を、何のために、どのように学びたいと思った？」では、対面形式とオンライン形式ではファシリテーション方法が違う為、コアスタッフがリードをしながら、共有を行った。セッション2「思い描いた大学生活を送れていますか？」と、セッション3の「あなたにとって、大学とは何ですか？～学部への提案～」では、Jamboardを使う為、付箋機能の確認を行った。そして、セッションごとのファシリテーターの役割を明確にし、ファシリテーションのコツを共有した。

ファシリテーションマニュアルをただ読むだけでなく、しっかりスタッフ間でサポートしあい、より良いファシリテーションへの理解を深めた。

6 第6回スタッフミーティング（前日リハーサル）（令和4年10月15日）

第6回ミーティングは日本大学 学生FD CHAmmitの開催前日に行われ、前回同様対面とオンラインのハイブリッド形式で開催された。本番に向けて情報共有、会場設営、オンライン・対面グループ双方のリハーサルを行った。

役割確認やアジェンダ、ファシリテーションマニュアルの最終読み合わせを行い、参加者全員で共通理解を図ったのち、対面グループは会場設営を開始した。通信教育部の机を動かし、模造紙や付箋、マーカーなどのしゃべり場の準備を行った。その後、本番と同じようにリハーサルを行った。本番を想定し、対面グループは模造紙、オンライングループはJamboardを用いてセッション1～3までを通して行った。実際に行うことで疑問点生まれ質問しているスタッフも多く、有意義な時間にすることができた。全体でのリハーサル終了後、場所を変えて、翌日のCHAmmit本番に向けた仕上げの作業と追加の練習会が行われた。

7 令和4年度 日本大学 学生FD CHAmmit 当日（令和4年10月16日）

令和4年度は対面とオンラインのハイブリッド形式での開催となった。参加者は完全オンラインだった昨年度とは異なり、今年度は参加者の半数以上が通信教育部に集い、オフラインで活発な議論を行った。

スタッフは、参加者と見分けがつくように揃いのTシャツを身に着け、ネームプレートを首から下げてファシリテーションした。また、対面のしゃべり場では模造紙、及び付箋を使い、参加者同士の距離が近くなるように工夫をした。

7-1 10:30 スタッフ集合

対面参加スタッフは日本大学本部大講堂に、オンライン参加スタッフはZoomに接続して集合した。今年度のCHAmmitスタッフTシャツを配付し、出欠を確認した。

7-2 10:30～11:00 スタッフ最終打ち合わせ

キャプテンからの挨拶後、ファシリテーションマニュアルを使って当日の流れの最終確認を行った。最後にスタッフ全員で集合写真を撮影して、スタッフは役割に応じて、本部又は通信教育部の建物へ移動した。

7-3 12:30～ 一般参加者受付開始

対面参加者は、通信教育部に集合し、スタッフの案内に従った。一方オンライン参加者については、コアスタッフによる参加者のZoomの入室管理を行い、出席確認を行った。入室管理では、参加するグループ番号を事前に設定していたため、それぞれのセッショングループにおける人数調整の要否確認を行った。そして、Zoom入室後は注意事項を記したスライドを共有した。

7-4 13:00～13:30 オープニング

オープニングムービー上映後、日本大学FD推進センター長である大貫副学長と土屋キャプテンが挨拶をした。CHAmmiTの説明と当日のテーマとスケジュールの共有、注意事項の案内がされ、しゃべり場をより楽しんでもらうためのコツの共有が行われた。その後、オンライン参加者はブレイクアウトルームへの移動を開始するアナウンスに従い、それぞれのグループへ移動した。ブレイクアウトルームでは、ファシリテーターがタイムキープしやすいように、ブロードキャスト機能で残り時間のアナウンスを適宜入れた。

7-5 13:30～13:40 アイスブレイク

グループのメンバーが揃ったグループから、簡単な自己紹介と「もし、日本大学に新しく学部を作るならどんな学部を創設したいか?」というテーマで、自由に会話を楽しんでもらった。各参加者は、自分のアイデアをA4用紙に書き出してもらい、学部の異なる参加者同士が初対面でも会話を楽しんでもらう機会とした。

7-6 13:40～14:10 セッション①

「大学で、何を、何のためにどのように学びたいと思いましたか?」

セッション①では、学部混合グループに分かれ、大学で学ぶ目的について議論した。このセッションでは、参加者が普段の大学生活で「何を、何のために、どのように」学んでいるかを考えてもらう形式で意見の共有をした。対面グループでは模造紙に各自の意見を付箋で張り出し、オンライングループではJambordで同様の作業を行った。次に、参加者各自が大学に通う目的を整理したうえで、授業環境で良かった点、要望、改善すべき問題点について、意見交換を行った。日本大学に進学した理由や現在の目標を再確認することで、進学前に求めていたものや現状困っていることを参加者自身で整理してもらったが、そこには続くセッション②・③で意見を出しやすくする意図があった。

7-7 14:25～14:35 アイスブレイク

学部混合で実施したセッション①とは異なり、セッション②・セッション③では学部ごとのグループ編成であった。セッション①の前と同じテーマでアイスブレイクを行って意見を出しやすい環境づくりを図った。

7-8 14:35～15:25 セッション②

『思い描いた大学生活を送れていますか?』あなたの理想は達成できていますか?』

セッション②では、実際の授業環境で満足している点と不満足な点を共有した。このセッションからは対面グループ、オンライングループともにJambordを使用して意見を出しあった。また、満足している点をピンク色の付箋で、不満足な点を青色の付箋でそれぞれ色分けして意見共有してもらうことで、授業環境の充実度を視覚的に把握できるようにした。満足・不満足の見出し終了後、付箋のグルーピングを行い、各学部の授業環境には、どのような点に強み・改善点があるのかを確認した。

7-9 15:35～16:25 セッション③

「あなたにとって、大学とは何ですか？～学部・全学への提案～」

セッション③では、同じ学部で集まってもらい、他学部で実施されているが、自学部に取り入れられていない制度など、これまでのセッション①とセッション②で議論・共有した内容をもとに、自学部と大学に提案したいことについて話し合った。このセッションでは、学部提案書を作ることを目標にしていた。グループ参加者は、自身が感じる不満点を改善するアイデアや他学部で実施されている有用な制度の共有を行い、日本大学全学で取り組むべき企画や自学部で実施してほしい取り組みの案をまとめた。

7-10 16:30～17:00 エンディング

エンディングでは、対面グループも Zoom に接続し、セッション③で作成した学部提案書の発表が行われた。酒井学長と田中キャプテンが挨拶後、集合写真を撮影し、エンドロールを上映し、令和4年度 CHAmmiT は閉会となった。

2. 参加者の制作物の分析

本節では、「令和4年度 学生 FD CHAmmiT」のセッション①～③の制作物の分析を行う。

セッション① テーマ『大学で、何を、何のためにどのように学びたいと思いましたか？』

セッション①では、学部混合でのグループに分かれて、模造紙と付箋を用いて、「大学で学ぶ目的」をみんな考えて話し合った。以下の表の様に、「何を」「何のために」「どのように」の3つの項目で分けて、大学で学ぶ目的や実際とのギャップを挙げていった。次に良かった点、問題点、要望についても同様に挙げていった。学びをアウトプットするためのグループワーク等の学生間交流についてや Wi-Fi をはじめとする授業環境等についての意見など、コロナ禍後ならではの意見が多く出たと感じる。また、3年ぶりの対面での開催ということもあり、緊張もみられたが、つつがなく進められていたと思う。

セッション② テーマ『思い描いた大学生活を送れていますか？』

セッション②からは、同学部で集まり、Jamboard を使用した。セッション①では、自分の大学に通う目的や授業環境で良かった点などを挙げてもらったが、セッション②からは、セッション①の内容を活かし、学生と教職員の両者から意見を挙げてもらい、日本大学の教育の理想と現実の差として、「各学部の改善できる問題点は何か？」を「満足」と「不満足」の2方向から深く掘り下げていった。セッション③の学部提案書に繋がる大切なセッションであるため沢山の意見が出て来た。コロナ禍の影響の残る学部からはそれに対する規制緩和、それ以外の学部では各学部の特色をより活かせる改善案が出て来たように感じる。

セッション③ テーマ『あなたにとって、大学とは何ですか？～学部への提案～』

セッション③では、先程と同様のメンバーで、これまで話し合ってきた内容を活かし、学部ごとに「理想の大学生活について」話し合った。そして、その内容をより具体的な提案書という形で記していくに当たり、「現状の問題点の分析」、「学部を『理想の学部』にするための提案」、「日大を『理想の大学』にするための提案」の3つの項目について書いてもらった。これにより参加者もより明確に自分の考えを整理することが出来たと思う。

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
1-オ対. 法学部	<p>a. 課題へのフィードバックの量。</p> <p>b. 交流機会の量。</p> <p>c. 施設や設備について。</p>	<p>d. 学生のモチベーション向上のためフィードバックの活発化。</p> <p>e. 他学年・他学科との交流機会を設ける。</p> <p>f. ポータルシステムの機能改善・向上。</p> <p>g. 全棟での設備統一化。</p>	<p>h. システムの統一化。</p> <p>i. イベント参加機会の増加。</p> <p>j. アドバイザーの増員。</p> <p>k. 全学的な学生・教職員向けアンケート（目安箱）の設置。</p>
2-オ. 文理学部	<p>a. 学科横断型授業について、学科横断の意味が吟味されておらず、曖昧な状態であること。</p> <p>b. 幅広く展開できるほどの教員数がない。</p> <p>c. 日本語が不自由な人に対する説明が少し足りない。</p>	<p>d. 全学科の教員、学生を交えた会議を行う。</p> <p>e. 専門的な授業内容であるが故に、他学科への授業参加の困難さが目立つため、他学科聴講生のための授業も開講してほしい。</p> <p>f. 一番増やしやすいと考えられる外国語科目の教員の増加や、教員の他学部への派遣をしてほしい。（オンラインでできるのであればそれも可）</p> <p>g. 学科学生を留学生に1:1で付けて日本語を向上させたり、日本の学生に多文化を知る機会を作ること。特に必修科目については同じ授業を聞くため、行いやすい。</p>	<p>h. 横断型授業について、他学科の方に自学科の専門性の高い内容を学びやすい環境を作してほしい。</p> <p>i. 留学生へのサポートが足りないと感じるため、日本語話者との定期的な交流の機会や、希望者には大学生生活について相談しやすいようにバディ制度を導入するなどの対応が欲しい。</p>
3-オ. 文理学部	<p>a. 学生同士の交流（飲食や会話等）をしながら学ぶスペースがない。</p> <p>b. 学びをアウトプットする環境がない。</p> <p>c. 知識を与える受動的な講義が多く、先生側のリアクションもないため、学生が能動的に講義に参加するスタイルの講義が少ない。講義形態にかかわらず対面に戻ってしまっている。</p> <p>d. ネットワーク設備の拡充について、学部側が対応済みとの認識であり、学生数に対応しきれていない。学内の開放パソコンの利用が進んでいない。</p> <p>e. 課外活動や学外における接点が少なく、アウトプットに対してハードルが高い。</p>	<p>f. 学生に空き教室を分かりやすくする。</p> <p>g. 授業形態の見直しを行う。（対面やオンデマンド授業）</p> <p>h. 学内の開放パソコンの使用を推進する。</p> <p>i. 課外活動の量を増やす。</p>	<p>j. 講義によってどの形式が適しているのを見直す。</p>

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
4-オ. 経済学部	<p>a. 授業について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ハイブリッド型の授業が少ない。 ・オンラインとオンデマンドの授業でコマが被ってしまうことがある。 <p>b. 施設内で Wi-Fi が弱い箇所がある, コンセントが足りないところがある。</p> <p>c. 運用について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オンラインブースの利用手続きの工程が多い。 ・必修授業の選択ができない。 ・経済学部には運動部に所属する学生のための授業がない。 ・公欠申請の工程が多い。 	<p>d. 原則対面の緩和をし, 様々な学生の要望に合わせてオンラインやハイブリッドにする。</p> <p>e. ハイブリッド型にすれば電気の使用量が減り停電の可能性も低くなる。</p> <p>f. 教職員がオンラインの利用方法について研修をして能力を高める。</p> <p>g. オンデマンド授業は他の授業と被らないように時間設定する。</p> <p>h. コンセントを増やす。</p> <p>i. Wi-Fi の点検。</p> <p>j. 電気・通信関係の改修。</p> <p>k. エコリンクオンラインブースについて, 予約システムのオンライン化と窓口での手続きを自動化する。</p> <p>l. ゼミと必修授業が重なったときに, 受講する必修授業を選べるようにする。</p> <p>m. 競技部の学生が受講しやすい専用科目を作る。</p> <p>n. 公欠届のペーパーレス化。</p> <p>o. 教員が質問に回答する期限を作る。</p> <p>p. 学生にアンケートをとって要望を調査し, それを踏まえた大学の対応を保護者に周知する。</p>	<p>q. オンライン化を進める。</p> <p>r. 学部間の交流・連携を増やす。</p>
5-オ. 商学部	<p>a. 学生が学ぶ喜び・目的が分かっていない。</p> <p>b. 全学部の交流イベントが少なく, 交流機会を提供しても参加者が少ない。</p> <p>c. 生徒があまり積極的ではなく, 大人数の授業の場合先生との距離が遠い。</p> <p>d. 一日のコピー制限がある。</p> <p>e. フィードバックがない。</p>	<p>f. 将来へのつながりを知るきっかけを作る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・心のケアとして友達作りの場を設ける。 ・シスター制度をつくり, 先輩が1人の生徒につく。 <p>g. 意欲や目的がある学生同士で小さなまとまりの交流を行う。</p> <p>h. 学生が積極的に授業を受けられるように, とりたい授業をとれるようにする。また, 意欲のある学生はオフィスアワーを活用しやすいようにする。</p>	<p>k. 社会人との交流の場を設ける。</p> <p>l. 交流イベントを増やす。</p>

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
		i. 一日当たりのコピー制限を廃止する。 j. 生徒からの質問を全体でPDF共有する。	
6-オ対. 芸術学部	a. オンライン授業になったことで、受講者数が増え、教員の負担が増えた。また、生徒への十分な対応もできなくなっている。 b. 他学科との授業交流が不十分である。	c. 助手・職員・学生で教員をサポートする体制をとる。 d. 授業として他学科交流の機会を作る。 ・一般教養科目の中に他学科交流授業を作る。 ・各学科の基礎的な授業を受けられるようにする。	e. 学部間の様々な差別をなくしたい。 f. 目安箱を設置する。
7-オ対. 国際関係学部	a. 対面とオンラインの区別が曖昧であり、授業の質にも差が出ている。 b. 国際関係学部と短大のビジネス教養学科の連携が少ない。 c. Wi-Fi環境が不十分。	d. 引き続きオンラインを活用し、Zoom等で講義の同時配信を行う。 e. 月一回程度で教職員間での意見交換を行い、目安箱のように学生側からも意見を出しやすい環境作り、それらの見える化。 f. Wi-Fiの点検や工事等を行うことで、Wi-Fi環境の更なる拡充を図る。	g. 他学部と連携した講義を作る。 h. ワールドカフェみたいな交流の場を、全学年対象(学年関係なく)として増設する。
8-オ対. 危機管理学部	a. シラバス 専門的な学びはできているもののシラバスの扱いが雑。シラバス通りに進まない・違う講義で同じ動画を流す授業も。 b. 準備環境 授業レジュメ等で使いたい、プリンターの紙補充などがされていないことがある。 プリンターを使用しようとしてもプリンターの名前と場所が一致しない。無駄な移動をしなければならないこともある。 c. 学生・教員のモチベーション維持 やる気のない学生に注意しない教員がいて、授業に集中できない。学生の意識は教員にも伝播する。	d. シラバスや授業環境の改善のため、シラバス・授業準備マニュアルの改訂資料配布の方法統一化。 e. プリンターの名前変更。	f. 授業資料作成講座の開催。 g. 各学部で学生・教員の成績表彰。

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
9-対. スポーツ科学部	<p>a. 試合などが重なり、履修登録に余裕がない。</p> <p>b. 授業評価アンケートの結果が反映されているのか分からない。</p> <p>c. 充実した施設があるにも関わらず、授業で使われることがない。個人でも使用が難しい。</p>	<p>d. 履修登録期間の延長。(現在の2日前から開始)</p> <p>e. 点数や評価に対する改善策をシラバスに掲載。</p> <p>f. 各授業の具体的な内容やその評価が明らかになっているサイトを学部内で作成。</p> <p>g. 施設を利用した実践的な授業の構成。</p> <p>h. 施設に関する規則の緩和。コロナ前に出来ていたことを出来るようにしてほしい。(自転車置き場から直接キャンパスに入れる自動ドアの開放など)</p>	<p>i. 全学部の情報を仕入れられるシステムの構築。(電子掲示板などを開放し、他学部の情報が仕入れられるようなもの)</p>
10-オ. 理工学部	<p>a. 授業について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料や動画の配布がない。 ・成績開示が遅い。 <p>b. 課題について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・評価基準が学生からは見えにくい。 ・返却や解説がない。 ・提出方法がバラバラである。 	<p>c. 著作権などの問題について学生に情報発信する。</p> <p>d. 成績開示期間を早める。</p> <p>e. ルーブリックの設定・開示を行う。</p> <p>f. 紙媒体かデータかで課題の提出方法を統一する。</p>	<p>g. 特になし。</p>
11-オ. 理工学部	<p>a. 産学連携が少ない。</p> <p>b. 留学ができない。</p> <p>c. オンライン化で質問がしにくい。</p> <p>d. パソコンの充電場所が少ない。</p> <p>e. 研究に対する意識が早い内にできない。</p> <p>f. 事前の説明とは異なった授業内容が実施されており、繋がりが見えない。</p>	<p>g. 研究室から先端技術についてアピールできる機会を設ける。</p> <p>h. 学科教員が制度を理解し、説明できる様にする。</p> <p>i. 教員が学生を連れて説明を聞きに行く。</p> <p>j. 基礎教育科目の中で、関連する専門科目について触れる。</p> <p>k. 卒業研究が始まる前から、学会に出られる様にする。</p> <p>l. 大学説明会等で、過度に聞こえの良い情報ばかり発信せず、現実的な情報も伝える様にする。</p>	<p>m. 説明会を設ける。</p> <p>n. 基本は対面で質問する様に指示する。</p> <p>o. アフターコロナを考慮した充電設備を設ける。</p> <p>p. 研究室に足を運べる制度を作る。</p> <p>q. 1年生の時に説明の機会を設ける。</p> <p>r. もっと教員側から学生に歩み寄り、認識のズレを防ぐ。</p> <p>s. 予め教員に、学生と教員間で知識量に差がある事を伝える。</p>

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
12-オ対. 生産工学部	<p>a. 1年生はパソコンで資料作製が先生の思っているよりできていない…Word, Excel, PowerPointも慣れていない。</p> <p>b. ネット環境 特に数理情報工学科はデータの大きいアプリ等を使用するため、授業で全員が一斉にPC作業をするとWi-Fiがつかず、作業ができない。</p> <p>c. 棟と棟の間が遠いため、移動が困難。例) 39号館から37号館) また、実初と津田沼の行き来が困難なため、上級生の教養1年生科目の履修が難しい。</p> <p>d. 下級生は研究室の交流がないため、ゼミや研究室を選ぶ際に参考となるものがない。また、TAはいるが、授業時間外に質問をしに行きにくい。研究室の雰囲気が怖い。</p>	<p>e. 教員側が、学生が不慣れなことを考慮した授業展開にするだけでなく、アカデミックアドバイザーのように、PCの使い方を教えてくれる人を常駐させた上で、動画等でも説明があると良い。</p> <p>f. ・空き教室を活用する。 ・学部で階層を決めない。 ・教養科目を津田沼でも実施する。 ・オンライン授業の活用。</p> <p>g. ・研究室に行きやすい雰囲気づくり。 ・研究室ツアーの実施。 ・上級生と気軽に話せる環境づくり。</p> <p>h. 授業時間を有効活用するための手法の導入。 例) 反転学習など 反転学習を実際に取り入れている先生がいるため、それを参考とし進める。すべてにおいて反転授業の実施をすれば、自然に慣れると考えられる。また、その実施により考える学習も自然に増すだろう。 ・考える手法を知りたい。 例) KJ法 ・教員間で授業の質の差があるため、ベストオブ先生賞をつくる。 ・テストにおける、点数開示や解説を必ず行う。</p>	<p>i. 他学部との交流機会を増やす 例) CHAmmiT やワールドカフェのようなもの。また、他学部との情報共有を図る。</p>
13-オ. 工学部	<p>a. 教育とカリキュラム</p> <p>b. 授業</p> <p>c. 教員</p> <p>d. 今後の展望 (アフターコロナ)</p> <p>e. ICT</p>	<p>f. 学部、教員、生徒での意見共有の場を設ける。(生徒は教員に対する生徒の指摘後の学部から教員に対する指導を知らない)</p> <p>g. 課題の提出先の統一。</p> <p>h. ポータルサイトの使い方を学期途中に変えないでほしい。</p>	<p>i. 他の学部との共有の場を増やす。(運動含め)</p>

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
14-オ. 医学部	<p>a. カリキュラム 他学部の講義や一般教養の講義を受けられない。</p> <p>b. 学校環境 ・ネットが弱い。 ・部活が少ない。 ・食事の環境。</p> <p>c. オンライン授業 メールやクラスルームでの質問がしづらい。</p> <p>d. システム</p>	<p>e. 医学関係以外の講義(一般教養など)の選択科目を増やす。 例) 経済学の基礎 ・医療系学生(看護学生など)との交流機会を増やす。</p> <p>f. ・更なるWi-Fiの強化(特に組織実習室など)。 ・学生主体のイベントを開きやすくする。 例) 講義部屋や体育館などの施設の利用申請をしやすくする。 ・キッチンカーの値段を安くする, もしくは学食をつくる。</p> <p>g. 気軽に質問できるチャットシステムなどをつくる。</p> <p>h. ポータルサイト・moodleなどのシステムを統一する。</p>	<p>i. 医学部を含めた他学部との交流講義を増やす。</p> <p>j. 学部間での交流機会や部活を作ることなどをしやすくする。 例) e-sports 部</p>
15-オ対. 松戸歯学部	<p>a. 学修スペースに関して</p>	<p>b. 先生方は授業アンケートのフィードバックをするだけでなく, これからどうするかを具体化してほしい。</p> <p>c. 空き教室と自習室の空き教室の時間, ルールを明確にしてほしい。</p> <p>d. 1~4年生が自由で使用できる実習室の確保。(院内生用実習室の使用許諾, 等)</p>	<p>e. 特になし。</p>
16-オ. 生物資源科学部	<p>a. 課題提出の統一化がされていない。課題提出の期限や提出場所, 提出方法が分からないことがある。</p> <p>b. 教職員が受け持つ学生数について改善してほしい。 ⇒多いと学生へのフィードバックができないことにつながる。</p> <p>c. 実験の回数が少ない。 ⇒天候やコロナ関連で実習や実験が少なくなってしまうこともある。 理系学部として学費を支払っているため, その分の学びを大学で経験したい。</p> <p>d. 研究室が足りていないように思う。</p>	<p>f. Google クラスルームのTODOリストを使用してほしい。 ⇒使用にあたって提出期限とその締め切りは対応させてほしい。(今日中に提出なのに無期限になっているなど)</p> <p>g. 教職員が受け持つ学生数を調整してほしい。(100人までなど) ⇒学生側から出る意見としてフィードバックがないことがよく挙げられる。これは受講者数が多いために先生方の対応が難しくなっているのではないかと考える。</p> <p>h. 振替講義などでなくなってしまった分の実習や実験は少しでも多くできるようにしてほしい。</p>	<p>k. 課題提出方法の統一化をしてほしい。具体的にはT O D Oリストでの提出を基準としてほしい。</p> <p>l. CHAmmiTの継続的な実施によって教職員と学生が意見交換できる場が欲しい。</p> <p>m. 総合大学としての強みを生かした交流の場が欲しい。この交流によって多様な価値観や考え方に触れることができ人脈形成や人生の歩み方が多様に拓ききっかけになると考える。 E X.) 他学部の講義を受けられるイベントを通じた交流など。</p> <p>n. 不祥事に対して具体的な改善策が都度見れるようにしてほしい。</p>

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
	<p>e. 学生生活に関する情報が散分している。 ⇒情報を発信するツールが複数あるため発信する教職員側も受け取る学生側もストレスに感じ、重要な情報も拾い損ねる可能性がある。</p>	<p>i. コロナ対策による実験室の使用人数の制限を緩和してほしい。(班構成の改善など) j. 情報ツールの統一化をしてほしい。 ⇒講義に関する連絡はクラスルームやGメールなど。履修登録などのみポータルサイトの使用など。 情報の統一化により学部イベントの情報も受け取りやすく、イベント参加への士気が向上し学生同士の交流にも繋がる。</p>	<p>o. 検温の入力が意外と大変で入力している学生が少なく感じる。そのため必要性の有無について再考していただきたい。</p>
<p>17-オ. 生物資源科学部</p>	<p>a. 研究室費が偏っている。 b. 決まりを守っていない学科がある。 c. 教職課程をとっている人への大学側の対応があまい。 d. 先生が動画をアップロードするかを決めている。</p>	<p>e. 配属人数を調節する。 f. 意見を出しやすい環境を作る。 g. 窓口を設置する。 h. 先生全員が講義動画をクラスルームに挙げて欲しい。</p>	<p>i. 匿名で送れる目安箱の設置。</p>
<p>18-オ. 通信教育部</p>	<p>a. 授業環境について授業の配信が時代・やり方に沿っていない、授業内容の更新が追いついてない、先生によって熱意が違い授業の濃さが違う。 b. 学部内外の学友・教職員との交流の機会が少ないこと。</p>	<p>c. Zoom 授業でも youtube (アーカイブ) 配信を増やす。 d. メディア授業の内容・教科書を更新してもらいより深い学修にする。 e. 授業に対する熱量を増やす。(学生・教職員) f. 学部 miniCHAmmit などの開催。</p>	<p>g. ポータルの統一。 h. 教員の全学部間共有・授業に対する認識合わせ。 i. オンライン化の促進。 j. CHAmmit 年2回開催。 k. ワールドカフェ(通信の通知・参加, 全学年参加)</p>
<p>19-対. 文理学部</p>	<p>a. 通信環境(Wi-Fi)の弱さ。 b. 紙媒体での出欠管理。 c. コピー費用。 d. 課題の提出方式。 e. 課題に対するフィードバックの少なさ。</p>	<p>f. 学部全体での通信環境強化。ポケットWi-Fiの導入など。 g. 出欠管理における学生証スキャン方式の導入。 h. 他学部(危機管理など)で導入済みのコピー機利用ポイント制度の導入。 i. 課題提出に関するマニュアル作成・講演会の実施。 j. シラバス上においてフィードバックの有無や量の記載を行う。 k. フィードバックの必要・不必要についてアンケートの実施。</p>	<p>l. 通信環境の保障を行う。 m. 学部間でのコミュニケーション。</p>

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
20-対. 文理学部	<p>a. 教職員の対応の差。</p> <p>b. 学習支援システム black board の使い方が分かりにくい。</p> <p>c. 就活を意識した授業からの脱却。</p> <p>d. キャンパスの点在による交流機会の低下・目的不足。</p>	<p>e. 教職員用ガイドラインの作成・学生への明確化。</p> <p>f. 教職員同士の交流の場の増加。</p> <p>g. 学習支援システムの利用方法に関するガイダンスや相談会の設置。(オフライン)</p> <p>h. 目的意識の持った交流の場の設置。</p> <p>i. 単位目的の交流の場の廃止。(ワールドカフェ等)</p>	<p>j. 他学部・他学科で自身の研究や興味のある授業, 学生・教職員をつなげるシステムの構築。</p> <p>k. 全ステークホルダーから「愛される日大」への生まれ変わり。</p> <p>1. 在学中の学内起業支援・促進。</p> <p>m. 学費収入に依存しない大学の運営方法の構築。</p> <p>n. 日大(学部)へのインターンシップ。</p> <p>o. 各種運動部の試合観戦の促進。</p> <p>p. 全学統一システムの構築・運用。</p>
21-対. 経済学部	<p>a. 人数が多く, 教室に入れない。</p> <p>b. 通年でしか履修登録できない。</p> <p>c. 就活向けの講義が少ない。</p> <p>d. 先輩後輩や他学部間の交流が少ない。</p> <p>e. 課題提出方法の統一ができていない。</p> <p>f. シラバスに授業の詳細が書かれていない。</p> <p>g. ゼミの定員が埋まっている。</p> <p>h. ゼミの情報が入ってこない。</p> <p>i. ゼミの広報が行き届いていない。</p> <p>j. 通信が重い。</p> <p>k. 教室数が不足している。</p> <p>l. オンライン授業が学内で受講できない。</p>	<p>m. 同科目名の講義を増やす。</p> <p>n. 履修者数に偏りが出ないように, 曜日時限を調整する。</p> <p>o. 学生に人気の講義を次年度に増やす。</p> <p>p. 学部内・外ともに交流機会を増やす。</p> <p>q. 同じ講義を週に何回か行う。</p> <p>r. 可能な範囲で先生方に統一していただく。</p> <p>s. 授業アンケートを学生が見れるようにする。</p> <p>t. 学内に授業評価がみられるツールを作る。</p> <p>u. ゼミの情報を頻繁に更新する。</p> <p>v. Wi-Fiの強さを高める。</p> <p>w. オンラインブースの数を増やす。</p>	<p>x. 相互履修制度を充実させる。</p> <p>y. 教員と学生の相互に評価制度を設ける。</p> <p>z. 学部の垣根を超えて交流機会を増やす。</p> <p>1. 学部間で, 相互にサービスを利用できるようにする。</p> <p>2. 学部に関係ない講義を作る。</p> <p>3. 志望動機などを聞いて個人を尊重しあう。</p> <p>4. 学生と教職員との連携を強化する。</p> <p>5. 説明会以外にも先輩と交流できる場を設ける。</p> <p>6. ネットワーク回線を強化する。</p> <p>7. 個別オンラインブースの充実。</p>
22-対. 芸術学部	<p>a. Wi-Fiが弱い。</p> <p>b. 授業設備が非充実である。</p> <p>c. 学科の機材の貸出しがしにくい。</p>	<p>g. どの校舎にいても使えるように, 学内のWi-Fiを統一したり, Wi-Fiが届くエリアを広くしたりするなどしてWi-Fiを使いやすくする。</p>	<p>s. 他学部との授業での交流がほほないので, 総合大学ならではの授業を実施する。</p> <p>t. 自主創造の授業の目的を示す。</p>

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
	<p>d. 授業について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業アンケートの結果の改善が見られない。 ・授業内容が1～20年前と同じである。 ・教職科目が卒業単位数に含まれない。 <p>e. シラバスからの情報収集が困難である。</p> <p>f. 必修科目に自主創造が含まれている。</p>	<p>h. 授業時間外の交流を増やせるように、学生が交流できるスペースを増やす。</p> <p>i. 学科の機材をネット予約できるようにする。</p> <p>j. オンラインで誰でも見れる機材リストを作る。</p> <p>k. 他学科に機材を貸出しする。</p> <p>l. 教員が授業評価アンケートの結果を受けてどのように改善したのかを周知する。</p> <p>m. 放送学科の専攻を確定する前に授業見学の機会を設ける。</p> <p>n. 学期始めの週などで体験授業を全学科増やす。</p> <p>o. LiveCampus, 時間割システム, ポータルサイト, ガイダンスサイトを統一する。</p> <p>p. 自主創造の授業を必修科目から除外する。</p> <p>q. 土曜日に必修科目を設置しない。</p> <p>r. 身体ケアを体育の授業に取り入れる。</p>	
<p>23-対. 国際関係学部</p>	<p>a. 対面とオンラインの評価基準が同様で、対面参加の利点がない。</p> <p>b. 講義資料を授業内で確認する際にフリーズしてしまう。</p> <p>c. 15号館を中心に見えない映像、聞こえない講義等AVシステムが耐用限度を超え授業に支障がある。</p>	<p>d. Wi-Fi環境の改善が望ましい。動画視聴の充実や学内でのオンライン学習環境を整える。</p> <p>e. 今後のハイフレックス授業も強く念頭に置いた新AVシステムを順次導入。現状対処として全教室のAV(マイクやスピーカーのプロによる点検は必須)。同時にLMSの導入も検討する。</p>	<p>f. ワールドカフェ以外の他学部との交流機会を設けるほか、日本一の規模や多様な学びを活かすための学部間連携(授業/研究系+コミュニティ系)とOB/OGとの交流拡大を図る。</p>
<p>24-対. 理工学部</p>	<p>a. 人との交流が少ない。</p> <p>b. 課題の量と難易度が考慮されていない。</p> <p>c. 課題の提出手段の統一化とCST-VOICEの改善。</p> <p>d. 実験実習科目の対面形式での実施。</p>	<p>e. 授業内での交流機会を増加(グループワークの実施)させる。</p> <p>f. 教授間で課題に関する情報共有を行う。</p> <p>g. 教員向けに使用方法に関する講座を実施する。</p> <p>h. 学生に対し、使用方法を説明した資料を配布する。</p>	<p>k. サークル活動の活性化を行う。</p> <p>l. 学部間交流イベントを実施する。</p> <p>m. 学生から課題にかかる時間や難易度に関する意見を集め、フィードバックを行う。</p>

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
25 -対. 理工学部	<p>a. 非常勤の先生方へのオンライン授業のための機能の説明が不十分。また、十分に理解していない。</p> <p>b. 先生がフィードバックを行っていない。</p> <p>c. 授業に対する学生の改善案が届いていない。</p> <p>d. CST-VOICE でログインが多重に要求される。</p> <p>e. 使用するアプリが多い。</p> <p>f. 教室設備の基準が定められていない。</p> <p>g. 学生への状態調査が足りない。</p>	<p>i. 緊急時の Q&A やチャットサービスを常設する。</p> <p>j. オンライン併用しながら、対面形式に移行させる。</p> <p>h. 学校側からの学生交流の機会や場所の提供がない。</p> <p>h. 定期試験後の授業外にオンラインで返却し、フィードバック動画の配信をする。</p> <p>i. アンケートを実施し、アンケート結果や改善案を学生側に提示する。</p> <p>j. アンケート調査を実施し、教室設備基準を設ける。</p> <p>k. 特定の教室を開放するなどして交流場所をつくる。</p>	<p>l. ZOOM などの使用が不自由な先生の授業に T A の学生がつく。</p> <p>m. オンライン授業に必要なことを学べる先生用の研修会を用意する。</p> <p>n. 学生側からシステムなどに対する改善案を提出できるフォームを作成する。</p> <p>o. 教室が使いやすくなるように、大学での感染対策のルールを統一する。</p>
26 -対. 理工学部	<p>※★は特に印象に残っている問題点として上げられたもの。</p> <p>★ a. 基礎科目が多すぎて負担が大きい。 →教授間の課題量の共有ができていない。</p> <p>b. 他大学で対面授業が始まってもオンライン授業が続いた。 →大学全体の対応が遅い。</p> <p>c. 学生時代にゼミが一度も対面で行われなかった。 →話し合いが行いづらい。</p> <p>d. 5,6 限の授業が対面(専門・言語系)。 →空きコマがあったり、遅い時間だけ登校する必要がある。</p> <p>(e. オンライン授業になったのに設備費が取られた。 →お金の使い道の開示が不十分。)</p>	<p>t. 教授間で課題の量を共有し、課題を出す時期を調整する。</p> <p>u. 対面でもできる環境と対面を行う方法のルールを作る。</p> <p>v. 遅い時間の授業をオンラインにし、早い時間の授業を対面にする。</p> <p>w. 空きコマを有効活用できるようなシステム(例 復習機能)を CST-VOICE または CANVAS に追加する。 (x. お金の使い方の開示を行い、学生が意見できる期間を作る。)</p> <p>y. オンラインでも交流の場は作れるので、意見を話せる場・授業以外で学生が交流できる場を定期的に設ける。</p> <p>z. VR・メタバース空間を用いた常設の学生・教職員の交流が可能な場所をつくる。</p>	<p>18. 大学全体で、問題が起きたときに話し合う手順を決めておく。</p> <p>19. 学部数が多いという日本大学のメリットを活かし、他学部との交流ができるイベントを増やす。</p> <p>20. 単なる交流にとどまらず、ディスカッションやその学科ならではの視点から意見を言える機会を作る。</p> <p>21. 各分野の教授の専門分野に関する専門的なことを教われる場を作る。</p> <p>22. 成績が出たらメールでお知らせを通知する。</p> <p>23. 答案返却の義務化。</p> <p>24. 分かりやすいシステムの構築と徹底周知を行う。</p> <p>25. 授業の質を均一化するためにオンライン講義用のフォーマットを作る。</p> <p>26. 不満を挙げられる場、その意見を確認できる場を作る。</p>

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
	<p>★f. 他学部・他学科との関わりが少ない。 自主創造やCHAmmiTといった機会はあるが、4年間を通じた長期的な交流はなく、校舎が遠い学生との交流も少ない（サークルも同学部の学生が多い）。</p> <p>g. 学生数が多いため、学生同士の一人ひとりとの関わりが少ない。</p> <p>h. 学生数が多く、立った状態で受けなければいけない授業がある。</p> <p>★i. 成績開示がすごく遅い。</p> <p>j. 試験の答案が返却されない。 →自分の理解できていない点に分からず復習ができないので力を十分伸ばせない。</p> <p>k. 評価基準が適当。</p> <p>★l. 教授のメールに対するレスポンスが遅い（教授当てに来るメールの数が多いので学生からの連絡に気づくのが困難）。</p> <p>m. 学生によって態度を変える教授がいる。</p> <p>n. 教授によってオンライン授業の質に大きな差がある（授業を勝手に進められるなど）。</p> <p>o. 学務課が仕事をしない（成績の誤りの修正をしないなど）。</p> <p>★p. 学生によって意欲・態度・主体性に差がある。</p> <p>q. 編入を目的とした学びをする学生が多い。</p> <p>r. 出席カードをタッチしてそのまま帰る「ピ逃げ」や代理出席などが常習化している科目がある。</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. グループワークを増やす。 2. イベントの実施。 3. 受講者の抽選を実施する。 →抽選に外れた人はオンラインで受けられるようにする。 4. 受講希望者が多い場合はオンライン授業に切り替える、2部屋に分けて授業を行う。 5. 成績開示する期間などの基準を設ける（遅くなる場合は理由を教える）。 6. 個人の提出したテスト・レポートなどの答案用紙を開示する期間を作り、必要のある学生は担当教員の研究室に行くで見られるようにする。 7. 学生に基準を明確かつ詳細に伝える 8. シラバスにより細かな成績評価基準を記載する 9. 学生からの連絡とその他の連絡を分けるために、学生からの連絡はCST-VOICEなどで行う。 →CANVASに連絡機能があるが知られておらず機能していないので、教授・学生が使えるように指導する。 10. 質問しづらいと思ってしまいう学生のために、質問のフォーマットを作り、簡単に書き込めるようにする。 11. 学生のマナーを向上させるために指導を行う。 ・質問などでのトラブル防止のために質問フォームを作る（何が、どのように、などといった項目に分け、単純な文章を入力すれば良いようにする）。 12. 授業の質を学務課でチェックする。 13. オンライン授業の録画の徹底。 →後から見返せるので復習しやすい。 	<p>27. 単位を落とす、勉強が不得意である、といった学生に対する救済を行えるシステムの構築。</p>

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
	<p>★s. 校舎の移動が大変。 (研究室が船橋校舎にあるが授業は駿河台校舎で行われる, 教室移動が多い)</p>	<p>14. 不満を挙げられる場, その意見を確認できる場を作る。</p> <p>15. 各学生の能力に応じた授業を行う。</p> <p>16. 授業への出席の確認に対する取り締まりの強化を行う。</p> <p>17. 研究室を設置する校舎と授業を行う校舎を同じ校舎にする。 ・学生の教室移動を極力減らすように授業を行う教室を割り当てる。</p>	
27-対. 生産工学部	<p>a. 教授と生徒の意思疎通ができていない。(機会がない)</p> <p>b. 他学部との交流の場所がない。</p> <p>c. 大学への要望を出すところがない。</p> <p>d. フィードバックがない。 ⇒多くの学生がいるため教員の時間が足りていない。</p> <p>e. グループ学習向けの環境がない。(椅子が固定されている)</p> <p>f. 大学のWi-Fiが繋がりにくい。(授業に影響)</p>	<p>g. 教授と理想の授業を共有できるチャットルーム。(google)</p> <p>h. 目安箱の設置。</p> <p>i. 学生のしたいモノづくりを生産工学部内で集めて, 連携して生産工学特別演習で扱う。(金銭的補助)</p> <p>j. アクティブラーニングやグループワークができる部屋(自在に動く机・椅子)の設置。(大人数の授業でも利用可能な教室の確保)</p> <p>k. 回線速度の実測値を証拠として提示して改善を促す。</p>	<p>l. 全学共通のチャットルーム。(教授と学生)</p> <p>m. 学部学科問わず, 多くの学生と交流, 共同活動できる掲示板の作成。</p> <p>n. 掲示板で他学部間の専門性を生かしたプロジェクトを行う。(日本大学16学部87学科無限の連携)</p>
28-対. 生産工学部	<p>a. 他学科との交流が少ない。</p> <p>b. 教授同士の情報共有や学生に教える技術が不足している。</p> <p>c. 二学期生の名残があるのか, 授業選択の幅が狭まっている。</p>	<p>d. 他学科と共通の科目で必修のものを設けたり, 他学科と同じ教室で授業を受けるものを設ける。</p> <p>e. 学科間のワールドカフェを設ける。</p> <p>f. 学生に対する教え方の講習を行うとともに, 学生主体の講義を設ける。</p>	<p>a, d. 他学科との交流を図るため, 講義等において複数の学科で共通の必修科目を設置する。</p> <p>b, f. 講習や講義形態の意見交換の場として, 学部事務における会議に学生が参加する。</p>
29-対. 工学部	<p>a. 施設が古く, 利用しにくい場所がある。</p> <p>b. 人数に対してのWi-Fi設備が整っていない。</p> <p>c. CHAmiTのような機会が少なく, 視野を広げにくい。</p>	<p>h. 生徒の意見を取り入れた施設を作り, 学生の意欲向上を図る。</p> <p>i. Wi-Fiを強化してほしい。</p> <p>j. 各学年ごとに学生中心の意見交換会を実施する。</p> <p>k. 掲示場所を見やすく分かりやすく管理して使用する。</p>	<p>p. 学部間履修を気軽にできるように全学的にポータルサイトのシステムを統一してほしい。</p> <p>q. 大学と高校の連携強化。</p> <p>r. 日大内の他学部見学ツアー。</p>

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
	<p>d. イベントの掲示が少なく交流がしにくい。</p> <p>e. 同一の授業でもクラスごとに難易度が異なる。</p> <p>f. 成績処理に時間がかかる。</p> <p>g. 一人の先生に対する生徒の人数が多い。</p>	<p>l. 試験の有無などの統一を明確化する。</p> <p>m. 成績が分かり次第、なるべく早く開示する。</p> <p>n. 早めの成績開示スケジュールを組む。</p> <p>o. 先生の人数を増やす。または生徒を減らす。</p>	
30-対. 歯学部	<p>a. 大学での学びが試験のための勉強になってしまっている。</p> <p>b. 対面授業とオンライン授業が混在している日がある。</p> <p>c. テストのフィードバックが弱い。</p> <p>d. 成績開示が遅すぎる。</p> <p>e. 充電できる場所が少なすぎる。</p> <p>f. 意見をいえる機会が少ない。</p>	<p>g. 講義に臨床系の内容も取り入れる。</p> <p>h. 対面授業とオンライン授業の日程を分ける。</p> <p>i. 答案返却・全ての授業での答案解説・平均点や順位の開示を行う。</p> <p>j. 教員側の成績提出期限を早める。</p> <p>k. 使えるコンセントを増やす。</p> <p>l. 随時意見を言える意見箱を作る。</p>	m. 特になし。
31-対. 生物資源科学部	<p>a. Wi-Fiが無いところがある。 ⇒電子資料が多いため、Wi-Fiがないと不便である。</p> <p>b. 学費が高い。 ⇒金額の根拠が欲しい。</p> <p>c. オンラインの授業時間が違う。 ⇒先生間での情報共有不足。</p> <p>d. オンライン・対面の両立をしてほしい。</p> <p>e. レポートの採点基準が曖昧。 ⇒先生のマインドが古い</p> <p>f. 外部の先生が必修の授業を持っている。 ⇒単位を落としてしまったときに先生に聞きづらい</p> <p>g. オンライン方式に慣れてほしい。 ⇒数年経ったので、慣れてほしい。学生側のことを理解してほしい。</p>	<p>i. 以前は前期に後期の分まで履修登録ができ、後期にももう一度履修登録ができた。今は出来ないの、出来るようにしてほしい。</p> <p>j. グループディスカッションなどを利用した授業が少ない。</p> <p>k. 以前はできていたのに、現在では同じ時間に二重履修ができないのでできるようにしてほしい。</p> <p>l. 学科ごとの自習室が欲しい。</p> <p>m. 研究室の人数を減らす。</p> <p>n. 対面の実習を増やしてほしい。</p> <p>o. コピーが有料な点。受講するにあたって、コピー等必要なものの有料は学生の負担が大きい。</p> <p>p. すべての場所にWi-Fiを設置してほしい。</p> <p>q. いろんな施設があるのに活かしきれてない。</p>	<p>x. 他学部との交流が少ない。</p> <p>y. 留学の機会、制度が少ない。</p> <p>z. 学生がオフィシャルで大学へ意見する機会を増やしてほしい。</p> <p>1. 学部間の長期的な交流が少ない。</p> <p>2. OB・OGとの関わりを増やしたい。</p> <p>3. コロナ禍でレジュメが増えたので、大学内で一定量のコピーを無料にしてほしい。</p> <p>4. パソコンを使い慣れていない教員が未だ多いので、教職員に対しての指導をして欲しい。</p>

学部	現状の問題点の分析	学部を「理想の学部」にするための提案	日本大学を「理想の大学」にするための提案
	<p>h. 授業のやり方を学ぶ機会がなく、教員任せになっている。 ⇒授業のやり方に悩んでいる先生にアドバイスできるようにしたい。または、やり方を明文化してほしい。</p>	<p>r. 気軽に入れる自習室が欲しい。 s. 授業に人数制限があるため、班で分けた場合に授業時間自体が減ること。 t. 先生や科目によって配信される授業時間や課題の量の差が大きいこと。 u. 他学科や他学年と交流する機会が少ないこと。 v. 授業に間に合わないので昼食を食べられる席数を増やして欲しい。値段も下げてほしい。 w. 各科目で、内容・講義方法・採点方法・採点基準について公表して透明性を高め、改善しやすくする。</p>	
32-対. 薬学部	<p>a. 電子化による充電環境の設備不足。 b. 小テストの閲覧制限や期間制限の改善。 c. 他学部との交流が少ない。 d. 各科目の学目的の明確化。 e. レジユメなどのコピー代で費用がかさむ。</p>	<p>f. Imsを使用した小テストや課題が多く、iPad やパソコンを使用する頻度が高くなっているため、5号館や8号館など講義でよく使用する場所に充電設備を作ってほしい。 g. フィードバックの徹底。 h. 教員側から学ぶ目的について話してほしい。 i. 危機管理学部のように、一年につき何枚までのように無料でコピーできるポイント（コピーポイント制度）を導入してほしい。</p>	<p>k. 薬学部はキャンパスが独立しており、他学部の学生との関わりがほとんどないので、医療関係学部での連携（オンラインでの他学部講義受講など）できるようにしてほしい。</p>
33-対. 通信教育部	<p>a. 学習方法が多様で時期も重なるため、ガイダンスを受けても理解ができない学生が存在し、そのままになってしまっている。 b. 教材や授業内の例、メディア授業の映像が古い。 c. スクーリングの授業数が少ない。メディア授業の質が低い。メディア授業がオンデマンド授業の受け皿になれていない。</p>	<p>d. 大学生のため何が理解できていないのかまでは自分で考える。日大通信はスクーリングがメインのためスクーリングを軸に履修すると良い。 e. 定期的に見直す年を作ったり、他の先生の授業を参考に。学部として授業の質をより良くする。 f. 学修時間や学習場所に制限があること、環境・ニーズを意識した上で、授業作りをしてもらう。遠隔授業やハイブリッド授業の開催。</p>	<p>g. CHAmmiTのようなイベントを通年開催する。</p>

3. 参加者アンケート分析

本節では、当日実施したアンケートをもとに、「令和4年度 学生FD CHAmmiT」について参加者の視点から考察する。

まず CHAmmiT の認知度に関する設問を分析していく。

表1-1 今回のイベント以前に「FD」について知っていましたか？

	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
一昨年度	89	48.0%	82	52.0%
昨年度	93	54.4%	78	45.6%
今年度	97	52.2%	89	47.8%

出所 筆者作成

表1-2 今回のイベント以前に「学生FD」について知っていましたか？

	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
一昨年度	73	42.7%	98	57.3%
昨年度	84	49.1%	87	50.9%
今年度	103	55.4%	83	44.6%

出所 筆者作成

表1-1と表1-2は「FD」と「学生FD」の認知度について昨年度、一昨年度のCHAmmiTアンケートの結果と比較したものである。

まず、表1-1からイベント参加者の「FD」についての認知度は昨年度と比べて今年度は2.2%減少していることがわかる。他方、表1-2より「学生FD」についての認知度は昨年度と比べて6.3%上昇している。また、今年度参加者のFDの認知度と学生FDの認知度は例年と逆転している。

以上の結果から、学生FDの知名度がFDよりも上がったといえる。文理学部や理工学部などでは、学部ごとの学生FDが設置されているため、認知されるきっかけが増えている可能性がある。「『CHAmmiT』をどこで知りましたか？」という設問では、76.3%が「教職員からの紹介」、8.6%が「友人・先輩・後輩からの紹介」と回答しており、大部分の参加者が人からの紹介がきっかけでCHAmmiTを知っていることがわかった。

次に今年度の満足度や参加者の意識の観点から考察する。

表2-1 「令和4年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」は全般的に楽しめましたか？

	非常に楽しい		楽しい		普通		あまり楽しくない		つまらない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
一昨年度	55	32.2%	76	44.4%	30	17.5%	6	3.5%	4	2.3%
昨年度	61	35.7%	87	50.9%	19	11.1%	2	1.2%	2	1.2%
今年度	73	39.2%	89	47.8%	22	11.8%	2	1.1%	0	0%

出所 筆者作成

表2-2 「令和4年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」を通じて、「学生FD」について理解を深めることはできましたか？

	理解できた		概ね理解できた		少し理解できた		理解できない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
一昨年度	101	59.1%	58	33.9%	12	7%	0	0%
昨年度	101	59.1%	63	36.8%	7	4.1%	0	0%
今年度	113	60.8%	64	34.4%	9	4.8%	0	0%

出所 筆者作成

表2-3 「学生FD」を他の学生・教職員にも紹介したいと思いますか？また、その理由は何ですか？

	はい		いいえ	
	人数	割合	人数	割合
一昨年度	148	86.5%	23	13.5%
昨年度	161	94.2%	10	5.8%
今年度	175	94.1%	11	5.9%

出所 筆者作成

表2-4 「令和4年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」を通じて、学生に戻り、「学生FD」について何か行動を起こしたいと思いませんか？

	必ず何かしたい		機会があればしたい		学生FD組織があれば関わりたい		思わない		わからない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
一昨年度	21	12.3%	85	49.7%	16	9.4%	21	12.3%	28	16.4%
昨年度	33	19.3%	94	55.0%	15	8.8%	12	7.0%	17	9.9%
今年度	34	18.3%	108	58.1%	15	8.1%	9	4.8%	20	10.8%

出所 筆者作成

表2-5 「学生FD」は、日本大学の教育（授業）改善につながると感じますか？

	大いにつながる		つながる		少しはつながる		つながらない	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
一昨年度	63	36.8%	68	39.8%	36	21.1%	4	2.3%
昨年度	84	49.1%	60	35.1%	25	14.6%	2	1.2%
今年度	92	49.5%	75	40.3%	17	9.1%	2	1.1%

出所 筆者作成

表2-1から、「非常に楽しい」という回答は昨年度から3.5%増加した。「つまらない」と回答した参加者はいなかった。さらに、「非常に楽しい」又は「楽しい」という回答が87.0%あり、総じて満足度が高くなっていることが分かる。

表2-2では、「理解できた」、「概ね理解できた」という回答が、95.2%を占めている。よって、CHAmmiTは参加者が学生FDについての理解を深めるためには良い効果があったといえる。

表2-3から、「学生FD」を他の学生・教職員にも紹介したいと感じた参加者が94.1%いることが分かった。CHAmmiT参加者の満足度が高いことが推測できる。

表2-4を考察する。この表では、学生FD活動について「必ず行動を起こしたい」、「機会があれば起こしたい」と回答した参加者は、昨年度よりも2.3%増加し、76.4%を占めていた。「思わない」という回答は、昨年度よりも2.2%減少し、今年度CHAmmiTが学生FDの契機となり、参加者の意欲を高めることが出来たといえるだろう。

最後に表2-5を考察する。「学生FD」が、日本大学の教育改善に「大いにつながる」、「つながる」と回答した参加者は89.8%であった。このことから、ほとんどの参加者が学生FDの教育改善への有効性を実感していることが推測できる。

以上の結果から、今年度CHAmmiTが多く参加者にとって有益な経験になったことが推測できる。また、CHAmmiTが参加者の学生FDへの理解を促進し、意欲を駆り立てることに繋がったと考えられる。

表3-1 次年度もこのようなイベントが開催されるとしたら、参加したいですか？

	何があっても参加したい		声がかかれば参加したい		あまり参加したくない		参加したくない		企画側として参加したい	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
一昨年度	20	11.7%	124	72.5%	16	9.4%	4	2.3%	7	4.1%
昨年度	18	10.5%	128	74.9%	12	7.0%	7	4.1%	6	3.5%
今年度	33	17.7%	139	74.7%	9	4.8%	3	1.6%	2	1.1%

出所 筆者作成

表3-2 今年度はハイブリッド開催でしたが、今後も完全対面に戻すのではなく、オンラインも併用した形式での学生交流等のイベントはあったほうが良いですか？

オンラインも併用してほしい		対面のみで良い		オンラインのみで良い		コロナの状況		オンラインと対面を別会場という形で同時開催する	
人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
130	69.9%	50	26.9%	4	2.2%	1	0.5%	1	0.5%

出所 筆者作成

表3-1から、「何があっても参加したい」と回答した参加者は17.7%おり、例年より約6%高かった。「あまり参加したくない」、「参加したくない」という意見は昨年度より4.7%低い6.4%となっており、総じてイベントに前向きな意見が増えたと言える。

次に、表3-2では「オンラインも併用してほしい」と回答した人が最も多く、全体の69.9%を占めていた。「対面のみで良い」という回答が26.9%だった。一方、「オンラインのみで良い」という回答は全体の26.9%であった。参加者の対面開催へのニーズの高さが読み取れる。

以上より、参加者は継続して次年度以降もCHAmmiTに参加する意欲が高いことがわかった。また、開催方法については対面参加のニーズの高さが窺える一方、オンラインを併用することでより参加者のニーズに見合うのではないかと考えられる。

4. 学生コアスタッフからの所感等

「教育改善に向けて」 土屋怜王

(日本大学経済学部経済学科3年・令和4年度 学生FD CHAmmiT コアスタッフ キャプテン)

はじめに、「令和4年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」を開催するにあたり、ご協力いただいた日本大学FD推進センターをはじめとした教職員並びに学生スタッフの皆様には厚く御礼申し上げます。

昨年度に引き続きコアスタッフとして携わらせていただいた。去年の経験を活かし、下の学年のスタッフのサポートをしたいと考えて参加した。また、個人的な目標をもって活動していた。それは、スタッフの継続率維持である。日本大学のFDは、日本大学での教育を、教員、職員、学生が協働してより良くしていくための活動を行っている。そして、CHAmmiTは、異なる学部の学生、教員、職員が集まって日ごろの大学での教育について話し合うイベントである。ここで上がった意見をもとに、各学部での教育改善につながる施策を検討することになる。しかし、CHAmmiTで話したことが、イベント後に参加者の記憶からなくなってしまうことがとてももったいないと感じていた。学生スタッフを継続することで、前年度よりもより良い案が思いついたり、大学教育について理解が深まったりと様々なメリットがある。そのため、スタッフに継続してもらえよう活動にしたいと考えていた。また、今年度は昨年度スタッフ経験者が19名おり、全体の約4割を占めていた。これは、様々な要因が考えられるが、昨年度のスタッフの熱心な努力があったからだと考えている。この継続力を次年度にも引き継ぎたいという思いで今年度のCHAmmiTに取り組んだ。

今年度の学生スタッフ参加者は、昨年度より11名少ない48名だった。昨年度以前は、多くの学部でオンライン方式の授業が行われており、学部内での学生同士の交流や対面でのコミュニケーションが少なかった。そのため、対面であるオフラインの関係を求めて参加した学生も多かっただろう。しかし、今年度は対面授

業への移行が進んでおり、学生間の交流がコロナ禍前に戻るため、次年度のスタッフの減少が見込まれる。したがって、スタッフを継続してもらうためにいくつかの取り組みを行った。

そのための課題を大きく3つに分けて考えた。1つ目は、学生スタッフの活動内容が煩雑であることだ。学生スタッフはイベント当日に時間内にファシリテーションをして、グループの意見をまとめなければならない。各セッションは、誘導問題のように一つひとつつながっている。まずは、セッション毎で話し合っほしい内容の意見を抽出する練習をする必要があった。そのため、コアスタッフでファシリテーションの説明書を用意し、本番を想定したファシリテーション練習会を企画した。そこで、スタッフに当日のデモンストラクションをしてもらった。

2つ目は、CHAmmiTの仲間との交流機会が少ないことだ。この課題に対して、特に私の所属する経済学部では、ファシリテーションの練習会を経済学部限定で開催した。学部内での親睦を深めつつ、当日のイメージをつかんでもらった。

3つ目は、コアスタッフそれぞれの予定がなかなか合わず、作業が滞ってしまうことだ。コアスタッフは、皆掛け持ちで様々な活動をしており、それぞれが学業、就職活動、アルバイト、他の団体での活動などを同時進行で行っている。そのため、スムーズに作業をすることができないことがあった。これに対しては、有効な手立てを講じることができず、来年度以降対策を講じる必要がある。

次に、CHAmmiT当日について振り返る。今年度は、「あなたにとって大学とは、何ですか?」というテーマを設定した。大学に通う目的を再確認し、大学に求めているものを洗い出してもらうことで、今の日本大学へのニーズを分析しつつ教育改善につながるアイデアを考えてもらうことを目的としている。セッション1は、学部混合で実施し、参加者それぞれの大学に通う目的について意見交換をした。セッション2では、授業を受ける中で感じる大学に満足していることと不満なことを洗い出した。セッション3では、セッション1・2を踏まえたうえで、大学の改善策をまとめた。以上の流れで、学部提案書の作成を行ったが、学部提案書を作るうえで反省点があった。セッション1で取り上げた「大学に通う目的」について、その学部が特定の専門性を持っていない場合、意見が出にくくなったと考えられる。そのような学部は、セッション2以降でアイデアが抽象的になっていた可能性がある。また、それが各グループ間の意見の量の差につながったと思う。来年度は、このように学部ごとの意見の量に差が出ないようにさらなる工夫が必要と考えられる。

最後に、今年度の活動を通して様々な点で成長を実感することがあった。CHAmmiTは、他学部が集まって一つの活動をする場であるため、スタッフ同士で考え方の違いに新鮮さを感じつつ、それを楽しみながらコアスタッフとして従事させていただいた。大学生は、活動領域が高校に比べて格段に広がる。そのため、大学での授業は優先順位が低くなりがちである。私たち学生は、大学に入った理由を忘れずに日々の授業に真摯に臨むことが大学の教育の一助になると考えている。

「コアスタッフとしてのCHAmmiTを経験して」 田中花奈

(日本大学生物資源科学部海洋生物資源科学科2年・令和4年度 学生FD CHAmmiT コアスタッフ キャプテン)

私は、昨年度のCHAmmiTには学生スタッフとして、今年度は初めてコアスタッフとして活動に参加した。昨年度は、入学して間も無かったが自分の思い描いていた大学教育とは異なると感じ、何か自分にできることはないかと考え、学生スタッフの役割にある当日のファシリテーターとして学部提案書の作成に大きく関与することにした。その経験から、今年度はCHAmmiTの企画・運営により深く関与していきたいと考え、コアスタッフとしての参加に至った。

今年は初めてのコアスタッフとしての活動となったが、キャプテンとして各部署の統括やミーティング日時の設定、学務課との連絡など全体を纏めるという活動に関わる経験をさせていただいた。しかし

CHAmmiT 経験者とはいえ、企画・運営順序や方法など右も左も分からない状態であったため、土屋キャプテンや他のコアスタッフには沢山助けられた。そのため実際はキャプテン補佐のような形になってしまったが、当日は、各教室を巡回して全体を統括し、スタッフはスムーズな運営と有意義な議論ができたので、今年度のCHAmmiTは成功であったと感じた。

反省点・改善点としては次の3点が挙げられる。

まず1点目は先程も述べたように、キャプテンとはいえ実際はキャプテン補佐のような形になってしまった点である。コアスタッフ内ではキャプテンが2人いたため、どちらかが連絡をするのか、どちらに連絡・相談をすれば良いのかが曖昧になってしまい、連携が取れにくかった。来年度以降はキャプテンと副キャプテンに分けることにより役割を明確化し、統制をとることでより円滑化するのではないかと考える。また、今回は5つの部署に分かれて活動を進めていたが、部署間の動き方や報告の方法など、伝達が難しい場面が何度も見られた。今年度は人数の面でコアスタッフがいくつもの部署を掛け持ちする事があったが、来年度以降は1つの部署に専念し、足りない部署には学生スタッフの協力を仰ぐ必要があると考える。これによってある程度限られたタスクに力を注ぐことができ、よりクオリティの高い案や成果物が各部署から上がって来るのではないかと考える。

2点目は、コアスタッフと学生スタッフとの間の距離感についてである。昨年度も学生スタッフからの意見としてよく挙がっていた、「コアスタッフと学生スタッフの間に溝があるように感じる」という意見が今年度もまだ解決しきれていないように感じた。チームビルディングの親睦会や企画、セクレタリーの議事録投稿は、スタッフ間の仲や意識を深めることに繋がっていたとも感じるが、コアスタッフ内でのミーティングや当日案が全て完成してから学生スタッフへの報告になるため、やはり学生スタッフはコアスタッフがどのような動きをしているのか不明瞭で溝を感じるのだと考える。来年度以降は学生スタッフからの意見も取り入れる機会を設けたり、コアスタッフのミーティングがどのように行われているかを見学する会などを設定し、親睦以外の点でも溝が埋められたら良いと考える。

3点目は、より教育改善にフォーカスしたCHAmmiTにしていくことについてである。毎回のミーティング後に挙がる反省点として、意見が学食や通信設備などの教育とは直結しないものが多くなってしまいう事がある。もっと早い段階から、ファシリテーターを務める学生スタッフには教育に繋がる意見を引き出すようアドバイスを行ったり、当日の参加者にはCHAmmiTが教育改善について話し合う場であるということによりインパクトのあるポスターや動画などの形にして伝えていったりする事で、当日はより有意義な意見が挙がってくるのではないかと考える。

最後に、学生スタッフや参加者の方々、関係者の皆様に深く御礼申し上げる。また、このような貴重な機会にコアスタッフとして参加させて頂いたことにも感謝する。今年度のCHAmmiTで全てが終了したものとせず、来年度以降のCHAmmiTへ繋げていきたい。

「今年度活動を振り返って」 中澤駿之介

(日本大学危機管理学部危機管理学科4年・令和4年度 学生FD CHAmmiT コアスタッフ マネジメント兼 チームビルディング)

初めに、今年度CHAmmiTにスタッフとして関わってくれた学生の皆さん、参加して下さった学生・教職員の皆様、そして何度も連絡を繰り返し連携をできる限り密にしてくださった日本大学FD推進センターの皆様へ改めて御礼申し上げます。2013年から続くCHAmmiTの歴史の中で、初めて対面・オンラインのハイブリッド開催を乗り切れたのは、私一人の力ではなく、関わって頂いた皆様のおかげだと感じている。今年度のスタッフとして、活動に従事できたことを本当に誇りに思う。

新型コロナウイルスの影響により失われた学生生活を少しでも良い方向にしたいと考えて、私は今まで3

年間 CHAmmiT の活動に従事してきた。前年度までは一般スタッフとして参加者の意見を良い方向にブラッシュアップすることを経験した。付属中から10年間お世話になった日本大学に、ささやかながら恩返しをしたいと考えた。そこで今年度はコアスタッフとして、自ら CHAmmiT の企画を行った。

今年は初めてコアスタッフとして活動に参加し、CHAmmiT の内容を決定するマネジメントと、スタッフ同士のコミュニケーションの円滑化を図るチームビルディングという2チームの総括を行った。本来はスタッフ同士の親睦を深め、一般スタッフの皆様にお手伝いいただく CHAmmiT 当日の担当しゃべり場進行（以下ファシリテーター）のブラッシュアップを行うチームビルディングの総括のみの担当であった。CHAmmiT 当日の企画を行うに当たり、企画原案を出してみたところ採用されたためマネジメントの総括も行う運びとなったのである。

結論から先に述べてしまうと「反省点も多くあるが、私にできることはすべてやり切った」結果であったと考えている。マネジメントではファシリテーションマニュアルを作成し、CHAmmiT 当日の内容決定が主なタスクであった。一方、チームビルディングはスタッフの親睦を深めることが主であった。ギリギリまで修正を続けたマニュアルや、親睦会や忘年会を企画してくれる等、一般スタッフのおかげで、CHAmmiT 当日の満足度は8割近くが満足していると回答を頂いた。繰り返すようで申し訳ないが、これは私一人の力では成し遂げられなかった結果であると考えており、6月から今までの期間協力してくださった学生・教職員の皆様と一緒にいたからこそ成し遂げた結果だと思う。10年間の恩返し也十分に行えたと感じている。

最後に、CHAmmiT のすべてに関わっていただいたすべての皆様に心から御礼申し上げる。私の活動が、日本大学をより良い方向に一歩前進させることができたなら幸いである。

この組織・活動がこれからの日本大学の発展に繋がるよう期待を込め、締めくくりとする。

10年間、お世話になりました。

「CHAmmiT に参加して」 宮川美月

（日本大学スポーツ科学部競技スポーツ学科4年・学生FD CHAmmiT コアスタッフ マネジメント）

今年度、4年生ではじめてコアスタッフとして CHAmmiT の活動に参加した。参加した理由はとても単純であり、大学生最後の年に何かにチャレンジしたいと感じたからである。その中で学生 CHAmmiT のコアスタッフは、日本大学の学生である今しかできないことであり、さらに今まで関わることの少なかった他学部・他学科の学生と協力し、CHAmmiT 当日に向けて企画・運営をするという貴重な経験をすることができると考え、応募した次第である。

私は CHAmmiT においてミーティングや当日のテーマなどを決定し、ファシリテーションマニュアルの作成など、FD 全体を取り仕切るマネジメント、そして当日は対面参加者・オンライン参加者200人以上が参加する ZOOM のホストとしてオープニングやエンディングのサポート、各セッションのブレイクアウトルームの振り分けなどを行った。活動に対して難しさを感じる部分もあったが、とても満足した結果と良い経験になった。特に他学部・他学科の学生とミーティングなどを通して関係を築くうえで、今までの境遇や大切にしている価値観などの話を聴けたことで、私自身の今後を考えるきっかけとなった。

このように活動には大いに満足しているが、一つ課題が挙げられる。それはコアスタッフと学生スタッフの連携についてだ。事後ミーティングで運営に対する率直な感想を学生スタッフに出してもらったところ、「コアスタッフの情報が入ってこなくて、何をしたらいいのか分からない」や「重要な決定もコアスタッフのみで行ってしまうため、疎外感を感じる」という意見があった。学生スタッフも CHAmmiT を行う上で重要な役割を担っているため、来年度からは両者が活発に意見交換ができるような関係性になれば、よりスムーズな連携がとれるだろう。

最後に CHAmmiT に関わってくれた多くの学生、教職員の方々に御礼を申し上げます。今年度、大学生最

後の年にお世話になった日本大学に貢献することができ、とても光栄である。このような良い経験で得られたことを社会人になった時に活かせるよう、精進していきたい。これからも CHAmmiT の活動がより推進され、より良い日本大学になることを願っている。

「今年度の CHAmmiT に参加して」 大保航貴

(日本大学理工学部交通システム工学科 3 年・令和 4 年度 学生 FD CHAmmiT コアスタッフ マネジメント兼アート)

まず最初に、CHAmmiT に関わる全ての方に、厚く御礼を申し上げる。私の大学生活は未曾有の新型コロナウイルスから始まった。初めてのオンライン授業で友達もできず、不安の中での大学生活のスタートだった。何もかもに制限がつく生活が 2 年続き、やっと今年度から本格的に対面での大学生活がスタートした。2 年ぶりに毎日学校へ行き友達と一緒に切磋琢磨して授業や活動ができたことや、多くの新たな出会いと感激があったのは今でも忘れられない。しかし、社会の環境はこの 2 年で大きく変わり、対面が再開したからといって全てが戻ることはなかった。そんな時に出会ったのがこの CHAmmiT だった。

「集まった学生と共に自分たちのためにも大学のためにもお互いにより良い教育環境を整備していきたい。」そう思い、今までの様々な経験を活かし、残り 2 年間の大学生活を皆と共により良くしていこうと、コアスタッフへの参加を決心した。

今回、組織としてはマネジメントとアートを、当日はグループのファシリテーションを担当した。以前からファシリテーションをする機会は多く、8 割の準備が大切だと学んできた。CHAmmiT 当日を迎えるにあたり、数多くの会議と実践的なシミュレーションを重ねた。スタッフとして参加してくださる方々へのマニュアルを作成するなど、CHAmmiT ならではのものも多かった。ファシリテーションをするにあたって、自分自身でも多くの準備を重ねた。特に今回はオンライン参加のグループを担当することになり、対面参加者と差をつけずに進めていけるかが大きな課題だったと思う。自分自身でも今回のテーマについて深く何度も考え、事前に何度かスタッフ内でも本番想定で議論を重ねた。その中で、多種多様な意見が飛び交いまとめることに時間がかかることも想定された。いかにして、時間内で皆の意見をまとめ上げ、最終的な報告書にまとめ上げるか。今まであまり経験もないほどの意見が出ることに驚くとともに、この意見をまとめ伝えなければという使命も感じた。

CHAmmiT 当日を迎え、対面でもオンラインでも多くの方に参加していただき、議論ができた。結果的には、良い時間を作ることができたのではないと思うが、要所要所で準備不足な点も多く現れた。特に、オンラインにおける時間への制限が難しかった。対面であれば、休憩時間等の少しの時間でも話し続けることもでき、休憩時間等でも色々と意見交換は可能である。しかし、オンラインであると残り時間が 0 秒になれば終わってしまい、雑談等も比較的難しい。この対面とオンラインの差を埋めることは今後への反省点になると思う。話せる時間が制限される中で、参加者の意見を細やかにまとめることはできなかった。最終的には時間の制限によって聞けなかったこともあった。オンラインに関しての今後の反省点として、より時間にゆとりを持ち、可能であればできることは参加者にも事前に意見整理等をしてもらい、当日は議論のみにするなどの準備をお願いすることも必要になると思う。

最後に、CHAmmiT が終わり学部提案書ができ、改めて教育改善に終わりではなく、継続的に議論していくことの重要さを感じた。所属している理工学部は学生数も多く、それだけ多くの意見が出た。容易に改善できることと改善が難しいことはそれぞれあると思う。しかし、皆が協力して継続的に意見交換をしあい、時には妥協をしながらでも答えを作っていくことに、毎年学部提案書を作っていることに意味があると思う。来年度以降も、CHAmmiT をはじめとした FD 活動が続くことを、そして日本大学全体の教育活動がより良くなることを願い、締めさせていただきます。

「FD CHAmmiT で学んだことと今後の展望」 境野哲美

(日本大学理工学部まちづくり工学科 4年・令和4年度 学生FD CHAmmiT 学生コアスタッフ チームビルディング)

私がFD CHAmmiTに参加しようと思った理由は、この3年間所属学科で学び、本来の大学の在り方と実際の大学の在り方や、教職員と学生の意識の差を感じたからだ。以前参加者側として参加したが、もっと長い期間、様々な学部の学生と関わりたいと思い学生コアスタッフとして参加した。

今回のFD CHAmmiTに参加したことで、他学部・他学科の学生から大学の学びに対する意見を聞くことができた。私や私の友人が感じている問題と同じ問題が様々な学部・学科でも起きていることが分かり、私の身の回りでは無かった問題点に気づくこともできた。

その中でも特に3つの点が今後の大学に重要だと思った。その3つとは、「教職員の質の差が大きいこと」、「学生間の交流が少ないこと」、「大学の有事の対応が遅いこと」だ。

教職員の質は今後の日本の質に関わる。教員が適切な教え方で分かりやすく楽しさも伝えながら、自ら学び、かつ考え、意見を共有しながら学生に学ぶ習慣を付けさせることができると、卒業後も様々な場面で活かすことが出来る。適切な知識と学び続ける姿勢、お互いの意見を聞きながら考える習慣を持つ人が増え、社会全体のレベルが上がる。そのために教える立場に立つ人の質を上げることが今後の大きな課題の一つになる。また、学びに関しては、大学が今の大学の在り方で良いのかという問題にも関係する。研究者が研究を行うための機関である大学だが、職に就くために大学に進学する人が多いのが現実で、教授と学生の間で意識のずれが生じる。学生に研究してほしいと考える教授と仕事に就くことを目的に学ぶ学生とでは、目指す姿が異なる。お互いにとって中途半端な教育の場ができてしまうことを実感した。専門学校や大学といった教育機関の在り方を見つめ直し、働きかけることが日本大学にも必要だと思う。

2つ目の学生間の交流の場の増加は、多くのことを学び視野を広げることや社会に出てからも色々な場所に繋がりを持ち人生の質を高めることに繋がる。コロナにより人との繋がり的重要性が再確認され、繋がり機会を増やしたいと思う人が増えた今、交流の場の設定については、考え直すことが重要になるのではないか。まずは思いつく方法や今回参加者が提案してくれた方法を試してみたい。試行錯誤しながら、最終的には学生が自ら動き、誰もがそこにアクセスできる状態にするのが望ましい。また、私が学んでいるまちづくりの計画・設計でも人の繋がりを考える必要があると思う。FD CHAmmiTで大学の現状を知ることによって特に学生の生活に着目した計画・設計について考えることができた。また、交流は、同じ学校の学生間だけでなく、他の環境にいる人や様々な世代の人との交流も重要になる。学外との繋がりも持たせられる場の創出をいかに実現していくかも考えていきたい。

大学の有事の対応が遅いことはコロナによって明らかになったように思う。対応の遅さは学生の時間を奪ってしまうことになる。問題が明らかになったのはとても良いことなので今後は見直して行ってほしい。学生の意見をよく聞き学生の立場にも立ちながら、外部の専門家も交えて、必要に応じて社会に働きかけ、様々な大学と協力して進めることが重要だと思う。

準備・運営に携わることで気づいたこと・学んだことも多かった。今までイベントの運営側として携わったことがなかったが、今回の経験により、1日間のイベントの準備・運営を行うことの大変さを肌で感じる事ができた。また、準備を行って行く中で、一人一人の行動やチーム全体での動き方が重要になることを感じた。

特に4つの重要性を体感できた。「携わってくれている全員がその時の進捗状況を把握すること」、「多くの人にやる気を持ってもらうこと」、「活動する中で常に意見を言える場と雰囲気を作ること」、「スケジュールは早めに設定し仕事も早く終わらせておくこと」だ。そのためには、個人に合った内容で適切な量の仕事を全員に割り振ること、一人もしくは一部のメンバーで全て解決しようとせず、意見を聞いたり困っている

ことを伝えたりすること、やること全てを最初に考えてスケジュールを組み、全員に伝えることが必要だと分かった。言葉にすれば当たり前前に感じるものも、実際に大人数で行動してみると難しい。一人一人の性格・特徴を理解し、一つ一つ解決することも大切だ。これらは組織が大きくなればなるほど難しくなるが、今後は常に運営方法について考えて行動し今後に活かしたい。

運営を成功させるにはチームメイトの仲も重要になる。私は、スタッフの仲を深めるポジションであるチームビルディングのスタッフとして活動した。しかし実際に仲を深めるイベントを企画しても人が集まらず、全体をまとめたり魅力的で参加可能な企画を考えたりすることの難しさを学んだ。今後は、企画力・プレゼン力、ニーズを把握する力などを高めていきたい。

「セクレタリーとアートから見た今年度の CHAmmit」 本橋侑也

(日本大学工学部精密機械工学科3年・令和4年度 学生FD CHAmmit コアスタッフ セクレタリー兼アート)

約半年以上に渡り準備し続けてきた「令和4年度 日本大学 学生FD CHAmmit」が令和4年10月16日に開催された。私は昨年度、一般の参加者として参加したが、今年度は初めてコアスタッフとしてセクレタリーとアートを担当させて頂いた。初めてスタッフとして企画運営に携わらせて頂くにあたり、右も左も分からなかった私に対し、様々なご指摘を下された関係者の皆様、当日CHAmmitに参加して下さった参加者の皆様に対し、深く御礼を申し上げる。

私は今回のCHAmmitでセクレタリーとアートの役職を兼務させて頂く事になった。そこで私からは、2つの役割で関わったCHAmmitについて述べていきたい。

まずセクレタリーについて述べていく。セクレタリーでは、主に議事録と報告書の作成を行った。最初に誰がどのミーティングを担当するかを皆である程度決めておいたおかげで、当日慌てて誰が担当するかを考えずに済んだのは良かったと思う。素早く資料作成が行え、完成後すぐにスタッフ全体に共有できた。その為、欠席者やオンライン参加者等も共通した認識が持てたと思う。

一方で、反省点は2つある。まず1つ目は、外部にも公開する報告書が昨年とほぼ同じ様な構成になってしまった事である。テーマから細かな内容に至るまで、何もかもが昨年とは異なるCHAmmitであるにも拘らず、文章構成はおろか、イメージとして使用している画像でさえ、昨年度の物と全く同じになってしまった部分がある事は、反省・改善すべき事項ではないかと考える。外部から見られた時の事をより意識し、他の部署ともできる限り連携しながら作成すれば、報告書の注目度も上がるのではないだろうかと考える。

続いて2つ目の反省点は、本番が近づくに連れて、私のもう1つの担当であるアートの仕事が忙しくなり、中々セクレタリーの仕事に注力する事ができなかった事である。複数の担当を兼務するにあたり、予期せぬ問題が生じた際に於ける仕事への影響を考慮せずにスケジュールを組んでしまった為、最後の方は、かなり他のメンバーに任せ切りになってしまった。もう少しバランスを考えて仕事に取り組むべきだったと思う。

次にアートについて述べていく。アートでは、主にポスターとスタッフ用Tシャツのデザインを手掛けた。いずれもスタッフ内から出た意見を基に、イラスト制作を得意としているスタッフ以外の日大生にボランティアを依頼した事から、完成度の高いデザインとなった。ただデザインを作るだけではなく、「文字を円状に並べる事で協力や団結を表現」「白衣を着たアカデミックな学生・スーツを着たビジネスの学生・考える学生の3人を並べる事で今年のテーマを表現」という具合に、それぞれのデザインに意味を持たせ、参加者募集用と当日掲示用の2種類のポスターを制作した事で、今年度のCHAmmitがイメージし易くなったと思う。更に、制作したポスターはインフルエンサーと連携してSNSでの拡散に活用させた事で、全学的な参加者の増加に繋がったと考える。

当然、反省点も存在する。その反省点は多数存在するが、ここでは特に重要度の高い2つの問題について

取り上げたい。まず1つ目の問題は、学務課や印刷業者との連携が上手く取れず、A2サイズのポスターを各学部に配布できなかった事である。今回はパワーポイントを使って作成したポスターのデザインを、互換性の問題に配慮してPDFファイルに変換して学務課に提出し、印刷業者に発注を掛ける形を取った。しかし、印刷業者から学務課を通して印刷できないとの回答があった。結局、「各学部が持つ印刷環境の違いから、各学部に印刷を任せたくない。」との話があったにも拘らず、学務課からデータを送信し、各学部で印刷して頂く事になってしまった。その結果、学部毎に印刷枚数やサイズが異なってしまい、中には掲示が全く無い学部まで出てきてしまった。掲示の無い学部に対しては、改めて学務課より連絡して頂き、且つ学生スタッフから各学部の教務課に掲示のお願いをする対応を取ったが、結果的に学務課及び学生スタッフの負担を増やしてしまう事になってしまった。この問題に対する改善策としては、まず印刷業者に印刷を断られない様にする為、予め印刷できる条件（ファイル形式等）を印刷業者に直接確認を取った上で、デザインの制作に取り掛かる様にすれば良かったと考える。また、毎年印刷を頼んでいる業者は同じだと聞いたので、迅速に対応できる様にする為、マニュアルを作成したり、アートのメンバーに最低でも1人は経験者を入れる様にしたりして対策を施す事で、再発防止に努めるべきだと考える。

続いて2つ目の問題は、アートのメンバーが一体となって活動できなかった事である。今年のアートは1人も経験者が居なかった為、誰も昨年度の活動の流れを知らない状態で活動が始まってしまった。そこで、元スタッフでアートを担当していた人を交えたミーティングを企画し、活動の流れや注意事項等を共有した。その結果、活動を本格的に始めるまでに時間が掛かってしまい、忙しさもあってかメンバーの気持ちが次第に離れてしまった。時間が無かった為、中々活動に参加しないメンバーを殆ど無視する様な形で作業を先に進めてしまい、更について行けない状態を作ってしまった。この問題に対する改善策も先程と同様に、マニュアルを作成したり、アートのメンバーに最低でも1人は経験者を入れたりする事で改善できると考える。また、こまめにコミュニケーションを取る事、具体的にはアート内だけでも定期的なミーティングを、5分間だけでも良いので設ける事が重要なのではないだろうかと考える。こうする事で、お互いの状況を理解した上で活動できる様になるので、余裕のある人が余裕の無い人に対して手を差し伸べる事ができ、もう少し活動全体に余裕ができたと考えられる。

成功と課題が混在するCHAmmiTとなってしまったが、無事に終了できて良かったと感じる。最後に改めて、関係者の皆様へ、深く御礼を申し上げる。この様な全学的なイベントに、企画運営の立場からコアスタッフとして携われた事をととても誇りに思う。しかし、今年度のCHAmmiTは決してゴールではなく、更なる可能性と改善の余地があると考えられる。来年度以降の学生FD活動の更なる発展を期待しつつ、筆を置かせて頂く。

「コアスタッフでのCHAmmiT」 渡 祐太

(日本大学工学部情報工学科3年・令和4年度 学生FD CHAmmiT コアスタッフ・セクレタリー)

まず、今年の日本大学学生FD CHAmmiT（以下、CHAmmiTとする。）の開催につき、ご尽力頂いた教職員の方々、学生スタッフ、参加者を含めたその他の関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。まだまだ新型コロナウイルス感染症の流行する中で対面とオンラインのハイブリットで開催できたのは皆様のお力添えの賜物であると感じている。

今年度のCHAmmiTの感想だが、とても満足できるものであったと感じている。昨年度と活動において大きく異なるのは、対面を希望した参加者の方は通信教育部まで来て、しゃべり場に参加することであった。多くの人が初めてとなる対面でのCHAmmiTであったと思うが、大きなトラブルもなく進行できたことは入念なファシリテーションマニュアルの読み合わせの成果もあるだろう。加えて全5回の全体ミーティングも効果的に働いたと感じている。

次に私自身のCHAmmiTまでの活動について触れる。セクレタリーとして、本活動の書記に当たる活動を担当させていただいた。全体ミーティングの内容を議事録にまとめ、いち早く共有、そしてその後報告書にまとめてウェブサイトなどへの掲載を行った。CHAmmiT本番では対面グループのファシリテーター兼zoomの入出管理を担当した。生産工学部のファシリテーターとして、同じブースのスタッフとともに協力して円滑な運営ができたと感じている。参加者もとても魅力的な意見を多く出してくれ、とても意味のあるしゃべり場にする事ができた。

反省としては、学生スタッフとの連携が挙げられる。私は昨年も学生スタッフであるため感じていたが、コアスタッフがどのように動いているのか学生スタッフにはわかりにくいのではと思うことが多くあった。一部を除いて学生スタッフは第二の参加者のような形で、コアスタッフが学生スタッフをゲストであるかのような対応になっていたと感じた。スタッフ一丸で頑張っていたと思うが、しかしながらその間に多少の溝はあったように思う。セクレタリーでコアスタッフでの話し合いも議事録にし、その時のプロジェクトの進行具合を共有することができれば、学生スタッフとの共通理解をさらに図ることができていたと思う。新型コロナウイルス感染症の影響が収まれば、近くの学部のスタッフ同士で集まって議論、交流を行うことができ、連携することでよい効果が見込めると思う。これらは来年のCHAmmiTの課題となりえるだろう。

私は2年生までの2年間、新型コロナウイルス感染症の影響で大学生としての活動が少なく、他学部との交流や意見交換の場として、昨年度に学生スタッフとして、CHAmmiTに関わらせていただいた。あまり対面でのミーティングに参加することはできていなかったが、それでも多くのスタッフと話し、活動し、協力してCHAmmiTを完成させた。その際、この活動に関わる人はそれぞれ大学を良いものになりたいというエネルギーと責任感があると感じ、それは私にとってとても刺激的であった。今年は、そのやる気にあふれる刺激をもっと受けたいという思いと、さらに深く活動に関わりたいと考えて、コアスタッフへと志願した。私は工学部のため、対面でのコアスタッフでの集まりへの参加が厳しく、関わりが少なくなってしまった点はとても残念であるが、その分セクレタリーにて議事録作成に注力し、加えて対面ミーティングや本番やその後の振り返りの時には協力して運営できたと感じている。大きなプロジェクトを担う一員になるということと、締め切りや自身に任せられた仕事をこなすという責任感を理解することができたCHAmmiTであった。

来年以降も教職員の方々と学生との意見共有の場、そして教育改善の発信地となり続けるよう心から願っている。

「2回目のCHAmmiTをやってみて」 柴田大輝

(日本大学生物資源科学部生命化学科3年・令和4年度 学生FD CHAmmiT コアスタッフ マネジメント)

去年に引き続いて日本大学FD CHAmmiTに関わらせて頂いた。そのことに関する感想と反省の2点を記していく。先んじて経緯としては、去年やってみて経験や人とのつながりを得られるなど、大変有意義な時間を過ごすことが出来た。その事から、今年も引き続きコアスタッフに携わることに決めた。今年度は、コロナウイルスにより大学が変化していき、今年はコロナ禍というよりは、アフターコロナという状況下でのスタートとなった。2年目ということもあり、多少の慣れと、前回とは少し異なるメンバーとの緊張を持ちながら、対面とオンラインとのハイブリット形式での実施で多くの困難やトラブルを越えながら本番を迎えることが出来た。

感想としては、結果として良いものになったのではないと思う。過程がどうであれ、対面実施を経験したことが無いメンバーがほとんどの中、きちんと形にできたことは誇るべきだと考える。多少のトラブルがあったとしてもそれは、外れ値であり、事前に防ぐ事は難しいと思われる。しかし、反省点もいくつか挙げられる。まず、本番についてだが、今年度のコアスタッフは12名で一般スタッフは約30名弱で去年より少ないのに対して、参加者が対面、オンライン含めて、去年よりも多い参加者となった。今年度は去年度と異

なり、対面も含めた実施なので、余計に人手が足りないという事態となった。また、対面でのトラブル対応マニュアルなどがあるとより迅速に対応できたように感じる。来年度以降この経験を活かしてもらえることを期待している。

次に普段の活動だが、今年度もタスクを細分化し効率よく運営していくために、コアスタッフ内で役割分担し5つの部署に分かれて活動していく形となった。しかし、やはりそれぞれの部署間での考え、やり方、報連相などの意思疎通が難しい場面などが見られた。これを改善出来れば、ダブルブッキングを防ぎ、ほかのことに時間を回せ、効率的にタスクを消化できたのではないかと思案する。対策としては、各部署に必ずリーダーを配置させ、樹形図的に仕事を上から下に、完成物を下から上にといった運営をした方が効率的だと考える。また、コアスタッフのリーダーは二人ではなく、リーダーと副リーダーに完全に分けた方が周りとしてもやりやすいのではないかと考える。これに付随して、各部署のスタッフは他の部署と協力しつつも、自分の部署のみに専念させてみるのも良いと考える。そして、もし人手が足りないのならば一般スタッフも必ずどこかの部署に所属させる等の対応により、予てからの懸念点であった学生スタッフ等の途中辞退なども責任感を与えることで、減らせられると考える。

最後に認知度である。学生FD CHAmmitの認知度が低いことによって学部からの推薦によるスタッフ、及び、参加者は何を行う団体なのか、どのくらいの期間活動をするか何も不明なまま参加しているように感じる。そのためには先ず、CHAmmitがどのような活動で、どのくらいの期間にするなどの5W1Hの説明やスタッフ募集、参加者募集などを教職員にしっかりの理解してもらい、その上で推薦や参加をしていただけるとより良いものになると確信している。それに伴い、ポスターやTシャツのデザインは早いうちから芸術学部の絵画系の学生か絵の得意な人をお願いしておくことで、本番までの長期期間宣伝することが出来ると考える。そういったことを改善することで、このような活動に興味はあるが迷っている学生、未だ存在を知らない学生を発掘できたかもしれないことを思うと実に惜しく感じる。

今年度も学生FD CHAmmitという活動が自分に与えた影響は大きく、学生生活においても大変有意義な経験を得られたように思う。また、コロナウイルスによって変わらざるを得ない大学の行く末に今年も関わることが出来光栄に思う。教員、職員、学生が参画し大学教育を変えるという貴重な機会だからこそ、例え難しくとも良い活動になるように来年度のスタッフにはこれらの反省を活かしつつ、その年にあったやり方を模索し、更に良いものに仕上げたい。日本大学の教育が少しずつでも発展し、学生も教職員の方たちも前を向く事が出来ることを心から願っている。

「インフルエンサーとして」 曾山はるか

(日本大学生物資源科学部動物資源科学科3年・令和4年度 学生FD CHAmmit コアスタッフ インフルエンサー)

初めに、今年度CHAmmitにスタッフとして関わってくださった学生のスタッフ、参加してくださった学生・教職員の皆様、そして日本大学FD推進センターの皆様に変更して御礼申し上げたい。日本大学学生FD史上初のハイブリッド方式で開催し、成功出来たのは、関わって頂いた皆様のおかげだと感じている。今年度のスタッフとして、活動に従事できたことを本当に誇りに思う。

さて、私は今年度の日本大学 学生FD CHAmmitのインフルエンサー活動の反省を述べようと思う。

まず、公式アカウントのフォロワー数を増やすことが出来なかったことが、反省点として挙げられる。特にInstagramのフォロワーは、目標としていた100人には届かず、90人という結果だった。しかも内訳を見てみると、フォロワーはほぼ今年のスタッフか、OB・OGの方たちばかりで、ターゲットとしているスタッフでない日本大学生のフォロワーはほぼいないことがわかった。これは、投稿が同じような内容になってしまったことが原因だと考えられる。日本大学の公式アカウントなのでFD活動に関係のない投稿は

できないことはもちろんだが、投稿内容がミーティングの報告ばかりになってしまい、投稿を見る人に「また同じ内容か」「投稿内容が固いな」という印象を与えてしまったことが考えられる。実際、学生スタッフからもそのような指摘があったが、本番間近ということもあり、投稿内容を変えることは出来なかった。

次に、新しい投稿をするのが遅くなったことが反省点として挙げられる。今年度のインフルエンサーの新しい取り組みとして「グリット投稿」と「所属している学科の紹介」の2つを行った。しかし、どちらも投稿するのが本番近くとなり、結果的にフォロワー増加に繋げることが出来なかった。これは、インフルエンサーのリーダーである私の体調管理が出来ておらず、インフルエンサーのグループを動かすのが遅くなったことが原因である。仲間に頼ることをせず、自分1人で解決しようとしていた節があり、個人的に猛反省している。しかし投稿自体はこれまでの公式アカウントにはないもので、日本大学のFD活動に新しい風を吹かせられたと思う。グリット投稿は、公式インスタグラムを見たときにパッと目を引くものでインパクトが強く、フォロワーに新鮮さをもたらすことが出来た。所属している学科の紹介は、インフルエンサーが所属している「学科」の紹介をした。学部を紹介はよく目にするが、学科の紹介はあまり見る機会がなかったことから、自分の所属していない学科の特性を知ることができる良い機会になったと思う。グリット投稿も所属している学科の紹介も、質の高い投稿だったからこそ、もっと早く投稿出来ていれば、より多くの人の目に留まることが出来たのではないかと考えている。

最後に、コアスタッフと学生スタッフとの間に壁があったことが反省点として挙げられる。これはインフルエンサー活動に限らず、今年度のFD活動全体に言えることだが、問題点などの解決を全てコアスタッフのみで行い、学生スタッフには報告しか出来なかった。しかも何度も報告することが変わるため、学生スタッフを混乱させてしまったと思う。解決策としては、問題が起きた時や新たな課題が出てきた時に、学生スタッフの意見を聞く機会を作ったり、過程をしっかりと説明する機会を作ることが考えられる。

反省点は多いが、今年度も学生FD CHAmmiTという活動を通して自分自身成長できたと思う。また、コロナウイルスによって日々変化していく世の中の中の大学という機関に関わることが出来光栄に思う。教員、職員、学生の三者が同じ目標である大学教育を変えるということに取り組む貴重な機会だからこそ、困難なことが続いたとしても日本大学の伝統であるCHAmmiTがこれからも実りあるものになるよう、来年度のスタッフにはこれらの反省を活かしつつ、その年にあったやり方を模索し、更に良いものにしてほしい。日本大学の教育が発展し、学生も教職員の方たちも有意義な大学生活を送れることを心から願っている。

「CHAmmiT 本番までを振り返って」 宮口昌也

(日本大学生物資源科学部森林資源科学科3年・令和4年度 学生FD CHAmmiT コアスタッフ インフルエンサー)

初めに「令和4年度 日本大学 学生FD CHAmmiT」開催にあたり、ご協力いただいた学生、教職員の皆様に御礼を申し上げます。2013年度より開催されている日本大学 学生FD CHAmmiTの歴史の中で、初の対面とオンラインのハイブリッド開催となった今年度を無事に乗り越えられたのは、関わっていただいた皆様のご尽力あってのものだと考える。

私が大学一年次には新型コロナウイルスの蔓延によって、ほぼ全ての授業がオンデマンド形式での実施となり、学生同士での交流機会の喪失はもちろんのこと、学内施設の利用ができず、自らの学びを深める機会をも奪われかけていた。そんな中で、学生自身が受ける教育の質やその改善について議論し合う日本大学 学生FD CHAmmiTの存在を知り、コロナ禍といった不可抗力とはいえ本来の大学の姿からかけ離れた、不満が募る大学教育の現状に、一石を投じたいという思いから前年度の日本大学 学生FD CHAmmiTに学生スタッフとして参加した。本年度では、前年度にファシリテーターとして参加した経験から、本活動を主

導する立場で進めたいと思うようになり、コアスタッフとして本年度の活動に、約半年間という短い間ではあるが、関わらせていただいた。

主にインフルエンサーとして、本活動の広報担当のようなかたちで Instagram や Twitter などにスタッフミーティングの様子をはじめとした活動内容の発信を行い、本活動の認知度向上に取り組んできた。結果から申し上げると、どちらの SNS もフォロワー数に大きな変化は見られなかったが、投稿内容としては満足いくものが半年間を通して発信することができ、やりとげられたと思う。また、本年度のチームインフルエンサーでは活動内容の発信に加え、視認性の高いグリッド投稿の活用や、16 学部 87 学科、短期大学部 4 学科、通信教育部 4 学部の特色を発信するための学科紹介企画を行い、インフルエンサー内で自身の所属する学科の特色を 1 日おきに Instagram に投稿した。インフルエンサーとしては実りある活動になったのではないかと考えている。

次に、本番を迎えるまでの自身の活動について振り返ろうと思う。前年度と異なり、スタッフミーティングが日本大学本部で行うことが可能となり、スタッフ同士が対面でコミュニケーションを取ることが容易になったにもかかわらず、スタッフミーティングの日程が大学の集中講義と被ったり、新型コロナウイルスの濃厚接触者となってしまったりで、なかなか参加することが出来なかった。せっかくの対面実施に積極的に関わることが出来なかったことは、本活動を主導で運営する立場にあるコアスタッフとして反省すべき点である。夏以降は徐々に活動に参加することができ、スタッフミーティングや、学生スタッフを対象としたファシリテーション練習会等で多くのスタッフとコミュニケーションをとり、本番に向けてスタッフ一丸となって取り組めたと思う。

本番では、同じくコアスタッフであった曾山さんと 2 人で司会進行の役割を担った。オープニングが始まる前の注意事項の説明を自分が担当した。多くの参加者にとって、スタッフから発せられる第一声が自分の説明であることから、とても緊張したが、これから始まる日本大学 学生 FD CHAmmit でのさまざまな議論を楽しんで欲しいという思いから、自信を持って喋るように努めた。実際にオープニングが始まってからエンディングが終わるまでは、前日に行ったりハーサルの通りにトラブルなくスムーズに進めることができ、司会進行として役割を果たせたように思う。

前日のリハーサルから、司会台本のスライド化や Zoom 背景、カメラ、グリーンバックの調整等、2 人が司会進行を務めるにあたって多くのご協力をいただいた本部学務課の緑川さん、日本大学 FD 推進センター全学 FD 委員会プログラム WG リーダーの平山先生にこの場を借りて改めて御礼申し上げる。また、ファシリテーターを務める予定だった学生スタッフが当日欠席したため、急遽自身もファシリテーターとしてセッション 1, 2, 3 に参加することとなり、司会進行もあってかなり慌ただしい本番となった。数多くの参加者に対して学生スタッフが不足する事態に見舞われたので、来年度の活動ではより多くのスタッフ確保が重要になると考えられる。終わりになるが、コアスタッフとして、インフルエンサーとして、当日の司会進行・ファシリテーターとして、もっと主体的に取り組めたら良かったという一抹の後悔は残るものの、結果としては成功に終わったのではないかと考える。

本年度の活動において、参加者に対する十分なスタッフ数の確保や、短期間でのファシリテーション技術の習得など、来年度の活動において十分に検討すべき課題点は多く見つかったので、ぜひ来年度の活動に活かして欲しいと願う。約半年間の活動の中で、周りの支えがなければここまで来れなかったと強く思う。この場を借りて、今までの活動において近くで支えてくれたコアスタッフの皆にも御礼を申し上げる。

「CHAmmiT に参画する意義」 垂見麻衣

(日本大学通信教育部商学部商業学科2年・令和4年度 学生FD CHAmmiT コアスタッフ セクレタリー兼アート)

昨年に引き続き CHAmmiT にコアスタッフとして参画した最大の理由は、日本大学の通信教育部をはじめとした全学的な大学の教育改善活動を進めることができることを昨年度の活動を通して実感し、今年度もさらにそれを推進したいと思ったからである。CHAmmiT に参画することは、日本大学の現状を客観的に分析し、良い点・悪い点を再確認したうえで、それらに真摯に向き合うことは、より良い日本大学、より良い学生生活の実現に近づく最良の手段であると言えよう。

今年度の CHAmmiT は、対面・オンライン (Zoom) を用いたハイブリッド形式で開催された。このハイブリッド形式は、参加者に対してコロナ禍における適切な「選択肢」を与え、共に課題に取り組む機会を広く提供することから、昨年よりも多くの参加者と共に改善活動に取り組むことができたと考える。

コアスタッフとして運営側に携わってみて感じることは、昨年同様、コアスタッフは学生スタッフをうまく巻き込みながら参加者の関心度をより向上させ、CHAmmiT 全体をマネジメントできたように感じる。しかし、昨年の改善点として挙げていた「より円滑な議論のための早期準備」については、今年度も手付かずとなってしまう、継続課題として残ったと言わざるを得ない。

私個人としては、今年度の本番当日は、通信教育部のファシリテーションを務め、多くの学生や教職員の生の声を聞き、ファシリテーションする中で、自分自身が抱えていた不安や疑問は、同じ通信教育部の学生・教職員たちの共通の不安・疑問であることを認識することができた。この点は大きな収穫だった。コロナ禍において、多くの科目がオンライン環境での授業実施を継続する中で、今後対面授業に戻すのか、このままオンライン授業を継続するのか、学生・教職員の2つの側面からの授業の理想像がかいま見えたように感じ、非常に貴重な機会となった。

今年度の CHAmmiT をきっかけに、通信教育部の中でも、小さいながらも、具体的なアクションが動き始めたことは非常に喜ばしく、引き続き CHAmmiT の魅力を発信しながら、学生FDの更なる活性化、そして日本大学の発展のためにもっと行動していきたいと思う。

『日本大学FD研究』投稿要項

平成24年7月4日制定

平成25年3月6日改正

平成25年4月1日施行

平成26年3月5日改正

平成26年4月1日施行

平成28年3月2日改正

平成28年4月1日施行

平成30年12月5日改正・施行

令和2年10月27日改正・施行

日本大学FD推進センターでは、高等教育開発に関する論考や活動報告などを学内外に広く共有することにより、組織的な教育の質向上を図ることを目的として、『日本大学FD研究』を刊行する。『日本大学FD研究』を編集・刊行するために必要な事項を以下に規定する。

1 投稿資格

日本大学（大学院，短期大学部及び付属高等学校等を含む）の教員（非常勤教員含む）・専任職員・学生。

その他，日本大学FD推進センター長が適当と認めた者。

なお，学生が第一著者として投稿する場合は，本大学の専任教職員の推薦を得ること。

2 掲載原稿の種類

掲載原稿の種類は，次のいずれかとする。

① 研究論文

高等教育開発（授業開発，改善等。以下同じ）に貢献できる問題提起と意義があり，この分野において価値と有効性がある研究成果をまとめたもの。

〔査読付原著〕

※ 未発表のものに限り，他誌への重複投稿は認めない。以下②，③も同じ。

② 教育実践研究

高等教育開発に関する実践活動から導き出された研究成果をまとめたもの。〔査読付原著〕

③ 研究ノート

高等教育開発に貢献できる問題提起と意義があり，今後，研究論文に発展

する可能性を持ち、研究の進歩に寄与すると見なせる研究成果をまとめたもの。〔査読付原著〕

④ 活動報告

高等教育開発に関する実践報告（主に部科校で開催されたFD活動の紹介・報告等）。

⑤ 学生レポート

学生を著者とする学生FDに関する活動報告（主に「日本大学学生FD CHAmiT」や部科校で開催された学生FD活動の紹介・報告等）。

⑥ その他（資料紹介、書評など）

国内外における高等教育開発に関する研究資料等で、日本大学FD推進センターの活動に資するもの。

3 執筆要項

別に定める。

4 投稿申請期間

投稿原稿は、原則として期限を設けず随時受け付ける。

5 投稿論文に対する審査

① 投稿論文の受付

投稿論文が受付されると、受付日を記載した受付書が送付される。

② 投稿論文に対する審査

投稿論文の審査は、編集委員会が定めた基準に従って、厳格かつ公平に行う。編集委員会は匿名査読者（以下、査読者という。）を選任する。なお、1投稿毎に2名の査読者が選任される。なお、具体的な審査基準は編集委員会が別途定める。

③ 投稿論文の採否

投稿論文の採否は、編集委員会が査読結果報告に基づき、編集委員会が決定する。ただし、審査の結果、研究論文として投稿された論文が研究ノートとしてのみ採択が許可されることがある。また、教育実践研究として投稿された論文が活動報告としてのみ採択が許可されることがある。

④ 条件付で採用の場合の再査読

条件付で採用の場合には、査読者から必要な修正が指示される。投稿者は定められた改訂期限内に編集委員会宛に改訂原稿を送付すること。その際には、改訂箇所を明示したリストを同封すること。

改訂原稿についても同一の査読者が再査読を行う。また、改訂原稿受付後、

投稿者に対して掲載の可否を原則として1ヶ月以内に再通知する。

⑤ 投稿辞退

条件付で採用の場合など審査結果に不服がある場合には、投稿を辞退することができる。この場合、投稿者はその旨を通知後2週間以内に文書で編集委員会に連絡しなければならない。

⑥ 依頼(招待)論文

上記の規定に拘わらず、全学FD委員会からの付託により編集委員会が決定した依頼(招待)論文は、特別枠として掲載する。

⑦ 投稿論文の受理

編集委員会が採用を決定した日を投稿論文の受理日とし、受理日を記載した受理書が送付される。

⑧ 投稿論文の掲載

受理された論文は原則として2週間以内にPDF化し、日本大学FD推進センターウェブサイトに掲載する。なお、WEB掲載日を発行日とする。

6 活動報告・学生レポート・その他(資料紹介、書評など)に対する審査

投稿原稿が受付されると、受付日を記載した受付書が送付される。

投稿原稿は、編集委員会が審査の上、採否を決定する。

採用が決定された原稿は原則として2週間以内にPDF化し日本大学FD推進センターウェブサイトに掲載する。なお、WEB掲載日を発行日とする。

7 編集

全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループを編集委員会とし、全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループメンバーを編集委員とする。

なお、この他に若干名の編集委員を追加することができる。

8 刊行期日

原則として、年1回、毎年3月末日に刊行する。

なお、冊子に収録される原稿は当該年度1月末までに原稿が完成し、WEB掲載ができたものを対象とする。

9 著作権

投稿者は、採用原稿における著作権のうち、複製権、翻訳・翻案権、公衆送信・伝達権について、日本大学FD推進センターに帰属し、学内外に公開することを了承する。

10 配付・公開

日本大学FD推進センターウェブサイトにおける公開に加え，冊子での配付を行う。

以 上

『日本大学FD研究』執筆要項

平成 24 年 7 月 4 日制定

平成 25 年 3 月 6 日改正

平成 26 年 3 月 5 日改正

平成 28 年 3 月 2 日改正

平成 28 年 4 月 1 日施行

平成 30 年 12 月 5 日改正・施行

令和 2 年 10 月 27 日改正・施行

1 分量

掲載原稿 1 篇の分量は、原則として以下を目安とする。

ただし、全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループが認める場合はこの限りではない。

① 研究論文・教育実践研究

20,000 字以内（刷り上り 12 ページ以内，カラー2 ページ以内）

② 研究ノート・活動報告・学生レポート

10,000 字以内（刷り上り 6 ページ以内，カラー2 ページ以内）

③その他（資料紹介、書評など）

刷り上り 4 ページ以内（カラー2 ページ以内）

2 原稿の執筆要領

- ① 原稿の作成にあたっては、原則として Word ファイルで作成して、そのまま印刷できる完成原稿を提出する。なお、テンプレートはホームページに掲載してある最新版を用いる。
- ② 使用言語は、原則として日本語とする。
- ③ 用紙は A4 版とし、上 30mm，下 25mm，左右 20mm の余白を設ける。横書き，1 段組，字体は MS 明朝（和文）と Times New Roman（半角英数字）とする。原稿ではヘッダ，フッタは使用しない。
- ④ 文字サイズは、タイトル：表題 14 ポイント，副題 12 ポイント，要旨：10.5 ポイント，本文：10.5 ポイントとする。和文タイトルは MS ゴシック体を使用し，英文タイトルは Times New Roman を使用する。見出しは，MS ゴシック体を使用し，大見出し 12 ポイント，小見出し 10.5 ポイントとする。
- ⑤ 原稿は，1 行 48 文字，1 ページ 41 行のフォーマットで作成する。
- ⑥ タイトルは和英の 2 ヶ国語を使用し，研究論文・教育実践研究・研究ノート・活動報告には英文の要旨（300 語以内）を加える。
- ⑦ (1)タイトル（日本語），(2)氏名（日本語），(3)所属（日本語），(4)タイトル（英

語), (5) 氏名 (英語), (6) 所属 (英語), (7) 要旨 (英語) の順で記載する。

- ⑧ 3~5 個のキーワード (英文) と 3~5 個のキーワード (和文) を記載する。
- ⑨ 英文はタイトルを含め, 著者の責任において投稿前にネイティブチェックを受けるものとする。
- ⑩ 常用漢字・現代仮名遣いを用い, 句読点は「,」「。」を用いる。
- ⑪ 図表を挿入する場合は, 適宜, 本文の字数を減らす。図と表は, それぞれ連番を付し, タイトルは 10.5 ポイント, 出典は 9 ポイントとする。
- ⑫ 条注は, 本文の末尾に「注」というセクションを設け, 一括して記載する。本文中での注の指示は「¹, ², …」のように連番を付して上付きで示す。
- ⑬ 本文中で参照した文献は, 注のセクションの後ろに「引用・参考文献」というセクションを設け, アルファベット順に漏れなく記載する。別紙「引用・参考文献の記載方法」を参照のこと。
- ⑭ 本文中に文献を引用する場合, 引用個所の後に著者の姓と年号を括弧付きで記入する。

また, 著者名の後に引用する場合には, 年号を括弧付きで記入する。著者が 2 名のときは両者の姓を併記し, 和文名表記の場合は“と”, 外国語名表記の場合は“and” 3 名以上のときは筆頭著者以外を和文名表記の場合は“ら”, 外国語名表記の場合は“*et al.*”と略記する。

例: (日本, 2009), (日本と千代田, 2008), (日本ら, 2007), (Adams, 2007), (Adams and Smith, 2006), (Adams *et al.*, 2004)

- ⑮ 同一著者で同一刊行年の文献を複数引用する場合は, それぞれの刊行年の後ろにアルファベットを付して区別する。例: 2011a, 2011b

3 投稿手続き

- ① 原稿等は, 以下のとおり申請時に本部学務部学務課あて提出する。
 - (1) 投稿申請書 (日本大学 F D 推進センターウェブサイトから入手)
 - (2) 原稿電子媒体 (CD 等)
 - (3) プリントアウトした原稿 2 部
- ② 投稿された原稿等 (図版, 写真, CD などを含む) は原則として返却しない。

4 校正等

初校校正のみ著者が行う。以降は, 誤植等のみの対応を全学 F D 委員会教育情報マネジメントワーキンググループが行う。

以 上

【問い合わせ・原稿提出先】

日本大学本部学務部学務課

〒102-8275 東京都千代田区九段南4-8-24

TEL 03-5275-8314

e-mail adm.aca.eps@nihon-u.ac.jp

日本大学FD推進センターウェブサイト

http://www.nihon-u.ac.jp/about_nu/effort/fd-center/index.html

引用・参考文献の記載方法

引用・参考文献リストは、和文、外国語文を含めて、筆頭著者の姓のアルファベット順に配列し、同一筆頭著者の文献が複数の場合は発表順に、さらに同一年の場合は次の著者の姓のアルファベット順とし、以下の例のように記述のスタイルを統一して作成する。

- 1 雑誌掲載の文献は、(1) 著者名、(2) 発行年、(3) 表題、(4) 雑誌名、(5) 巻・号、(6) 開始—最終ページの順に記載する。

(例)

日本一郎・千代田太郎 (1981), 「日本における教育のありかた」『日本教育学会誌』第18号, 328-334 ページ。

Anderson, J. E. and E. Van Wincoop (2003), “Gravity with Gravitas: A Solution to the Border Puzzle,” *American Economic Review*, 93(1), 170-192.

- 2 単行本の記載は、(1) 著者名、(2) 発行年、(3) 書名(版)、(4) 発行地名発行所名の順とする。

(例)

藤本隆宏 (2004), 『日本のもの造り哲学』日本経済新聞社。

Krugman, P. (1995), *Development, Geography, and Economic Theory*, Cambridge: MIT Press.

- 3 分担執筆の場合は、(1) 著者名、(2) 発行年、(3) 表題の次に、(4) 編集または監修者名を加えて、(5) 書名(版)、(6) 発行地名発行所名、(7) ページの順とする。

(例)

日本一郎 (2000), 「戦後教育史」(日本一郎・千代田太郎編『日本の教育史(第1版)』朝倉書店), 109-116 ページ。

- Ye, Xinyue, and Mark Leipnik (2013), “Beyond Small Business and Private Enterprises in China: Global and Spatial Perspectives,” in Ting Zhang and Roger R Stough (eds), *Entrepreneurship and Economic Growth In China*, New Jersey: World Scientific, 289-316.
- Wu, Chung-Tong, Xiao-Ling Zhang, Gong-Hao Cui, and Shu-Ping Cui (2014), “Shrinkage and Expansion of Peri-Urban China,” in Karina Pallagst *et al.*, *Shrinking Cities - International Perspectives and Policy Implications*, London: Routledge, 166-167.

以 上

令和3年度

日本大学FD推進センター活動報告書



日本大学FD推進センター

目 次

教員の資質能力と職員の教学管理能力向上を見据えたFD活動の充実を目指して
－FD推進センター基本計画（中期計画）を振り返りながら－

FD推進センター長・副学長（学務担当） 青 木 義 男

日本大学FD推進センター連携マップ

令和3年度調査・分析ワーキンググループ活動報告

令和3年度プログラムワーキンググループ活動報告

令和3年度教育情報マネジメントワーキンググループ活動報告

令和3年度日本大学FD推進センター活動一覧

令和3年度全学FD委員会名簿

令和3年度全学FD委員会ワーキンググループ名簿

【 付 録 】

日本大学FD推進センターに関する内規
FD推進センター基本計画（中期計画）

※ 本報告書に掲載の役職・資格等については、令和3年度当時のものです。

教員の資質能力と職員の教学管理能力向上を見据えた FD 活動の充実を目指して
—FD 推進センター基本計画（中期計画）を振り返りながら—

FD 推進センター長・副学長（学務担当）
青木 義男

FD 推進センターは、平成 29 年度以降、日本大学教育憲章の下、学生の成長を一義的に捉えた教育の質保証を実質化する FD 活動の充実に注力してまいりました。その成果と課題を総括し、このたび 6 年ぶりに本センターのミッションを見直しました。この新たなミッションを基に「日本大学中期計画」（令和 3 年度～令和 8 年度）を踏まえて、本センターの中期計画（令和 3 年度～令和 5 年度）を立案いたしました。本センターでは、本学の FD を実践するために 3 つのワーキンググループ（以下、WG）を組織しておりますが、「教員の教育研究活動等の自己点検・評価の実施による資質向上の推進」（調査・分析 WG）、「教員の恒常的な資質及び職員の教学管理能力の向上を目指し、日本大学教育憲章に基づく教育研究活動能力の獲得」（プログラム WG）、「FD 活動の成果とその充実を支援する情報を収集し、学内外へ効果的に発信」（教育情報マネジメント WG）の 3 つを中期計画に掲げました。これらの中期計画を基に各 WG では令和 3 年度の活動計画を策定し、今年度は次のとおり活動を行ってまいりました。

調査・分析 WG では、中期計画に関連して、学生による授業評価アンケートに係る調査項目等に関する改善の検討及び教育の質保証につながる効果的な調査結果の活用方法等の検討を進めてまいりました。

また、FD 等教育開発・改善活動に関する調査については、調査結果の集計方法や項目を見直し、並行して、これまでも継続して検討がなされているティーチング・ポートフォリオ（仮称：教育状況調査票）の在り方について再確認しました。

プログラム WG では、昨年度は新型コロナウイルス感染拡大防止により実施を断念した又は代替措置により実施した各種イベントについて、今年度はイベントの実施時の社会状況に応じて対面又はオンラインでの開催ができるよう多岐にわたる検討を重ねました。新任教員 FD ワークショップ、全学 FD ワークショップは、いずれも初めてのオンライン開催となりましたが、オンラインでのメリットを感じる一方、挙げられた課題については次年度以降の検討事項とさせていただきます。

また、「令和 3 年度日本大学 学生 FD CHAmiT」は「アフターコロナ～IT 化と大学教育～」をテーマとして、昨年度に引き続きオンラインで開催しました。昨年度の学生 FD CHAmiT では、その成果を学部提案書としてまとめ、各学部ではその提案書に記された要望や提案に対して改善報告書を作成し学部等ホームページで公表をしておりましたが、今年度は、各学部で作成された改善報告書の検証を行い、新たな学部提案書をまとめました。本センターのミッションの「学生と教職員が手を携えた教育改革の推進」を象徴する活動として引き続き

学内外にも発信をしていく予定です。

加えて、FD シンポジウム、Zoom の本学限定のトレーニングや著作権セミナーの実施など、本学教職員にとって関心の高いテーマやニーズを捉え、他の WG と連携して実施をいたしました。

また、今年度から動画配信サイトを開設し、各教員が必要に応じて開催されたシンポジウムやセミナーの動画を視聴できるよう整備しました。今後も継続して FD 関連の動画配信を積極的に行うことで、コロナ禍においても教員の FD の充実を図ってまいります。

教育情報マネジメント WG では、FD 推進センターのミッションに関連して「FD NEWSLETTER」第 19 号では「学生の声を反映した授業改善」、第 20 号では FD 推進センターのメンバーを中心に今後の展望を語った「日本大学における FD 活動のミライ」を特集として、広く情報発信をしました。また、「FD ガイドブック」では『ミライヲツクル』『学生と創る授業デザイン』共に、コロナ禍で導入が進んだオンライン授業に関する記載を追記し、『ミライヲツクル』では令和 4 年度から「自主創造の基礎」の開講に合わせてサブテキストとしても活用できるよう改訂いたしました。

更に、今年度より、「FD 推進センターにおける PDCA サイクル充実を図る組織的取組みの実施」を中期計画に加え、FD 推進センター副センター長と WG リーダーが集う WG リーダー会議が PDCA サイクルの A である「対策・改善」の役割を担うことができるよう体制を整えました。WG リーダー会議では、各 WG の活動について情報を共有して熟議することで、共調・協働し、本センターの役割を十分に担えるよう活動を継続してまいりました。

本学は令和 3 年 3 月に「日本大学内部質保証に関する方針」を制定し、本部に「全学内部質保証推進委員会」、学部等に「学部等内部質保証推進委員会」を設置し、「教育の質保証」に関する全学レベル、学位プログラムレベル、教員レベルによる PDCA サイクルを実質化させるべく動き出したところです。FD 推進センターとしては、本学の内部質保証の一旦を担うことを自覚し、自己点検・評価や認証評価の結果、特に FD に関する指摘事項に意識を向け、各レベルにおける具体的な施策を積極的に行う必要があると考えております。それにより中期計画の変更などもあり得ますが、有機的な連携が本学の教育の充実を後押ししていくことになるでしょう。

今年度は、中期計画 3 か年のうち 1 年目が過ぎたところですが、本センターのミッション及び中期計画に基づき、引き続き学修者本位の教育の実現に向けて様々な側面から組織的に FD 活動を推進してまいりますので、皆様の御協力をお願い申し上げます。

日本大学FD推進センター 連携マップ

FD推進センター〔全学FD委員会〕

【目的】

1. 日本大学におけるFD活動の全学的な推進
2. 大学院, 学部, 通信教育部及び短期大学部における FD活動の支援
⇒日本大学における教育の質的向上を図る

学務部学務課

ワーキンググループリーダー会議

調査・分析 ワーキンググループ リーダー, メンバー

FD活動及び教育活動に関わる調査・分析を行う。
また, 既に保有する各種教育情報等の効果的な活用方法を検討する。

【主な活動内容】

- 「FD等教育開発・改善活動に関する調査」の実施・分析等
- FD等教育開発推進関連組織に関する調査研究
- 学内外のFD活動等に係る調査研究

ほか

プログラム ワーキンググループ リーダー, メンバー

教職員の教育・研究指導力向上並びに学生の学習意欲向上などを目的とした各種のプログラム・ツールを開発・実施・提供する。

【主な活動内容】

- 全学FDシンポジウム等の企画・実施
- 新任教員対象FDプログラムの企画・実施
- “学生参画型FD”の趣旨を捉えたFDプログラムの企画・実施

ほか

教育情報マネジメント ワーキンググループ リーダー, メンバー

日本大学全体及び学部・研究科等におけるFD活動などの取り組みを広く学内外に情報発信するとともに, その効果的な情報共有のあり方を検討する。

【主な活動内容】

- 「日本大学FD NEWSLETTER」の企画・編集
- 『日本大学FDガイドブック』の企画・編集
- 『日本大学FD研究』の編集・刊行
- FD推進センターウェブサイトの具体的な活用方法の継続的な検討と展開

ほか

令和3年度

調査・分析ワーキンググループ活動報告



日本大学FD推進センター

〔全学FD委員会調査・分析ワーキンググループ〕

調査・分析ワーキンググループに係る令和3年度における活動内容及び総括は、FD推進センター基本計画（中期計画）並びに令和3年度活動計画に基づき、次のとおりである。

- 1 令和3年度活動計画
 - ① 「令和3年度FD等教育開発・改善活動に関する調査」の実施
 - (1) 学部，短期大学部
 - (2) 大学院研究科
 - ② 学生による授業評価アンケート結果の全学的な活用に係る諸検討
 - ③ 教員の教育業績評価方法等に係る諸検討
- 2 FD推進センター基本計画（中期計画）を踏まえた調査・分析ワーキンググループとしての総括

1-① 「令和3年度FD等教育開発・改善活動に関する調査」の実施

(1) 学部，短期大学部

本調査は、平成20年度より（平成22年度を除き）毎年実施している。13回目となる今年度の調査は計19学部等に依頼し、全学部より回答を得た。昨年度に引き続き、今年度もコロナ禍という一昨年度以前とは異なる特殊な社会環境下での調査となった。項目については、Ⅱ.組織的なFD等教育開発・改善活動の項目における各設問を精査し、設問を4項目にするという見直しをおこなった（昨年度は20項目）。各設問について得られた回答を集計した結果は以下の通りである。

I. FD等教育開発・改善活動推進組織

本学では、全ての学部等にFD等教育開発・改善活動を推進するための組織が設置されている。名称は、「FD委員会」が大半を占めるが、他には経済学部の「FD推進委員会」、短大船橋校舎の「教職員教育改善委員会」、生産工学部の「教育開発センター運営委員会」、医学部の「FD・SD推進委員会」、通信教育部の「FD専門委員会」がある。

教職員の構成は教員が3～21名、職員が2～10名で、教職員の合計は、最多が31名、最少が8名であった。1年間の会議開催回数の平均は4.3回であり、最多は11回、最少は1回であった。

Ⅱ. 組織的なFD等教育開発・改善活動

1. 学部FD委員会におけるFD活動等の計画及び実施について（講演会・WS等の開催計画等）

多数の学部で講演会等は計画および実施されているが、学部独自の中期計画等を設けるまでには至っている学部はごく少数という状況であった。

優れた事例としては、商学部における学部FD委員会ミッション案および中期計画（令和3年度～令和5年度）に基づいたFD活動が挙げられる。また、通信教育部では、通信教育部の授業の実施方法の周知やオンデマンド学習のポイントや学生からの意見の紹介を行う教員連絡会を実施していた。

今後は、各学部でFD活動を実施するにあたり、3年程度の中期計画を立てることにより、FD活動の方針と目標を明確にした上で、各学部教育において改善すべきポイントを認識することが課題であると思われる。

2. 学生参画型FD（学生FD）に係る組織的展開について

学生FD組織を設置している学部のほか、昨年度の学生FD CHAmmitにおける学部提案書を基にして、学生と協議の場を設けた学部がいくつかみられた。

優れた事例としては、商学部・歯学部・松戸歯学部で実施された、「しゃべり場」が挙げられる。例えば、歯学部ではZoomで歯学部しゃべり場を実施し、学生が主体となりグループごとの意見出しから総まとめの発表がおこなわれた。さらに、学生の意見をまとめた報告書に対しては、該当する委員会がフィードバックコメントを作成し、それを学生に公開している。

今後は、現在学生FD組織の設置を検討している学部が、学生FD組織設置実現に至るための検討をより深めていくことが課題であると思われる。

3. 授業内容や授業方法等に関する学生への意見聴取、学生の意見の反映、学生へのフィードバックについて

多数の学部で授業評価アンケートや学修満足度向上調査による学生からの意見聴取とフィードバック、集計結果のHPでの公開が実施されていた。

優れた事例としては、国際関係学部での語学教育における、HP上の特設サイトを用いた語学教育内での学修相談受け付けが挙げられる。また、同学部での新入生と1年次の語学を修得した上級生によるオンライン交流会（学修上の相談等）も素晴らしい取り組みである。他の優れた事例としては、生産工学部で実施された、授業評価アンケート集計結果に対する教員コメントの学生への公開がある。多くの教員が、授業評価アンケートの集計結果並びに同アンケートの自由記述欄に記載されている学生からの意見に対し、授業改善に向けてのコメントをフィードバックしている。

このように多くの学部で優れた取り組みがなされている。ただし、授業評価アンケートや学修満足度向上調査による学生からの意見に対して、各担当教員の返答・授業改善計画等といった見える形での対応をしていない学部も少数あり、そこには改善の余地があると思われる。

4. ICTを活用した優れた取り組みについて

いくつかの学部でFD活動にICTを活用していることが示されていた。例えば、経済学部では、従来は紙媒体で行っていた授業評価アンケートを、学部ポータルサイトを通じたオンラインでの実施に切り替え、FDディスカッションもオンラインでの実施にする等、必要に応じてICT技術を取り入れた。また、生物資源科学部では、FD研修会等においてZoomによるオンライン開催を導入し、当日欠席された方には動画を配信するなど、視聴できる機会を広く設けている。

このように、コロナ禍を契機にFD活動におけるICTの活用が進んだと思われる。そこで得られたICT活用の経験を基に、より有効なICT活用法を模索することが、今後取り組むべき課題の一つになると考えられる。

Ⅲ. 学生による授業評価アンケートの実施

1. 実施形態と対象

令和2年度からWEBによる入力による実施方法へ変更となった。

2. 実施対象授業

令和2年度後学期においては、科目単位（全ての科目）が10学部、教員単位が4学部、全科目を対象としているが、履修者数において除外しているのが2学部、ゼミナール・総合研究科目は除外しているのが1学部であった。その他が1学部、実施していないが1学部であった。令和3年度前学期においては、科目単位（全ての科目）が12学部、教員単位が3学部、履修者数において除外しているのが2学部、ゼミナール科目以外が1学部、その他が1学部であった。科目単位（全ての科目）を対象としている学部が多い状況であった。

3. 集計結果の公開

公開の対象は、担当教員のみ、ポータルサイトを通じての公開、ホームページを用いての公開といったように、学部等によって様々である。

4. 集計結果の分析方法

学部ごとで創意工夫がなされており、科目単位の分析の他、教員個人ごと、学部全体、学科ごと、科目群単位、学年ごとに詳細な分析を行い、授業改善へとつなげている事例がある。商学部では、ワーキンググループを形成し、自由記述欄の記載内容を分析した上で、商学部FD委員会で対応が必要と判断した内容について教員に対して具体的改善を促している。芸術学部では、前年度の数値と比較した報告書を作成し、学部のウェブサイトで公開している。さらに、改善の取り組みにつなげるべく全ての項目を数値化して集計し、総合評価の低い科目及び目安となる数値の検討を行っている。医学部では、学務担当、医学教育センターで解析し、これにより改善点を見つけて、各教員にはフィードバックを行うとともに、シラバスの改善につなげている。

5. 集計結果の活用方法

集計結果というマクロの結果は、なかなか学部単位で十分に生かすことはできていない。一方で、そのような集計の基礎情報となる個別の評価結果は、教員個人に任せている学部が多いものの、学部によっては学生にフィードバックを行うとともに、教員に授業改善計画を作成してもらう学部もあり、授業改善へと着実に繋がっている成果が年々と強くなってきており、今後の更なる効果が期待される。また、学部によっては、ティーチング・アワードの創設などを検討する中で、その利用方法として活用しようとする動きもある（法学部・生産工学部）。このように高い評価を受ける授業、教員を発掘し、それを共有していく動きは活性化すべきである（商学部の事例）。一方で、教員単位に対応を求めている学部がほとんどであり、改善が必要な授業、教員だけでなく、よりよい授業、教育の質を担保していくためにも、「教育改善計画書」（危機管理学部・スポーツ科学部）を一般化し、全学で取り組んでいくことを検討していくべきである。

6. 「学生による授業評価アンケート結果」に対する教員の意識調査などの実施の有無及びその実施内容

「集計結果の活用方法」に記載のとおり、いくつかの学部においては、教員が授業評価アンケート結果を受けて、授業改善計画書等を作成している。また、芸術学部では、令和3年度の授業評価アンケート実施方法に対する意見等について、FDセミナー終了後に教員にアンケートを実施した。このように、教員が授業評価アンケート結果を振り返ることによって、自身の授業改善に役立ててくることに加え、更には大学全体の教育の質向上につながる事が期待される。

7. 全学共通統一調査項目に対する意見

現在、全学FD委員会調査・分析ワーキンググループにおいて、全学共通統一調査項目の内容の見直しについて検討している。ワーキングメンバー及び各学部からの意見は以下のとおり。

- ・コロナ禍におけるオンライン授業の実施により、学生が回答できない設問項目（図書館の利用目的・学生間で共に学修したのか等）の見直しが必要。
- ・設問の主語や対象が分かりにくい（学生又は教員のどちらに対してなのか）。
- ・5段階の選択肢（強く思う～全く思わない）だと回答しにくい設問があるので、選択肢の修正が必要。

（2）大学院研究科

大学院研究科におけるFD等教育開発・改善活動に関する調査は、平成23年度より毎年実施しているものであり、今回で10回目となる。今年度の調査は、19研究科に依頼し、すべての研究科より回答を得た。

調査項目に関しては、今年度より既に改善への取組がなされ定着している項目については排除をし、新たに博士後期課程を対象とした「プレFD」を追加した。

I. 大学院に係るFD等教育開発・改善活動推進組織

大学院に係るFD等教育開発・改善活動推進組織を有しているのは、10研究科、学部等の組織と合同が9研究科であった。今後、組織的な取組みができるような体制づくりが望まれる。

II. 大学院に係る組織的なFD等教育開発・改善活動

「①研究科単独でFD等教育開発・改善活動を報告する仕組みとその内容の教職員及び学生への開示」に関する設問は、【現在実施している】と回答した研究科が14、検討中が5と比較的良好であった。「②研究科単独で学外研修会等への参加及び講師派遣を推進する仕組みとその活動実績」についての設問では、実施しているのは、1研究科のみで、多数の研究科で【検討段階】や【実績なし】であった。「③研究科単独で学内における講演会、セミナー、シンポジウム等への参加を図る仕組みとその活動実績」に関する設問では、【現在実施している】は、半数以下の8研究科にとどまっており、今後も改善が必要とされる。「④研究科単独で教員を対象としたFD等教育開発・改善活動に関わるアンケートの実施」に関する設問では、5研究科を除き、実施していない研究科が大半をしめていることからこちらも今後の改善が必要である。「⑤博士後期課程

の学生を対象とした、学識を教授するために必要な能力を培うための機会（いわゆる「FD プレ」。）の設定又は当該機会に関する情報提供」に関する設問では、実施しているのは5研究科のみで、大半の研究科が実施に至っていない。なお、実施していると回答した研究科は、いずれも共通してJPFFのプログラムを行っている。「⑥プレFDを目的とした私立大学FD連携フォーラム・実践的FDプログラム（オンデマンド講義）の組織的活用」に関する設問では、【現在実施している】は12研究科で、6研究科では活用されていない。なお、1研究科では、該当なしであった。「⑦研究科単独で担当教員以外の第三者によるシラバスを確認する仕組みとその活動実績」に関する設問では、【現在実施している】のは10研究科で、昨年度と同様であった。

Ⅲ. 大学院学生に対する『学位の質保証』に係る組織的な取組み

「①大学院のグローバル化に対応するための取組み（基礎語学力向上への取組み、外国語による授業科目の設置、学位論文の外国語による作成、外国語による学位論文の審査や発表等）」に関しては、【現在実施している】が13研究科で、昨年度よりも2研究科減少している。「②研究テーマや研究方法、詳細な工程等を記載した研究計画の作成や学生と教員との間で学位授与に必要なプロセスの共有」の設問では、【現在実施している】と【現在実施しているが改善を検討】を合わせると、15研究科であり、昨年度と比較してやや改善への取組みが進んでいる。「③複数の指導教員や異なる専攻の教員、学外審査員を加えた論文指導体制の構築」「④研究の進捗状況や理解度等を適切に把握するための中間発表やそれに順ずる仕組みの整備」の設問では、【現在実施している】とは、③では17研究科とやや改善したが、④は16研究科と昨年度より1研究科減少している。「⑤学生のキャリアを見据えた組織的な研究体制の実施」に関しては、3研究科を除き、ほとんどの研究科において実施されていない。

Ⅳ. 大学院学生による授業評価アンケートの実施

令和2年度後学期と令和3年度前学期において授業評価アンケートについて博士前期課程（又は修士課程・専門職学位課程）課程で実施されたのは、11研究科、博士後期課程（又は博士課程）で実施されたのは、8研究科であった。少人数による授業が多いため、学部と比較して実施が増えない状況にある。

Ⅴ. 資料提供

資料の提供については、前年度と同様に、「学内利用のみ公開可能」とするものが多い。なお、今年度は、スプレッドシートを使っての情報収集を行い、学部間での情報共有をやすく工夫を凝らしている。

1-② 学生による授業評価アンケート結果の全学的な活用に係る諸検討

（1）全学的な調査項目に関する改善について

授業評価アンケートの際に使う全学共通統一項目の見直しを行うにあたり、見直しに関する指摘があった項目のみではなく、様々な意見を勘案し全体的な直しを行った。これまでに全学共通調査項目は7項目あり、その中のいくつかの項目ではその設問の意図が曖昧であり、また一部の学部等にしか当てはまらない設問であることから設問の表記を含め5項目で見直しを行った。

授業評価アンケート結果の全学的な活用が、日本大学教育状況調査票（仮称）と結びつく場合には、アンケートを通じて算出されるポイントが教員評価に直結する可能性があるため、学部や授業の違いによってポイントに大きな差が出ないようにする配慮が必要がある。この点はさらに引き続き検討する必要がある。

（２）全学的な調査項目に限らない各学部の調査結果の（教員、学生などへの）公表方法及び活用方法等の検討について

日本大学は、16 学部及び通信教育部、短期大学部を要する総合大学であり、各学部での授業評価の状況が多様であるために、学部間での比較から、学部ごとの時間的な変化を見ることが出来るように、棒グラフでの比較表に変更し、2 年目となった。今年度は、オンライン講義となり2 年目となったことから、その変化を確認することが出来るようになった。そのような数値は、教職員、学生と合わせて学部のウェブサイトで公開し、広く共有している学部も増加してきている。また、自由記述欄の記載も含めて、学部の FD 委員会で分析を行い、改善が必要とされる授業や教員に対して介入するだけでなく、全教員に対して、「授業準備プロセス」、「授業運営プロセス」、「授業成果検証プロセス」の改善の方向性を明記した「教育改善計画書」の作成と提出を通じて、持続的に改善ができる組織体系を整えている事例も報告されてきている。FD 委員会調査分析ワーキングでは、このような事例を踏まえて、一層、全学・または各学部での利用が促進できるように、「全学共通統一調査項目」の見直しを検討するとともに、分析結果の一層の効果的な活用に関して議論を行うとともに、今後の方向性を検討した。

1-③ 教員の教育業績評価方法等に係る諸検討

ティーチングポートフォリオの導入の検討について（「成果」項目以外の検討）

令和3 年度は前年度から引き続いたコロナ禍で、すべての教員はオンライン講義等の対応を求められた。ティーチングポートフォリオについては、各学部での導入についての具体的な検討の予定であったが、様々な特性を持った各学部教育を統一した項目で教育業績評価するのは困難であり、現在の様式での検討を継続することが難しいと考えられた。令和4 年度は、新たに各学部の特性を考慮に入れた教育業績評価方法の導入を視野に入れて、検討する必要があると考えられた。

2 FD 推進センター基本計画（中期計画）を踏まえた調査・分析ワーキンググループとしての総括

令和3 年度は、FD 推進センターの新たな中期計画3 カ年（令和3 年度～令和5 年度）の初年度である。取組2 に掲げた「教員の教育研究活動等の自己点検・評価の実施による資質向上の推進」に関連する、学生による授業評価アンケートに係る調査項目等の検討を行った。全学統一調査項目に関して調査結果のデータ分析を行い、調査7 項目の内、設問の表記を含め5 項目を見直した。アンケート結果は、ウェブサイトで公開し、広く共有している学部が増加している。また教員の多くは、授業評価アンケートの集計結果並びに同アンケートの自由記述欄に記載されている学生からの意見に対し、授業改善に向けてのコメントをフィードバックしている。自由記述欄の記載

に関して、学部 FD 委員会等で分析を行い、授業改善の方向性を明記した「教育改善計画書」の作成と提出を通じて、持続的に改善ができる組織体系を整えている事例についての報告もあった。これらを踏まえ、ティーチング・ポートフォリオ（仮称：教育状況調査票）の在り方について、再確認した。並行して、アンケート自由記述欄に対する評価・分析についても今後検討を進めていきたい。

学部、短期大学部及び大学院を対象とした「FD 等教育開発・改善活動に関する調査」は、従来から実施されてきた活動で、FD 活動の改善を目的とした、進捗状況や経年変化、優れた取組や問題点を把握し全学的な情報共有を行っている。令和 3 年度、学部・短期大学部に関しては、設問を精査し、見直しをおこなった。多数の学部で授業評価アンケートや学修満足度向上調査による学生からの意見聴取とフィードバック、集計結果は学部ホームページ等で公開されている。大学院については、今年度より既に改善への取組がなされ定着している項目については排除をし、新たに博士後期課程を対象とした「プレ FD」に関する項目を追加した。

コロナ禍において普及した ICT の利活用に関しては、単なる学生アンケートの実施や分析に留まらず、調査・分析ワーキンググループの運用においても浸透している。Zoom を利用したワーキングの開催は日常となり、以前は各部科校からの報告の際に、Excel 形式の調査票及び補足資料を学務課宛てにメールにて提供いただいていたが、資料提供の簡略化や集計作業の効率化を鑑み、今年度からは Google フォームで回答することとした。提供を受けた資料は Google ドライブ上に自動的に格納され、日本大学のアカウントを取得している学内者であれば、リンクから閲覧が可能となるので、これによりデータ共有の利便性が高まった。

以 上

令和3年度

プログラムワーキンググループ活動報告



日本大学FD推進センター

〔全学FD委員会プログラムワーキンググループ〕

プログラムワーキンググループに係る令和3年度における活動内容及び総括は、FD推進センター基本計画（中期計画）並びに令和3年度活動計画に基づき、次のとおりである。

- | |
|--|
| 1 令和3年度活動計画 |
| ① 全学FDワークショップの企画・開催 |
| ② 新任教員を対象としたFDプログラムの検討及び企画・開催 |
| ③ 令和3年度 日本大学 学生FD CHAmiT の企画・開催 |
| ④ 日本大学FDシンポジウムの企画・開催に向けた検討 |
| ⑤ 学部へのFD 支援について（JPPF オンデマンドコンテンツ・Zoom トレーニング・著作権セミナー等） |
| 2 FD推進センター基本計画（中期計画）を踏まえたプログラムワーキンググループとしての総括 |

1-① 全学FDワークショップの企画・開催

各部科校において教育開発や授業改善に対する意識を涵養し、主体的にFD活動ができる優秀な人材を養成する目的で平成25年度より全学FDワークショップが開催され、今年度で9年目を迎えた。その間、カリキュラムプランニングを通じて教育分野の基本的概念や教授手法について学部を超えた積極的なディスカッションが行われ、実践的な教育改善に取り組むことが出来る人材「ファカルティ・ディベロッパー（FDer）」を多数育成してきた。

令和2年度の全学FDワークショップはコロナ禍のため中止したが、今年度は対面での開催に向けて準備を進めていた。しかし、緊急事態宣言が発出されたため、オンラインでの開催を検討した。スタッフのオンラインに対する知識やスキルのアップ、機器の充実化などを鑑み、手探りではあるがZoomを利用したオンライン形式で開催する運びとなった。ただし、企画・運営スタッフとタスクフォースは円滑な運用を行うために日本大学会館に集合した。実施内容は対面開催をしていた令和元年度と同内容で実施した。

・テーマ

「大学教育における課題の解決に向けて

—教育能力の開発（Faculty development）を企画・運営できる人材の育成—

・日時

第1回目 令和3年9月2日（木）・3日（金）

第2回目 令和3年9月6日（月）・7日（火）

・会場 日本大学会館2階大講堂（企画・運営スタッフとタスクフォースのみ）

・対象者 日本大学全学部教職員のうち、以下の条件に該当する者

- ① FD等教育開発を現在担当している、あるいはファカルティ・ディベロッパーとしてFDを企画・運営していくことが見込まれる教員 各学部等から1名
- ② 教員と共に協働し教育能力の開発を企画・運営する職員 各学部等から1名

③ 令和2年度又は令和3年度の新任教員FDワークショップの参加対象者
各学部等から1名（単科の学部・通信教育部・短大各校舎は1名）

・参加者

第1回目 26名（教員19名（新任教員5名），職員7名）

第2回目 22名（教員13名（新任教員6名），職員9名）

・タスクフォース

第1回目 10名

第2回目 6名

・企画運営（全学FD委員会プログラムWG） 8名

・趣旨

全学FDワークショップの趣旨は、良質な人材養成のために、各部科校においてFD等教育開発を担当する教職員が一堂に会し、教育分野における概念や手法を取り込みつつ、ニーズに沿った検討を行い、積極的討議と体験を通して、実践的な教育の在り方を修得し、ファカルティ・ディベロッパー（FDer）として学部等で活躍できる人材を育成することにある。全学FDワークショップは平成25年度より始まり、今回で9年目である。平成27年度（第3回）からは、対象者を教員及び職員として開催している。

・タスクフォースミーティング

第1回タスクフォースミーティング

実施日：令和3年8月2日（月）14：00～18：00

内 容：企画・運営の確認と検討，実施スケジュールの確認，配布資料及びアンケート等の確認と検討，予行演習

会 場：日本大学会館6階601A会議室，予行演習

第2回タスクフォースミーティング

実施日：令和3年8月17日（火）14：00～18：00

内 容：企画・運営の確認と検討，実施スケジュールの確認，配布資料及びアンケート等の確認と検討，予行演習

会 場：日本大学会館6階601A会議室

【第1回令和3年度全学FDワークショップ】

・第1日目 令和3年9月2日（木）

9：30より開会式が行われ，青木義男副学長からご挨拶をいただいた。

9：35より講演1「日本大学の教育と教育改善活動－21世紀に求められている大学のありべき姿と本学の動向」を全学FD委員会プログラムWGリーダーの松戸歯学部・平山聡司教授が講演した。

10：15よりタスクフォースの松戸歯学部・内田貴之准教授がワークショップの進め方を説明した。

10：25よりタスクフォースの歯学部・小泉寛恭准教授が問題点の抽出とKJ法について説明した後，参加者がZoomのブレイクアウトルームの5グループに分かれ，「初年次教育の問題点」というテーマでグループ討議を行った。討議の結果はGoogle Jamboardを用いた。引き続き各グループが発表し，全員で討議を行った。

昼休憩の後，歯学部・小泉寛恭准教授が問題点への対応，二次元展開法について説明し

た後、各グループにおいて「初年次教育の問題点」についてグループ討議で抽出された問題点を Google Jamboard を用いて二次元展開した。引き続き各グループが発表し、全員で討議を行った。

14：40 よりタスクフォースの国際関係学部・小川直人教授が学修目標について説明した後、「コース・ユニットの決定」についてグループ討議し、各グループが発表し、全員で討議を行った。

17：07 より学修目標の修正についてグループ討議し、第2日目の学修目標の修正②に向けた指摘事項等の確認を行い、1日目の作業を終了とした。

17：20 より第1日目の評価のアンケート及び集計が行われた。

・第2日目 令和3年9月3日（金）

9：00 よりタスクフォースの松戸歯学部・内田貴之准教授が第1日目の振り返りを行い、その後、各グループで1日目に引き続き、学修目標の修正を行った。

9：40 よりタスクフォースの医学部・日臺智明教授が学修方略について説明し、その後、各グループで討議が行われ、各グループの発表・全員での討議が行われた。

昼休憩の後、13：45 よりプログラム WG の短期大学部・酒匂教明教授がプレ評価演習を行い、引き続き、学修評価について説明した。その後、各グループで討議が行われ、各グループの発表・全員での討議が行われた。

17：22 よりポスト評価演習が行われた。

17：41 より講演2「教育憲章の評価比率の検討」をタスクフォースマスターの松戸歯学部・河相安彦教授が講演した。その後、総合ポストアンケートと第2日目の評価を実施し、集計が行われた。

18：19 より全学FD委員会プログラム WG の短期大学部・石川元康准教授が総合プレ・ポストアンケートの概説と第2日目の振り返りを行った。

18：35 より閉会式が行われ、全学FD推進センター副センター長の生産工学部・藤井孝宜教授からご挨拶を頂き閉会した。修了証は後日送付した。

【第2回令和3年度全学FDワークショップ】

・第1日目 令和3年9月6日（木）

9：30 より開会式が行われ、青木義男副学長からご挨拶をいただいた。

9：33 より講演1「日本大学の教育と教育改善活動ー21世紀に求められている大学のありべき姿と本学の動向」を全学FD委員会プログラム WG リーダーの松戸歯学部・平山聡司教授が講演した。

10：09 よりタスクフォースの文理学部・長綱啓典准教授がワークショップの進め方を説明し、10：19 より Zoom のブレイクアウトルームでグループごとに自己紹介を行った。

10：35 よりタスクフォースの工学部・四方潤一教授が問題点の抽出とKJ法について説明した後、参加者が Zoom のブレイクアウトルームの4グループに分かれ、「初年次教育の問題点」というテーマでグループ討議を行った。討議の結果は Google Jamboard を用いた。引き続き各グループが発表し、全員で討議を行った。

昼休憩の後、タスクフォースの工学部・四方潤一教授が問題点への対応、二次元展開法について説明した後、各グループにおいて「初年次教育の問題点」についてグループ討議

で抽出された問題点を Google Jamboard を用いて二次元展開した。引き続き各グループが発表し、全員で討議を行った。

14：25 よりタスクフォースの生物資源科学部・山下正道准教授が学修目標について説明した後、「コース・ユニットの決定」についてグループ討議し、各グループが発表し、全員で討議を行った。

16：44 より、学修目標の修正についてグループ討議し、第2日目の学修目標の修正②に向けた指摘事項等の確認を行い、1日目の作業を終了とした。

17：15 より第1日目の評価のアンケート及び集計が行われた。

・第2日目 令和3年9月7日（金）

9：00 より全学FD委員会プログラムWGの短期大学部・石川元康准教授が第1日目の振り返りを行い、その後、各グループで1日目に引き続き、学修目標の修正を行った。

9：07 よりタスクフォースの法学部・松山博樹准教授が学修方略について説明し、その後、各グループで討議が行われ、各グループの発表・全員での討議が行われた。

昼休憩の後、13：03 より全学FD委員会プログラムWGの芸術学部・畑瀬聡専任講師がブレ評価演習を行い、引き続き、学修評価について説明した。その後、各グループで討議が行われ、各グループの発表・全員での討議が行われた。

16：07 よりポスト評価演習が行われた。

16：25 より講演2「教育憲章の評価比率の検討」をタスクフォースマスターの松戸歯学部・河相安彦教授が講演した。その後、総合ポストアンケートと第2日目の評価を実施し、集計が行われた。

17：15 より短期大学部・石川元康准教授が総合プレ・ポストアンケートの概説と第2日目の振り返りを行った。

17：31 より閉会式が行われ、全学FD推進センター副センター長の生産工学部・藤井孝宜教授からご挨拶を頂き閉会した。修了証は後日送付した。

今年度の全学FDワークショップは初のオンラインでの開催となり、グループ討議はZoomのブレイクアウト機能の利用、グループ討議のプロダクトはGoogle JamboardやExcelワークシートを共有するなど新たなデバイスやその機能を駆使して行った。そのため、第1回目は企画・運営スタッフと参加者の意志疎通がうまく諮れず、運営に遅れが生じたものの、第2回目はその問題点を修正し、ほぼ当初の予定通りの運営となった。

参加者へのアンケート調査の結果、修得度やワークショップ全般の評価に関する内容については、オンラインと対面で大きな差は認められなかった。

「ワークショップの持続」については、「ぜひ必要」と回答した者が半数以上であった。自由記述による所感等では、「他学部の教職員とディスカッションをできて良かった」、「休憩時間がない、又は少ない」、「作業量が多い」、「用語に関する理解が深まった」等の意見が多くあった。

オンライン開催に関して参加者からは、「物理的な移動がないため負担が減った」、「同時に複数人が話せないため、討議時間が足りなくなった」、「発表時間の時間管理を徹底してもらいたい」、「通信環境が悪いと資料や説明が見えづらくなる」等の意見があった。また、

企画・運営スタッフとタスクフォースからは、「オンラインだと討議発表の内容が見やすい」等、オンライン開催に肯定的な意見も挙げられ、今後、オンラインの有効活用を模索すべきと考える。

また、令和3年度全学FDワークショップ@キャンパスについては、商学部と芸術学部での開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を鑑み開催を中止とした。来年度以降は候補学部の状況を見ながら、その学部のニーズに合わせた開催形態を模索し、検討していく。

1-② 新任教員を対象としたFDプログラムの検討及び企画・開催

令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大のため対面開催におけるワークショップを中止し、その代替措置として日本大学VOD及びJPF 実践的FDプログラムによるVODを視聴して報告書を提出する形式で開催したが、令和3年度は事前課題としてオンデマンド教材の視聴と以下の日時及び実施方法で「令和3年度 新任教員FDワークショップ」を開催した。

・日時：令和3年5月15日（土）13時30分～17時00分

・実施方法：Zoomを利用したオンライン開催、Zoomのブレイクアウトルーム、Googleスプレッドシート、Googleドキュメント及びGoogleJamboard等を使用して、グループワークを実施

・実施本部：日本大学会館2階大講堂

・対象者：原則として、令和3年4月1日以降、日本大学に新規に採用された専任教員（学部・大学院・短期大学部教員及び他大学で専任教員だった者も含む）

・参加者：参加対象者139名のうち、16学部、短大、研究科より計125名

本ワークショップの一般目標（GIO）は、「日本大学教育憲章を基軸とした教育を実施するために、全学共通教育と各学部教育の位置づけを理解し、各学部での学部教育のシラバス作成に資する基本的能力を身につける」とした。また、個別行動目標（SB0s）は、1.「日本大学マインド」を説明できる、2.「日本大学教育憲章」の理念を理解する、3. 学部教育のDP、CP、APの各ポリシーを説明できる、4. カリキュラムプランニングの基礎事項について説明できる、5. 履修系統図に沿った教育実践のためのシラバス作成ができるとした。

13:30に開会し、本部学務部・酒井誠吾学務部長より開会の挨拶があった。その後、事前課題動画のチェックテスト、これからのワークショップの流れの説明を行った。14時から歯学部・中島一郎教授の説明・進行によって、「日本大学教育憲章を基軸としたシラバス作成のワークショップ」を実施した。具体的なワーク内容は、初年次の演習科目「国際社会と日本」のコンテンツをグループ内で話し合いながら教育内容の改善も視野に入れて新シラバスのフォーマットに入力するものである。まず、今回のワークショップの趣旨やグループ作業についての説明を30分程度行った後、討議①では12グループに分かれ、「あなた

が思う日本大学とは？」と題して日本大学のイメージに関する意見交換を行った。これは、Google Jamboard を利用して、参加者間のアイスブレイキングを兼ねたワークとして行った。次に、教科「国際社会と日本」の DP、GIO、SBOs 成績評価、準備学習について Google スプレッドシートで作成した新シラバスフォーマットに入力した。討議②では、各グループを更に2班に分けて、A班（各グループの前半：奇数グループ）は第2回～第8回、B班（各グループの後半：偶数グループ）は第9回～第14回の授業内容について入力を行った。討議③では、討議①のグループ編成に戻って新シラバスへ入力した討議②のプロダクトについての発表を行った（発表4分、質問4分）。今回のワークでは、日本大学教育憲章の3要素と8能力を踏まえて、掲示された教科で学生のどのような能力を引き出すのか意見交換（教育目標、教科のアウトカム）すること、教育憲章を踏まえた GIO と SBOs について考えること、教育憲章ルーブリック評価も参考に評価方法を考えることをポイントとしてワークを実施した。最後に、FD推進センター副センター長の生産工学部・藤井孝宜教授による「日本大学の教育と教育改善活動」と題した講演が行われた。ここでは、日本大学におけるFD活動の歴史や取り組み、教育の質保証と授業デザインの重要性について説明されるとともに、閉会の総括が行われ、17時にワークショップは終了した。

ワークショップ終了後の参加者アンケート（参加者125名中116名回答）によると、中島教授の「日本大学教育憲章を基軸としたシラバス作成のワークショップ」の理解度について、全体の87.0%の参加者が理解できたと回答している。また、本ワークショップが自身の授業やFD活動に役立てることができるかという質問に対しては、96.6%が役立てることができるかと回答しており、本ワークショップの目標は概ね達成することができたと思われる。更に、藤井教授の「日本大学の教育と教育改善活動」の理解度についても、94.0%の参加者が理解できたと回答していることから、多くの参加者に理解いただけたワークショップであったことが分かる。ワークショップの時間については、「長い」を1、「短い」を5として5段階での回答結果、1又は2の回答が43.1%であり、ワークショップを長く感じた参加者が多かったようである。2年前（令和元年度）の対面時には約70%がちょうど良い時間であると回答しており、長いと回答したのは約25%程度であったので、オンラインで実施したことが影響している可能性があると考えられる。今後行ってほしいワークショップについては、学部や学科単位でのシラバス作成に関するもの取り扱ってもらいたいや遠隔授業、成績評価、アクティブラーニングの手法等の授業の実施に関するものが多く挙がっていた。本日のワークショップ以前に学部で、教育に関する指導やFDガイダンスがありましたかという質問については、「あった」が51.7%（数値は学部単位ではなく、個人単位で集計した結果）となっており、2年前の「あった」回答が36.8%であったことから、各学部で新任教員に対して指導やガイダンスの実施が増加していることが分かる。最後に、ワークショップに関しての感想については、「ファシリテーターや司会者等の配置をしてもらいたい」「オンラインに不慣れな先生の対応等のサポートを充実してもらいたかった」「FDに対する基本的な説明をしてもらいたい」「シラバスを作るための議論をする

ためには時間が足りなかった」「オンラインでは同時に複数のことが処理できないので難しかった」「事前課題の量が多い」「ワークショップ内容を事前に配布するとグループワークしやすい」「他学部の先生方と交流できて良かった」「オンラインでのワークショップの運営方法等について学ぶことが多かった」「次年度のシラバス作成に役立つ」等があった。今年度は、オンラインへ移行する際にプログラムの見直し等は行ったものの、大幅な変更は難しかったため、対面で行っていた内容をベースに内容を修正して行ったため、オンライン開催に不向きな部分や対応が難しい部分があった。具体的には、オンライン上では複数名が同時に話すことができないことやファシリテーターが多く必要になるという問題が挙げられる。今年度の参加者の意見を参考にして、来年度に向けて開催方法や開催内容の見直しを行い、新任教員の先生方に必要な知識等を届けられるよう、検討を進めていく必要がある。

1-② 令和3年度 日本大学 学生 FD CHAmmit の企画・開催

「令和3年度 日本大学 学生 FD CHAmmit」の開催

- ・日 時：令和3年11月28日（日）
- ・実施本部：日本大学会館2階大講堂，203 会議室，601A 会議室，601B 会議室，903 会議室，904A 会議室
- ・対象者：日本大学全学部全学科の学生・教員・職員の代表
- ・参加者：230名（学生スタッフ48名を含む・申込者は245名）

学生、教員、職員が三位一体となって大学教育を改革・改善していくFDに関連する諸活動のうち、学生が主体となって取り組む「学生FD」の一環として、令和3年11月28日に「令和3年度 日本大学 学生FD CHAmmit」が開催された。平成25年度から始まった学生FD CHAmmitは、今回で9回目となるが、コロナ禍のなか昨年度に続き今年度もZoomを利用してオンラインで実施された。

企画・運営に当たっては、学生スタッフとして、コアスタッフ12名、学生スタッフ39名（各学部等からの推薦枠25名と公募枠14名）が、企画の立案・検討（事前のミーティング・準備等を含む）及び当日の運営（オープニング、エンディング、しゃべり場でのファシリテーター、その他）を担い、全学FD委員会プログラムWGメンバーと本部学務部学務課職員が適宜サポートした。また、当日は、日本大学会館2階大講堂及び2階、6階、9階の会議室に、学生コアスタッフ及びプログラムWGメンバーと学務部学務課職員が集まって運営に注力した。

開催当日までに、学生コアスタッフミーティング3回、学生スタッフミーティング8回（前日準備・リハーサルを含む）が実施された。また今年度は、しゃべり場でのファシリテーションの自主練習も実施された。例年8月に実施されていた学生コアスタッフ合宿は、今年度も取り止めとなった。

続いて、学生FD CHAmmit当日までのミーティングの記録を記す。

○第1回学生スタッフミーティング

実施日：令和3年6月19日（土）13：00～15：00

内 容：顔合わせ，自己紹介，学生FD CHAmiT 概要説明，Jamboardの使い方の説明，諸連絡

会 場：オンライン開催

○第2回学生スタッフミーティング

実施日：令和3年7月3日（土）13：00～15：00

内 容：テーマ説明，しゃべり場実践，諸連絡

会 場：オンライン開催

○第3回学生スタッフミーティング

実施日：令和3年8月21日（土）13：00～15：00

内 容：テーマ説明，しゃべり場実践，諸連絡

会 場：オンライン開催

○第4回学生スタッフミーティング

実施日：令和3年9月11日（土）13：00～15：00

内 容：テーマ説明，しゃべり場実践，諸連絡

会 場：オンライン開催

○第5回学生スタッフミーティング

実施日：令和3年10月9日（土）13：00～15：00

内 容：ファシリテーションマニュアルの読み合わせ・質問と回答，しゃべり場実践，諸連絡

会 場：オンライン開催

○第6回学生スタッフミーティング

実施日：令和3年10月23日（土）13：00～15：00

内 容：ファシリテーションマニュアルの読み合わせ・質問と回答，しゃべり場実践，諸連絡

会 場：オンライン開催

○第7回学生スタッフミーティング

実施日：令和3年11月6日（土）13：00～15：00

内 容：ファシリテーションマニュアルの読み合わせ・質問と回答，しゃべり場実践，諸連絡

会 場：オンライン開催

○第8回学生スタッフミーティング／前日リハーサル

実施日：令和3年11月27日（土）10：00～17：50

内 容：会場設営，機材等の最終確認，ファシリテーションマニュアルの最終確認，当日の流れの確認，企画(オープニング，エンディング)のリハーサル，質問受付

会 場：学生スタッフはオンライン参加，コアスタッフは日本大学会館2階大講堂，203会議室，601A会議室，601B会議室，903会議室，904A会議室

○「令和3年度 日本大学 学生FD CHAmiT」開催

実施日：令和3年11月28日（日）13：00～16：30

会 場：オンライン開催

実施本部：日本大学会館2階大講堂，203会議室，601A会議室，601B会議室，903会議室，

テーマ：アフターコロナ～IT化と大学教育～

令和3年11月28日（日）に、「令和3年度 日本大学 学生FD CHAmiT」が開催された。今回は、「アフターコロナ～IT化と大学教育～」をテーマとし、昨年度の学生FD CHAmiTで作成し所属学部へ提案した遠隔授業への要望(学部提案書)に対する学部の対応(改善報告書)を検証し、コロナ禍が収束した後の対面形式を中心とした授業にも遠隔授業で培ったスキルを生かしていく術を探索することを目標とした。

平成25年度から始まり9回目の開催となる今回は、昨年度と同様、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から(予定されていた商学部会場での実施を取り止め)オンラインでの開催となった。当日は、10:00に日本大学会館に学生スタッフ(及びプログラムWGメンバーと学務部学務課職員)が集まって準備を進め、13:00からZoomを利用したオンライン形式で学生FD CHAmiTが実施された。オープニングでは、学生コアスタッフの古家凌成氏(商学部4年)と曾山はるか氏(生物資源科学部2年)による司会進行で、日本大学FD推進センター長・副学長青木義男教授による開会挨拶、学生コアスタッフ・キャプテン竹田蘭丸氏(国際関係学部2年)の挨拶、参加者全員による参加している場所についてのZoom投票、参加者代表の藤井孝宜教授(FD推進センター副センター長)と藤原歩美氏(法学部1年)との対話が行われた。オープニングの最後には、学生コアスタッフの柴田大輝氏(生物資源科学部2年)により、FD及び学生FD CHAmiTについての説明、そして今回のテーマとスケジュール、各セッションで話し合う内容とGoogle Jamboardの使い方の説明、諸注意が行われた。

オープニング終了後、13:30からZoomのブレイクアウトルーム機能を使って、「セッション1」が実施された。セッション1では、学生・教員・職員が学部混合で36グループに分かれて、アイスブレイクを実施し各グループ内で自己紹介等を行った。続いて、「キャンパスライフのメリット・デメリット」について話し合い、出てきた意見をGoogle Jamboard上に書き込み、グループ内の意見を集約した。なお、各グループには1名ずつファシリテーター(学生スタッフが担当)が配置され、しゃべり場のスムーズな進行とJamboardの利用方法の支援を行った。

14:10から、セッション1と同様にZoomのブレイクアウトルーム機能を使って、今度は学部ごとに編成された(学生・教員・職員混合の)36グループに分かれて、セッション2「アフターコロナの日大の教育」が実施された。ここでは、昨年度の学生FD CHAmiTで作成された「学部提案書」を受けて各学部で作成された「改善報告書」の検証を行った上で、新たな課題を洗い出し、それらの課題やその解決方法をJamboard上に書き出した。その際、セッション1で示されたキャンパスライフのメリット・デメリットを、セッション2のグループでも共有し、話し合いに生かした。

10分間の休憩をはさみ15:20から、セッション2と同じ(学部ごとの)36グループに分かれて、セッション3「IT化と大学教育～学部への提案～」が実施された。ここでは、参加者がセッション2に続いて、来年度以降対面授業が再開された後も、この2年間で蓄積された遠隔授業のスキルや利点(対面授業よりも優れていると思われる事柄)のうち、継承していくことができるものや、日本大学の授業で具体的にIT化していくべきことについて話し合い、Jamboard上で今年度版の学部提案書をまとめ上げた。今年度の学部提案書

は、①昨年度提案書の状況（現状の整理）、②新たな課題、③「IT化と大学教育」に向けての課題、以上三項目から成る。

16:05 から、(オープニングと同じ) 学生コアスタッフ 2 名の司会進行でエンディングが行われた。エンディングでは、今回の学生 FD CHAmiT の成果である学部提案書について、最初に中澤駿之介氏（危機管理学部 3 年）、続いて理工学部ファシリテーター担当落合凌也氏（経済学部 4 年）、最後に岩崎ほの華氏（生物資源科学部 3 年）による発表がなされた。続いて全学 FD 委員会プログラムワーキンググループリーダー平山聡司教授（松戸歯学部）による講評、最後に学生 FD CHAmiT コアスタッフ・キャプテン土屋怜王氏（経済学部 2 年）による閉会の挨拶があり、写真撮影の後、令和 3 年度 日本大学 学生 FD CHAmiT を閉会した。閉会后、参加者アンケートが実施された。

今回の学生 FD CHAmiT は、コロナ禍が続くなか、昨年度と同様にオンラインで開催された。二度目のオンライン開催であったため昨年度の経験を生かすことができ、重大な問題が発生することもなく、すべての企画が円滑に進行し終了した。昨年度の学生 FD CHAmiT では、その成果が「学部提案書」の形にまとめられ、今年度になって各学部ではその提案書に記された要望・提案に対応して「改善報告書」を作成した。今年度の学生 FD CHAmiT は、各学部で作成された改善報告書の検証を行ったため、ファシリテーターは昨年度作成された「学部提案書」及び今年度作成された「改善報告書」について事前に十分理解しておく必要があった。又はシリテーターには、セッション 2 とセッション 3 という短い時間のなかで、改善報告書の検証と、それを踏まえた（昨年度実現されていることは除いた）新たな学部提案書をまとめ上げることが要求された。ファシリテーターはいずれも、事前によく準備し、当日は手際よく学部提案書の作成を導いていたと思われる。各学部では、今回示された学部提案書に耳を傾け、来年度対面式授業中心の時間割編成となったとしても、2 年間の遠隔授業で得たスキルや利点を継承していくことが肝要であろう。

1-④ 日本大学FDシンポジウムの企画・開催に向けた検討

令和 2 年度は、新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言の発出などの社会状況を考慮し開催時期を模索してきたが、結果的に年度内開催が困難であったが、令和 3 年度は、合計 3 回の FD シンポジウムを企画・開催することができた。

第 1 回開催は、基本的に令和 2 年度の開催予定企画を踏襲し、大学改革の可能性を検討することを主題に掲げ、「学生調査」を活用した「内部質保証システム」の確立に向かって求められていることを共有できるよう企画した。更に、本学が蓄積している「学修満足度向上調査」を活用した各部科校の改革の取り組みについて、その代表的な事例発表を通して、本学の内部質保証の実質化を図るため、内部質保証と教学 IR に関する理解を深め、その推進を図るシンポジウムとなった。

第 2 回開催は、オンライン授業の実施にあたって、学生の学修意欲を高め、学修者本位の授業を実践するために、その助けとなるオンラインツールと活用事例を紹介する企画となった。

第 3 回開催は、オンライン授業の一事例として、テレビ会議システムを利用して、同じ内容の授業を対面とリアルタイムで同時に行うハイフレックス型授業の紹介を行い、授業実

施方法の共有を図ることを目的とした。

開催方法については、新型コロナウイルス感染収束が見込めない中でオンライン・ライブ方式による開催を検討・実施し、一定の成果が得られた。

【第1回日本大学FDシンポジウム】

実施日：令和3年6月26日(土)，13時～15時30分

テーマ：「学生調査に学ぶ教学IRの活用と本学の内部質保証体制」

講演者：学務部大学評価室 友寄秀俊特命課長

独立行政法人大学改革支援・学位授与機構研究開発部 渋井進教授

芸術学部 吉野大輔教授・理工学部 中村文紀准教授

開催方式：オンライン形式（Zoom ウェビナー方式，配信場所：日本大学会館大講堂）

なお、録画した動画を各学部教務課に配信し、FD及びSD活動の一環として活用した。

参加対象者：日本大学の教職員（非常勤を含む）

参加者数：369名

実施プログラム：法学部臼井哲也教授の司会進行によりシンポジウムを開始した。

13:00 から全学FD推進センター長である本田和也副学長から挨拶があった。

13:05 から「日本大学の内部質保証体制」について友寄秀俊特命課長から講演があった。

13:30 から「学生調査と大学評価」をテーマに渋井進教授から講演があった。

14:20 から「本学における学修満足度向上調査解析の事例紹介」として吉野大輔教授と中村文紀准教授から解析事例について講演があった。

15:05 から、全学FD委員会プログラムワーキンググループの松戸歯学部 平山聡司教授の進行で渋井進教授、吉野大輔教授及び中村文紀准教授をパネリストとしてパネルディスカッション形式での質疑応答が行われた。

15:25 から全学FD推進センター副センター長である生産工学部 藤井孝宜教授から閉会の挨拶があった。

アンケート調査（回答者269名，回答率72.9%）結果について。

・「日本大学の内部質保証体制」や「学生調査と大学評価」の講演は約95%が理解できたと回答していた。

参加者の感想として、

・「調査結果を如何に学生への教育に活かし真の意味で活用しPDCAサイクルとして動かしていけるかについて更に理解を深めることができました。」

・「最後の「パネルディスカッション」で日本における大学評価が「水準」というより「状態」という話を伺って、合点がいきました。また、学生調査は学部間で評価することにあまり意味が無いという趣旨のお話はその通りだと思いました。しかしながら、この大きな日本大学の学生数のデータ傾向を見ることは、これだけでも考えさせられる貴重なものであると一方では思いました。」

更に「本学における学修満足度向上調査解析の事例紹介」に関する2つの講演については約97%の参加者が参考になったと回答した。

参加者の感想として、

・「不本意入学者が少ないという母集団の一部の特性にも配慮した上で、比較分析されていたために、全体的にわかりやすかったと感じている。学習したことへの充実感や納得度と社会への貢献についての相関関係が必ずしも大きくないという点は興味深かった。」

・「最後のディスカッションでお話しされました自由記述欄における厳しい意見の取り扱いとその意見をどう大学運営に活かすかという問題は特に印象的でした。今後の大学運営についてはこうした厳しい意見を積極的に活かさなければならいため、しっかりと向き合う必要があることを認識しました。」

以上のアンケート結果から、今後のFD・SD活動に有効な情報の共有が出来たと評価される。

【第2回 日本大学FDシンポジウム】

実施日：令和3年9月28日(火) 18時00分～19時10分

テーマ：「オンラインツールの活用事例」

講演者：芸術学部 山本守和教授

理工学部 長谷部寛准教授・理工学部 山口 健准教授

実施方法：オンライン形式(Zoom, 配信場所:日本大学会館大講堂)

なお、当日の様子は、オンデマンド化し日本大学FD推進センターのオンデマンドサイトに掲載しFD及びSD活動の一環として活用した。

対象対象者：日本大学の教職員(非常勤を含む)

参加者数：150名

実施プログラム：全学FD委員会プログラムワーキンググループリーダー松戸歯学部 平山聡司教授の司会進行で行われた。

18:05からオンラインツールの活用事例として、「Google Classroom の使用方法と授業紹介」～基礎から応用～について山本守和教授より講演があった。

18:30から「クロマキー合成を使った授業紹介とその使い方」をテーマに長谷部寛准教授と山口健准教授から講演があった。

19:05から日本大学FD推進センター副センター長、生産工学部 藤井孝宜教授から閉会の挨拶があった。

終了後に Google Form で質問を受付けて6人の参加者から質問があり、後日回答した。

【第3回日本大学FDシンポジウム】

実施日：令和4年3月16日(水) 18時00分～19時30分

テーマ：「ハイフレックス型の授業紹介」

講演者：文理学部情報科学科 北原鉄朗教授

生産工学部創生デザイン学科 鳥居塚崇教授

実施方法：オンライン形式(Zoom, 配信場所:日本大学会館大講堂)

対象者：日本大学の教職員(非常勤を含む)

参加者数：260名

実施プログラム：全学FD委員会プログラムワーキンググループリーダー松戸歯学部 平山聡司教授の予定であったが、代わりにプログラムワーキンググループメンバー学務課 緑川宗久課長補佐が司会進行を担当し、シンポジウムを開始した。

18:03 からハイフレックス授業例として、「ハイフレックス授業のススメ」と題し、文理学部情報科学科 北原鉄朗教授から講演があった。

18:33 からハイフレックス授業例として「ハイフレックス授業に挑戦」と題し、生産工学部創生デザイン学科 鳥居塚崇教授から講演があった。

19:07 から講演者2名に対するパネルディスカッションを行い、参加者から事前又は講演中に質問のあった7問に対するコメントを発表した。

19:32 から日本大学FD推進センター副センター長、生産工学部 藤井孝宜教授から閉会の挨拶があった。

アンケート調査をシンポジウム終了後に Google Forms でアンケートを実施し、106名(回答率：41%)から回答があった。

講演に対する理解度では、両名の講演に対し、95%以上が概ね理解できているとの回答であった。個人の感想では、「Comment Screen や Spatial Chat などの様々なツールを授業で活用されていて参考になった。」「ハイフレックス授業でのマイクをオンラインと対面の双方に発信する際の方法が理解できた。」また、「Miro というアプリケーションを初めて知ることができた。」「機材のセッティングから具体的に紹介していただいて、実際のイメージが持つことができたので、授業でもチャレンジしたい。」「個人というよりも、学科など組織的に取り組んでいる点が参考になった。」などの感想があった。

今年度の日本大学FDシンポジウムは、新型コロナ禍が収束しない中で初のオンライン開催となった。オンライン開催ということで第1回FDシンポジウムは、「教学 IR の活用と内部質保証」といったタイムリーなテーマを掲げたこともあり、参加者数は369名に達した。アンケート調査結果から参加者の満足度は極めて高く、教職員の意識と知識の向上に効果的なシンポジウムであった。更に、今年度3回実施したシンポジウムがオンデマンド化されて、各部科校のFD研修に使用できるなどのメリットも多い。今後は、オンデマンド化されたシンポジウムをライブラリー化して、新規採用教員の研修教材として活用出来ればと考えている。

令和4年度は、プログラムワーキンググループの中期計画に沿って、今年度実施した「学生調査に学ぶ教学 IR の活用」を更に深化させるために、各部科校が抱える教学に関する諸

課題の共有とその解決への方策について企画していく。更に、ハイフレックス型授業が継続する新型コロナ禍に於いて、教育改善を担う教職員の新しい教育手法やコンテンツを提供できる企画・検討を行っていく。

1-⑤ 学部へのFD 支援について(JPFF オンデマンドコンテンツ・Zoomトレーニング・著作権セミナー等)

令和3年度プログラムワーキンググループ活動計画として、学部へのFD支援がある。以下のとおり、各支援コンテンツについて報告する。

(1) 「全国私立大学FD連携フォーラム (JPFF) 「実践的FDプログラム・オンデマンド講義サービス」の活用

平成25年度から本大学が全国私立大学FD連携フォーラムに加盟したことに伴い、全部科校において「実践的FDプログラム」を利用している。令和元年度から新規採用教員及び非常勤講師を対象に動画による研修プログラムとして、視聴を周知することにより、全学的に活用が促進されている。また、大学院設置基準の改正に伴い、大学院生を対象としたいいわゆる「プレFD」が努力義務化されたため、令和3年度後学期から、プレFDを目的とした博士課程及び博士後期課程に在籍する大学院生が受講対象として加わった。今後は、各研究科においてFD研修等で活用を促進するよう、プレFD用のカリキュラム・マップ等の作成を検討していきたい。

(2) Zoom 社における日本大学限定トレーニング企画・開催

令和2年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴いオンライン授業へのニーズが急速に高まり広く展開される中で、今後の本学の授業方法のあり方や授業方法の改善等についての方向性を明確にすることが求められている。学内における情報共有と授業手法の改善等を図るため、以下のとおり Zoom 社における限定トレーニングを実施した。

回数	日時/内容	申込者数	参加者数
第1回	令和3年9月8日開催 「初級編」～復習編～	378名	266名
第2回	令和3年9月10日開催 「新機能の総まとめ及びQ&A」	388名	243名
第3回	令和3年9月15日開催 「応用編」～復習編～	Zoom社主催のパブリックトレーニングのため、カウントなし	
第4回	令和3年10月8日開催 「レポート機能解説編」	272名	149名
第5回	令和4年3月1日開催 「新機能解説及びwith コロナ・after コロナに向けたハイフレックス授業等のヒントを探る回」	376名	220名

(3) 著作権セミナー企画・開催

令和2年度から授業目的公衆送信補償金制度の運用が開始されたことに伴い、各教職員が著作権を理解した上で、適切に授業運営を行うことが強く求められている。授業目的公衆送信補償金制度の理解を中心として、著作権に対する知識を深めることにより、授業改善を図ることを目的として開催した。講演内容は以下のとおり。

- ・講演者：法学部経営法学科 加藤 浩 教授
法学部経営法学科 齋藤 崇 助教

- ・開催方式：Zoom を利用したオンライン形式

なお、録画した動画を各学部教務課に配信しFD活動の一環として活用した。

- ・参加対象者：日本大学の教職員(非常勤を含む)

回数	日時/内容	申込者数	参加者数
第1回	令和3年11月20日開催 「学校教育と著作権 ～授業目的公衆送信補償金制度の理解を中心に～」	482名	332名
第2回	令和4年2月28日開催 「著作物の引用方法について」	539名	446名
第3回	令和4年3月9日開催 「動画・図表・音楽等の著作物の取扱いについて」	511名	420名
第4回	令和4年3月18日開催 「著作物を利用した資料配布について」	558名	394名

(4) FD推進センターオンデマンド配信サイトの公開について

これまでにFD推進センターで開催された各種イベントの講演動画等をアーカイブしたサイトを「事務の友」において公開した。このサイトは、Google のアプリケーションを利用し、NU-Mail を所有している教職員のみが視聴できる設定を組んでいるため、視聴の際は、NU-Apps へのログインが完了していることが必須となる。そのため、NU-Mail を付与されていない非常勤講師においては、申請フォームに視聴を希望する動画を申し込むこととしている。これまでに、多数の教職員がFD推進センターオンデマンド配信サイトの動画を視聴していることから、ニーズにマッチしていることが窺える。今後は配信動画を充実させ、視聴しやすいサイト作りを検討していきたい。

2 FD推進センター基本計画（中期計画）を踏まえたプログラムワーキンググループとしての総括

プログラムワーキンググループでは、FD推進センター基本計画（中期計画）と令和3年度活動計画に基づいてワークショップ等のFD活動推進イベントを企画・実施してきた。総括としてその概要と令和4年度に向けた取り組みについて報告する。

1-① 令和3年度全学FDワークショップの企画・開催

(1) 全学FDワークショップの企画・開催

令和3年度全学FDワークショップ

今年度は全学FDワークショップの対面開催に向けて準備をしていたが、緊急事態宣言が発出されたため、Zoomを利用したオンライン形式で実施した。まず開催にあたり、タスクフォースを大幅に入れ替え、次代を担う若手教員にその運営に携わってもらうことになった。新たなタスクフォースの面々は、FD活動に対する意識は高く、オンラインで行われた2回のタスクフォースミーティングにおける理解度や連携もスムーズに取ることができた。しかし、初のオンライン開催ということもあり、第1回目開催では、Zoomのブレイクアウト機能を利用したグループ討議で参加者間の意思疎通が上手くいかなかったことや運営面で大幅な時間の延長が生じてしまった。一方でグループ討議のプロダクト作成は、Google JamboardやExcelワークシートを共有するなど新たなデバイスの機能を駆使して行い、使用に不慣れな参加者がみられたものの概ね良好な結果を得ることができた。更に発表についてもモニターを通して内容が確認しやすいという利点も見られた。第2回目開催ではアイスブレイクの在り方を見直して参加者の意思疎通を図ることができたことや参加人数が少なかったことから、ほぼ時間通りに運営することができた。この第2回目の開催規模とスケジュールを参考に来年度以降の全学FDワークショップを企画していく必要がある。

また、初のオンライン開催参加者のアンケート調査結果から、その修得度やワークショップ全般に対する評価は、平成30年開催の対面参加者の結果と比べて大きな差は認められなかった。オンライン開催については改善すべき点が多々あるが、参加者の移動などを考慮すると来年度以降もオンライン開催を検討する必要がある。

更に令和4年度は全学FDワークショップの進化系として、「アウトカム基盤型」カリキュラムプランニングを全学FDワークショップのアドバンスコースとして実施するための具体的な検討を進めなければならない。

(2) 全学FDワークショップ@キャンパス

平成28年度から始まった@キャンパスは、全学FDワークショップに参加者した各部科校のFDerがタスクフォースとしてワークショップを運営することにより、各部科校における新しいFDerの育成を促進する目的で実施されてきた。

令和3年度の@キャンパスについては、商学部と芸術学部での開催を周知していたが、新型コロナウイルス感染拡大の影響もあって両学部での開催は中止となった。令和4年度以降については、各学部独自のFD活動を妨げない範囲で開催を呼び掛けるが、4年に1回は@キャンパスを開催するよう検討していく。

1-② 新任教員を対象としたFDプログラムの検討及び企画・開催

令和3年度は、事前に日本大学VOD及びJPF実践的FDプログラムによるオンデマンド

教材視聴を義務付け、Zoom を利用したオンライン開催としてした。参加者 125 名が 12 グループに分かれ Zoom のブレイクアウトルーム、Google スプレッドシート、Google ドキュメント及び Google Jamboard 等を使用してグループ討議を行った。協議内容として「日本大学教育憲章」を実際の授業において、どのように反映するかをポイントにワークを行った。

終了後のアンケート結果から、概ね参加者の理解度が高かったことが分かった。しかし、グループワークの際、ファシリテーターが配置されていないため、スムーズな討議が出来なかったことや Jamboard やスプレッドシートなどオンラインアイテムの使用に不慣れな参加者への対応が出来なかったことなどが課題となった。

令和 4 年度は、オンライン開催を前提として、ファシリテーターの配置なしでも日本大学の教育やシラバス作成に必要な基本的知識及び日本大学の F D 活動を理解してもらえよう Teaching Guide に沿った講演、グループ討議となるような企画を検討していかなければならない。

1-③ 令和 3 年度 日本大学学生 FD CHAmmit の企画・開催

第 9 回目となる学生 FD CHAmmit は、コロナ禍の中で今年度も Zoom によるオンライン形式で開催された。

今年度のコアスタッフはとても意識が高いメンバー 12 名が集い、この 12 名に学生スタッフ 39 名が参加し、合計 51 名で企画・運営を行った。学生スタッフミーティングは全てオンラインで行ったが、学生メンバーの結束は固く、ファシリテーター育成のために学生スタッフの自発的な行動により個別ミーティングの開催も行われ、周到な準備で当日を迎えることができた。そのような学生スタッフたちの努力もあり、当日の運営は極めて円滑に行われ、オンラインで実施する学生 FD CHAmmit としてはかなり完成度の高い開催になったと強く感じる事ができた。

今回のテーマは「アフターコロナ～IT 化と大学教育～」を掲げて、昨年度各学部から提出された「改善報告書」に対する検証を行い、更なる課題や解決策について学生・教職員が一体となって協議した。最後に学部毎にミーティングが行われ令和 3 年度版「学部提案書」を作成し、新たな課題を明らかにすることができた。

第 10 回を迎える令和 4 年度については、対面開催が望まれるところではあるが出来るだけ多くの学生に集い合う機会を与えるためには、ハイブリッド形式も考えていきたい。また、テーマの設定にあたっては、学生の意向も考慮しながら過去に掲げたテーマを再度議論し合うことも考えていきたい。

1-④ 日本大学 F D シンポジウムの企画・開催に向けた検討

令和 2 年度は未実施となった F D シンポジウムではあったが、令和 3 年度は合計 3 回オンラインで開催することができた。特に第 1 回シンポジウムでは 2 年越しの懸案であった

「学生調査に学ぶ教学 IR の活用」に加えて「日本大学の内部質保証体制」をテーマに加えたこともあり 369 名の参加者によって盛況な F D シンポジウムとなった。

第 2 回及び第 3 回シンポジウムは、対面での講義を模索する中で継続するオンライン授業に活用できるツールの紹介やハイフレックス型の授業紹介など学生にとって魅力のある授業の質的向上を図る企画となった。

令和 4 年度は、その時に適ったテーマを選択し、年に 2 回の実施を企画している。

1-⑤ 学部への F D 支援について (JPFF オンデマンドコンテンツ・Zoom トレーニング・著作権セミナー等)

全国私立大学 F D 連携フォーラム (JPFF) ・実践的 F D プログラム・オンデマンド講義サービスの活用については、各学部の利用状況は増加し活用されている。また、大学院生を対象とした「プレ F D」が努力義務化されたため、プレ F D を目的とした博士課程及び博士後期課程に在籍する大学院生が受講対象として加わった。今後とも更なる活用を図るため、プレ F D 用カリキュラム・マップの作成に取り組んでいく。

令和 2 年度に引き続いて魅力あるオンライン授業手法を学ぶ機会として「Zoom 社による日本大学限定トレーニング」を合計 5 回実施した。新機能が付加される Zoom の操作方法に関する最新の情報共有は教員にとって必要不可欠なものであり、Zoom 社と提携しながら令和 4 年度も随時必要な情報提供を企画・推進していく。また、新入生に対しても Zoom によるオンライン授業のポイントに関するレクチャーも実施する予定である。

令和 2 年度から授業目的公衆送信補償金制度の運用が開始されたことに伴い、各教職員が適切に授業運営を行うことを目的に授業目的公衆送信補償金制度の理解と著作権に対する知識を深めるため「著作権セミナー」を合計 4 回開催した。このような著作権を逸脱しない授業運営の在り方については、教職員にとって不明な点も多く、不安を払拭するセミナーであったと考えている。

F D 推進センターオンデマンド配信サイトの公開は、各種 F D 関連イベントで行われた講演動画を教職員がそれぞれの機会に視聴できることから日本大学の F D 活動の更なる推進に繋がるものと期待している。今後は、どのような F D 活動ではどの動画を視聴すれば良いのか分かるリストの作成を行っていきたい。

以上、F D 推進センター基本計画を踏まえてプログラムワーキンググループの活動を総括した。令和 3 年度を振り返ってみて実感するのは、年々、プログラムワーキンググループの活動内容が発展的に増しているということである。これを建設的に考えると、プログラムワーキンググループの活動が日本大学 F D 推進のエンジンであり、要であるということであろう。多忙な中、奮闘して下さるメンバーに心から感謝すると共に令和 4 年度に向けてより一層のご尽力をお願いする次第である。

以 上

令和3年度

教育情報マネジメントワーキンググループ活動報告



日本大学FD推進センター

[全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループ]

教育情報マネジメントワーキンググループ（以下、WG とする）に係る令和3年度における活動項目は、令和3年度活動計画並びにFD推進センター基本計画（中期計画）に基づき、次のとおりである。

- 1 令和3年度活動計画
 - ① 「日本大学 FD NEWSLETTER」の作成
 - ② 『日本大学FDガイドブック』の成果の測定と改善案の検討
 - ③ 『日本大学FD研究』の編集・刊行
 - ④ 学内外の教育改善に関わる情報の収集と発信
- 2 FD推進センター基本計画（中期計画）を踏まえた教育情報マネジメントワーキンググループとしての総括

1-① 「日本大学 FD NEWSLETTER」の作成

日本大学 FD NEWSLETTER は年2回の発行を行っており、令和2年度までに第18号（令和3年3月1日発行）までを発行してきた。令和3年度は、9月1日に第19号が発行され、令和4年2月1日に第20号が発行されたところである。コロナ禍により、令和2年度に引き続いて令和3年度もオンラインを中心とした授業が各学部で実施されたことから、日本大学 FD NEWSLETTER「第19号」も、昨年度に引き続きオンライン授業に関連する内容のものが多くなった。最初に「第19号」の内容に関しての報告を行う。

FD NEWSLETTER「第19号」では、まず「学生の声を反映した授業改善を各学部で推進」と題して、各学部における取り組みの具体例についての紹介を行った。特に今回は、オンラインによるPBL（Problem-based learning）学習の仕組みを構築した医学部と、CHAmiTを契機に授業改善を行う国際関係学部、理工学部の取組について詳しく紹介した。

医学部では、コロナ禍でも社会で求められる医療人を育成するために、オンラインでいかに質の高い授業を学生に届けるかということに注力していた。そのような中で学生から「少人数でのグループディスカッションをしたい」という声が上がリ、令和2年度の後学期からは、一部の科目でZoomのブレイクアウトルーム機能を用いた双方向授業を取り入れたとのことであった。特にその形式に適していたのが「PBL テュートリアル」という、学生が臨床推論を理解するために、患者のシナリオから鑑別疾患や病態を考えるという授業であり、紙面においてその具体的な紹介がなされた。議論するだけでなく、Google スライドを活用した画像の閲覧と意見交換を実施し、複数人の書き込みがリアルタイムで共有できる特性を生かして、オンラインでも充実したPBLが可能になったとのことであった。医学部の授業改善のポイントとしては、①アンケート結果を授業改善に活かした点、②ヘルプデスクを設置して学生と教員を支援した点、③お薦めの授業動画やアプリをホームページで共有した点などが挙げられ、それらに関しても「第19号」では取り上げている。

また、国際関係学部、理工学部に関しては、CHAmiTの学部提案書をもとに学生との話し合いを実施し、そこから授業や環境改善に取り組んだ両学部の事例紹介を行った。

コロナ禍の影響で、国際関係学部の最大の特徴である留学プログラムの実施が見送られていたことから、学生から単位認定を伴うオンライン留学を実施してほしいという意見が出ているとのことであった。そこで国際関係学部では、提携する大学とのオンライン留学

プログラムを学部のポータルサイト上で掲載したり、今後、単位認定を伴う中・長期留学プログラムの実施を検討して行くといったことを伝えるなど様々な取組を行っているとのことであった。紙面ではそれらの取組を紹介した。

また理工学部では、コロナ禍における学修の不安を解決するよう、双方向授業の環境を整えるといったハード面の充実にとどまらず、学び合いの場を設けて学習意欲を支援するといったソフトの面も充実させるなどの取組を行っており、それらの詳細を紹介することが出来た。

これらの特集記事の他に連載記事となる「部科校における学習支援等の事例紹介」として商学部のオンライン授業受講用の教室開放に関する事例と、同じく連載記事となる「授業改善のためのティーチングティップスの収集と情報提供」として、薬学部における共通ルーブリックを活用した通年教育の取組についての紹介を行った。

また、令和4年2月1日発行のFD NEWSLETTER「第20号」では、まず「日本大学におけるFD活動のミライ」と題して、日本大学FD推進センターの活動紹介を行った。

日本大学FD推進センターは、今年度設置から14年目を迎え、3か年にわたる中期計画を進行しているところである。「第20号」ではまず、藤井孝宣FD推進センター副センター長から現在の活動内容と中期計画について説明していただいた内容を報告するとともに、各WGリーダーと今後の展望について議論を行った座談会の内容についても掲載した（座談会参加者：FD推進センター副センター長・藤井孝宣教授、調査・分析WGリーダー・大貫進一郎教授、プログラムWGリーダー・平山聡司教授、教育情報マネジメントWGグループリーダー・臼井哲也教授）。それらを通して、内部質保証体制と全学的なFD活動の連携強化が重要であるということを紹介することが出来た。

これらの特集記事の他に、連載記事「部科校における学習支援等の事例紹介」として法学部において、学生が自主的な学習を推進するためのラーニング・コモンズ（Learning Commons）が設置されたという事例の紹介と、同じく連載記事「授業改善のためのティーチングティップスの収集と情報提供」として、危機管理学部における成績評価の共通ルーブリック化についての具体的な取組に関しての紹介を行った。

1-② 『日本大学FDガイドブック』の成果の測定と改善案の検討

『日本大学FDガイドブック』は、令和2年4月に内容を全面的に一新する大改訂を行い、『学生と創る授業デザイン Teaching Guide』及び『ミライヲツクル Learning Guide』として発行した。昨年度、実際に使用している学生・教職員などを対象に、両ガイドブックの活用方法とそれらに対するコメント・意見・新たなアイデアを「回答票」にて聴取したが、今年度はそうした意見等も踏まえて、昨年度に引き続き、全面改訂の効果を測定して更なる改善案の検討をした。その上で実際に役立つより有用なガイドブックとするために、両冊子の内容全体を見直し、記事の新規追加や内容の変更などの改訂を行った。

『学生と創る授業デザイン』では、特にコロナ禍により急速に需要が高まったオンライン授業（遠隔授業）についての部分を見直し、「オンライン授業（遠隔授業）の形式」及び「オンライン授業（遠隔授業）で活用するオンラインツール」についての記事を新規に加えた。またIT化の進展による大学における授業形態の変化に鑑みて、「インターネットを利用した授業と著作権」のページも追加した。その他、全学共通教育科目改編に伴う科目名称の

統一やモデルシラバスの差し替えなどに加え、文言の全面的な見直し・修正も施し、全体的により分かり易い表記に改めた。

一方『ミライツクル』においても、オンライン授業（遠隔授業）についての記述を新規に加え、全体の見直しを行った。特にオンライン授業においては、オンライン授業受講の心構えから始まり、オンライン授業の形態やオンラインツールの種類、オンライン授業のマナーなど詳細についても記載した。学部によってオンライン授業の形態が異なるため、全ての学部の学生が分かりやすいような記述とした。また、オンラインの学生生活では必須となるメールについても、メール送信のマナーについても具体的に記載した。

1-③ 『日本大学FD研究』の編集・刊行

令和3年度教育情報マネジメントWG活動計画に基づき、『日本大学FD研究』の原稿募集を行った。幸い多くの投稿をいただき、令和4年1月31日現在で研究論文2編、教育実践研究2編をFD推進センターウェブサイトに掲載することができた。これら計4編に加え、活動報告2編、学生レポート3編をまとめ3月に刊行予定である。著者の所属学部や研究対象も多岐にわたり、多くの学部の教職員の参考となる内容となっている。

今年度多くの投稿があったのは、コロナ禍で昨年度の投稿が少なかったこともあるが、教育情報マネジメントWGメンバーを中心に全学FD委員会及び各学部のFD委員会が所属部科校において教職員に対して投稿募集に努めてきた成果であること、そして『日本大学FD研究』が高等教育実践に関する研究発表の場として学内外での認知が進んだことの表れであると考えられる。

今後は令和2年10月に改訂された掲載原稿の種類が計6種類と様々な形での研究発表を可能としていること、そして受理された論考が刊行前に随時ウェブサイトに掲載されるなど論考処理のスピードの速さを各部科校にアピールすることで、より多くの教職員に多彩な内容の投稿を促していくことが課題となろう。

1-④ 学内外の教育改善に関わる情報の収集と発信

令和2年度に引き続き、令和3年度もオンライン授業への対応が大学全体での最優先課題となった。そこで令和2年度からシリーズで展開している「オンライン授業に関するシンポジウム」や関連する動画等を学内へ適宜配信するとともに、一部はFD推進センターのウェブサイトに掲載し、学部へ向けて情報発信を行った。FD推進センターのウェブサイトには「教職員向けFD活動支援リンク集」を掲載し、教職員のニーズに合わせてFD情報を提供できる体制づくりを行った。また、学生FD CHAmmitに関する情報発信は「ソーシャルメディア」を通じて頻繁に行われ、タイムリーで学生にフレンドリーな情報発信媒体として機能している。

FD推進センターのウェブサイトには、必要な情報を整理し、適宜掲載するという基本作業は継続している。今後も日本大学の教育改善に対する取組を広く社会へ発信するためには、ステークホルダー（学生、保護者、教職員、その他関係者）への効率的な情報発信と情報へのアクセス容易性を整備する必要がある。

2 FD 推進センター基本計画（中期計画）を踏まえた教育情報マネジメントワーキンググループとしての総括

中期計画（令和2年度～5年度）における当 WG の主な活動は、「FD 活動の成果とその充実を支援する情報を収集し、学内外へ効果的に発信」にある。初年度にあたる令和3年度はとくに「ステークホルダー（学生、保護者、教職員、その他関係者）への効果的な情報発信の方法につき、抜本的に検討し、具体策を立案する」を掲げている。そこでこの具体策として、他の WG と連携し、FD 活動の「動画」での配信に着手し、これを手探りではあるが、推進してきた。昨今のデジタル社会のますますの進展に合わせて、情報発信の媒体においても動画を選択することが適切であることが徐々に判明してきている。特に FD 関連の活動は、その対象者（学生、保護者、教職員、その他関係者）によっては、文字媒体のみで内容を伝えることは困難である。動画のようなデジタル媒体を適切に活用し、情報発信を推進していくインフラを整えるため、そのノウハウとスキルを修得する期間として令和3年度は位置付けられる。

これに加え、すでに上記で報告しているように、『日本大学 FD NEWSLETTER』、『日本大学 FD ガイドブック』の部分的改訂、『日本大学 FD 研究』の編集と刊行については、当初計画通りに滞りなく完遂することができた。

コロナ禍の困難な状況が継続しているが、WG メンバーの協力体制と関係諸氏の献身的な御助力により、当 WG メンバーもまた全学 FD 委員会の一員として、十分に貢献できたものとする。

教育情報マネジメント WG に係る令和4年度活動計画は、次のとおりとする。

令和4年度活動計画（案）

- ① 「日本大学 FD NEWSLETTER」の作成
- ② 『日本大学 FD ガイドブック』の成果の測定と改善案の検討
- ③ 『日本大学 FD 研究』の編集・刊行
- ④ 学内外の教育改善に関わる情報の収集と発信

以 上

令和3年度 日本大学FD推進センター活動一覧

日 程	内 容 等
令和3年4月1日(木)	日本大学FDガイドブック2021『ミライツツクル(Learning Guide)』及び『学生と創る授業デザイン(Teaching Guide)』発行
4月14日(水)	新入生のためのZoom特別セミナー
4月19日(月)	第1回全学FD委員会リーダー会議
5月12日(水)	第2回全学FD委員会リーダー会議
5月15日(土)	令和3年度新任教員FDワークショップ@オンライン
5月25日(火)	第1回全学FD委員会
6月5日(土)	第1回学生FD CHAmmiTコアスタッフミーティング
6月19日(土)	第1回学生FD CHAmmiTスタッフミーティング
6月22日(火)	第1回教育情報マネジメントワーキンググループ会議
6月24日(木)	第1回調査・分析ワーキンググループ会議
6月26日(土)	令和3年度第1回FDシンポジウム@オンライン テーマ:「学生調査に学ぶ教学IRの活用と本学の内部質保証体制」
6月28日(月)	第1回プログラムワーキンググループ会議(全学FDWS・シンポジウム偏)
7月3日(土)	第2回学生FD CHAmmiTスタッフミーティング
7月7日(水)	第3回全学FD委員会リーダー会議
7月8日(木)	第2回プログラムワーキンググループ会議(CHAmmit・新任教員FDWS編他)
7月13日(火)	第2回全学FD委員会
7月27日(火)	第2回調査・分析ワーキンググループ会議
8月2日(月)	第1回全学FDワークショップタスクミーティング@オンライン
8月17日(火)	第2回全学FDワークショップタスクミーティング@オンライン
8月21日(土)	第3回学生FD CHAmmiTスタッフミーティング
9月1日(水)	「日本大学FD NEWSLETTER」(第19号)発行 ・学生の声を反映した授業改善を各学部で推進
9月2日(木)	令和3年度全学FDワークショップ@オンライン【第1クール 1日目】
9月3日(金)	令和3年度全学FDワークショップ@オンライン【第1クール 2日目】
9月6日(月)	令和3年度全学FDワークショップ@オンライン【第2クール 1日目】
9月7日(火)	令和3年度全学FDワークショップ@オンライン【第2クール 2日目】
9月8日(水)	第1回Zoomトレーニング 「初級編」～復習編～
9月8日(水)	第3回調査・分析ワーキンググループ会議
9月10日(金)	第2回Zoomトレーニング 「新機能の総まとめ及びQ&A」
9月11日(土)	第4回学生FD CHAmmiTスタッフミーティング
9月15日(水)	第3回Zoomトレーニング 「応用編」～復習編～
9月24日(金)	第3回プログラムワーキンググループ会議(CHAmmit・全学FDWS他)
9月28日(火)	第2回FDシンポジウム@オンライン テーマ:「オンラインツールの活用事例」
10月8日(金)	第4回Zoomトレーニング 「レポート機能解説編」
10月9日(土)	第5回学生FD CHAmmiTスタッフミーティング
10月18日(月)	第2回教育情報マネジメントワーキンググループ会議
10月19日(火)	第4回全学FD委員会リーダー会議
10月23日(土)	第6回学生FD CHAmmiTスタッフミーティング
10月26日(火)	第3回全学FD委員会

11月6日(土)	第7回学生FD CHAmmiTスタッフミーティング
11月12日(金)	第4回プログラムワーキンググループ会議
11月27日(土)	CHAmmiT前日リハーサル
11月28日(日)	令和3年度 日本大学 学生FD CHAmmiT
12月10日(金)	第4回調査・分析ワーキンググループ会議
12月16日(木)	第5回全学FD委員会リーダー会議
12月18日(土)	CHAmmiT事後ミーティング
12月21日(火)	第4回全学FD委員会
12月21日(火)	第3回教育情報マネジメントワーキンググループ会議
令和4年1月14日(金)	第5回プログラムワーキンググループ会議
1月25日(火)	CHAmmiT改善報告書作成説明会
2月1日(火)	「日本大学FD NEWSLETTER」(第20号)発行 ・日本大学におけるFD活動のミライ
2月21日(月)	第5回調査・分析ワーキンググループ会議
2月24日(木)	第4回教育情報マネジメントワーキンググループ会議
2月25日(金)	第6回プログラムワーキンググループ会議
2月28日(月)	第2回著作権セミナー 「著作物の引用方法について」
3月1日(火)	第5回Zoomトレーニング 「新機能解説及びwithコロナ・afterコロナに向けたハイフレックス授業等のヒントを探る回」
3月9日(水)	第3回著作権セミナー 「動画・図表・音楽等の著作物の取扱いについて」
3月9日(水)	第6回全学FD委員会リーダー会議
3月15日(火)	第5回全学FD委員会
3月15日(火)	「令和3年度 日本大学 学生 FD CHAmmiT NEWSLETTER」発行
3月16日(水)	第3回FDシンポジウム@オンライン テーマ:「ハイフレックス型の授業紹介」
3月18日(金)	第4回著作権セミナー 「著作物を利用した資料配布について」

令和3年度 全学FD委員会名簿

令和4年3月31日現在

委員長	本田和也	(FD推進センター長・副学長)	※～8/31
委員	青木義男	(FD推進センター長・副学長)	※9/1～
委員	藤井孝哲	(FD推進センター副センター長・生産工学部)	
委員	白井哲也	(法学部)	
委員	古田智久	(文学部)	
委員	村岡哲郎	(経済学部)	
委員	松原聖	(商学部)	
委員	畑瀬聡	(芸術学部)	
委員	蓼沼智行	(国際関係学部)	
委員	中村良	(危機管理学部)	
委員	清水千弘	(スポーツ科学部)	
委員	大貫進一郎	(理工学部)	
委員	齋藤義雄	(工学部)	
委員	阿部百合子	(医学部)	
委員	篠田雅路	(歯学部)	
委員	平山聡司	(松戸歯学部)	
委員	須江隆	(生物資源科学部)	
委員	岸川幸生	(薬学部)	
委員	前野高章	(通信教育部)	
委員	丸森寛	(大学院総合社会情報研究科)	
委員	織田有基子	(大学院法務研究科)	
委員	石川元康	(短期大学部三島校舎)	
委員	酒匂教明	(短期大学部船橋校舎)	
委員	酒井誠吾	(学務部長)	※～1/16
委員	渡邊優	(学務部長)	※1/17～
委員	渡邊優	(学務部次長)	※～1/16
委員	中村好延	(学務部次長)	※1/17～
委員	中村好延	(学務部特任事務長)	※～1/16
委員	八町齋次	(学務部特任事務長)	※1/17～
幹事	後藤英次	(学務部学務課長)	

以上

令和3年度 全学FD委員会ワーキンググループ名簿



FD推進センター

令和3年9月1日現在

総括	青木 義男 藤井 孝宜	FD推進センターセンター長，副学長 FD推進センター副センター長，生産工学部教授
----	----------------	---

【調査・分析ワーキンググループ】

リーダー	大貫進一郎	理工学部教授	
メンバー	村岡 哲郎	経済学部教授	
	蓼沼 智行	国際関係学部教授	
	清水 千弘	スポーツ科学部教授	
	篠田 雅路	歯学部教授	
	前野 高章	通信教育部准教授	

【プログラムワーキンググループ】

リーダー	平山 聡司	松戸歯学部教授	
メンバー	古田 智久	文理学部教授	
	畑瀬 聡	芸術学部専任講師	
	中村 良	危機管理学部教授	
	岸川 幸生	薬学部教授	
	酒匂 教明	短期大学部船橋校舎教授	
	石川 元康	短期大学部三島校舎准教授	

【教育情報マネジメントワーキンググループ】

リーダー	臼井 哲也	法学部教授	
メンバー	松原 聖	商学部教授	
	齋藤 義雄	工学部教授	
	阿部百合子	医学部准教授	
	須江 隆	生物資源科学部教授	

※ 学務課メンバーは全てのワーキンググループに所属します。

以 上

【 付 録 】

日本大学FD推進センターに関する内規

(平成 20 年 2 月 26 日制定 平成 22 年 3 月 12 日改正
平成 20 年 4 月 1 日施行 平成 25 年 4 月 1 日施行
平成 22 年 3 月 16 日改正 平成 27 年 3 月 24 日改正
平成 22 年 4 月 1 日施行 平成 27 年 4 月 1 日施行)

(名称及び設置)

第1条 この組織は、日本大学FD推進センター(以下「センター」という)と称し、日本大学(以下「本大学」という)に置く。

(目的)

第2条 センターは、本大学のファカルティ・デベロップメント(以下「FD」という)を全学的に推進するとともに、大学院、学部、通信教育部及び短期大学部(以下「学部等」という)のFDの支援を行い、もって本大学の教育の質的向上に資することを目的とする。

(活動)

第3条 センターは、前条の目的を達成するため、次の活動を行う。

- ① 学内外のFD情報の収集及び調査並びにFD推進に係る各種の分析されたデータの提供
- ② 授業改善のための基本方針の策定
- ③ 教員に対する研修会、講習会及び講演会等の開催
- ④ 教員の教授活動のための相互研鑽の実施
- ⑤ 学部等におけるFDの推進支援
- ⑥ 学生による授業評価の全学的推進
- ⑦ 本大学学生生活実態調査結果の教育的活用
- ⑧ 自己点検・自己評価等の調査との連携
- ⑨ 教員の教育・研究業績評価方法の検討
- ⑩ その他FDに関する事項

(センター長)

第4条 センターに、センター長を置く。

- 2 センター長は、センターを代表し、その業務を統括する。
- 3 センター長は、副学長(学務担当)とする。

(副センター長)

第5条 センターに、副センター長を置く。

- 2 副センター長は、センター長を補佐する。
- 3 センター長に事故あるときは、副センター長がその職務を代理し、センター長が欠けたときは、その職務を代行する。
- 4 副センター長は学長が任命し、その任期は1年とする。ただし、再任を妨げない。

(全学FD委員会)

第6条 センターに、第3条各号に定める事業を推進するため、全学FD委員会(以下「委員会」という)を置く。

(委員会の構成)

第7条 委員会は、次の者をもって構成し、委員及び幹事は大学が委嘱する。

① 委員

- (1) センター長
- (2) 副センター長
- (3) 学務部長
- (4) 本部部長及び部次長 若干名
- (5) 各学部長，通信教育部長，大学院独立研究科長及び専門職大学院研究科長が推薦する教員 各1名
- (6) 短期大学部各校舎次長が推薦する教員 各1名
- (7) センター長が指名する者 若干名

② 幹事

- (1) 学務課長
- (2) 本部部課長 若干名

(委員長)

第8条 委員会の委員長は、センター長とする。

(委員会の招集)

第9条 委員会は、委員長が招集し、その議長となる。

(委員及び幹事の任期)

第10条 委員長，委員及び幹事の任期は、1年とする。ただし、再任を妨げない。

2 補充の委員及び幹事の任期は、前任者の残任期間とする。

(学長の出席)

第11条 学長は、随時、委員会に出席することができる。

(構成員以外の者の出席)

第12条 委員長は、必要に応じ、委員以外の者を出席させ意見を求めることができる。

(専門委員会)

第13条 委員長は、必要に応じて、専門委員会を置くことができる。

2 専門委員会の委員長及び委員は、センター長の推薦に基づき、本大学が委嘱する。

(所管)

第14条 センターに関する事務は、学務部が行う。

(内規の改正)

第15条 この内規を改正する場合は、委員会の審議を経て、常務理事会で決定しなければならない。

(内規等)

第16条 センターの運営その他に関し必要ある場合は、別に内規等で定めることができる。

附 則

この内規は、平成27年4月1日から施行する。

日本大学FD推進センター基本計画（中期計画）



日本大学FD推進センターのミッション

本センターは、本学の「目的及び使命」のさらなる推進を目指し、日本大学教育憲章を踏まえ、大学の求める教員としての資質を恒常的に高めるための組織的かつ多面的な取組を実践する。また、職員の教学管理能力を一層向上させ、職員が日本大学教育憲章に基づく教育課程の編成に参画し、教職協働による教育研究活動を実践する。さらに、学生と教職員が手を携え、本学の教育改革を推進することをミッションとする。

令和3年5月25日 全学FD委員会承認

◆ 中期計画〔期間：令和3年度～令和5年度（3か年）〕

本センターの掲げるミッションの達成を目指し、令和3年度から令和5年度までの取組を以下のとおり示す。

- 1 教員の恒常的な資質及び職員の教学管理能力の向上を目指し、日本大学教育憲章に基づく教育研究活動能力の獲得
- 2 教員の教育研究活動等の自己点検・評価の実施による資質向上の推進
- 3 FD活動の成果とその充実を支援する情報を収集し、学内外へ効果的に発信
- 4 FD推進センターにおけるPDCAサイクル充実を図る組織的取組みの実施

以 上

令和3年度日本大学FD推進センター活動報告書

発行 令和4年3月

発行者 日本大学FD推進センター

〒102-8275 東京都千代田区九段南4-8-24

日本学会館 4階 日本大学本部学務部学務課

電話：03-5275-8314 FAX：03-5275-8315

E-mail：adm.aca.eps@nihon-u.ac.jp



編集後記

『日本大学FD研究（第10号）』は、関係各位のおかげをもちまして、ここに発刊することができました。研究論文2編、教育ノート1編、活動報告1編、学生レポート1編を御投稿いただいた執筆者の皆様、論考の審査に御協力いただいた皆様、教育情報マネジメントワーキンググループを中心とする全学FD委員会及び本部学務部学務課の皆様の様々な御協力、御尽力に深く感謝いたします。

『日本大学FD研究』は、高等教育開発に関する論考や活動報告等を共有し、組織的な教育の質向上を図ることを目的として、日本大学FD推進センターより刊行されております。本年度は昨年度に引き続きコロナ禍ということで、オンライン授業やハイブリッド授業に関する研究成果の積極的な投稿を呼びかけました。その影響もあってか、第10号においても、研究論文の一部や学生レポートにおいて、コロナ禍におけるFD活動に関連するものが掲載されております。現在、コロナ禍は収束の方向に向かいつつあり、様々な活動が対面で再開されておりますが、これら掲載論考は今後の教育の在り方や教育改善活動においても重要な示唆を与えてくれるものと思っております。

関係各位のご協力のもと、今年度も非常に多くの投稿をいただきました。『日本大学FD研究』の著者の所属学部や研究対象は多岐にわたり、各部科校の特徴を反映した活動、専門や講義形態、そして教育支援の仕組みなどが様々な視点から論じられ、いずれの各部科校の幅広い層の読者に対しても参考となる内容となっております。さらに、これらの論考は掲載決定後、速やかに日本大学FD推進センターのホームページに掲載され、読者の皆様にお届けできるようになっております。今般のコロナ禍における変化のように、教育環境や学生の活動も、日々、目まぐるしい変化を遂げております。『日本大学FD研究』もこれらの変化に対応して、よりタイムリーに各論考を教育現場にお届けできるよう、投稿論考の迅速な審査など今後に向けた改善に努めてまいります。

『日本大学FD研究』の内容の充実のためにもお気づきの点があれば、ご意見いただければ幸いです。また、多くの教職員の皆様からの御投稿を心よりお待ちしております。

日本大学全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループメンバー
日本大学工学部 教授

齋藤義雄

編集

日本大学全学FD委員会教育情報マネジメントワーキンググループ

リーダー 須江 隆 (生物資源科学部教授)

メンバー 玉蟲 由樹 (法学部教授)

岸本 徹也 (商学部教授)

齋藤 義雄 (工学部教授)

阿部百合子 (医学部准教授)

織田有基子 (大学院法務研究科教授)

後藤 英次 (学務部学務課課長)

関 雄太 (学務部学務課課長補佐)

佐賀 友美 (学務部学務課主任)

川田 和希 (学務部学務課主任)

※所属、役職等については、令和4年12月現在のものです。

〔表紙デザインコンセプト〕

日本大学FD推進センターの諸活動が日本大学をはじめとするあらゆる教育界に広がり影響していくイメージを水の波紋としてデザインしています。

水滴（FDの諸活動）が水面に落ちたとき、あらゆる教育界に波紋（影響、効果）が広がっていくイメージです。

また、水面で交わっている波紋は、教員や職員、そして学生の三者が交わっている様子を表しています。三者が相互に影響してはじめて水の流れができる。三者が相互に影響することで、はじめて教育の質的向上を図ることができる。そのようなイメージでデザインされています。

日本大学FD研究 第10号

発行 令和5年3月31日

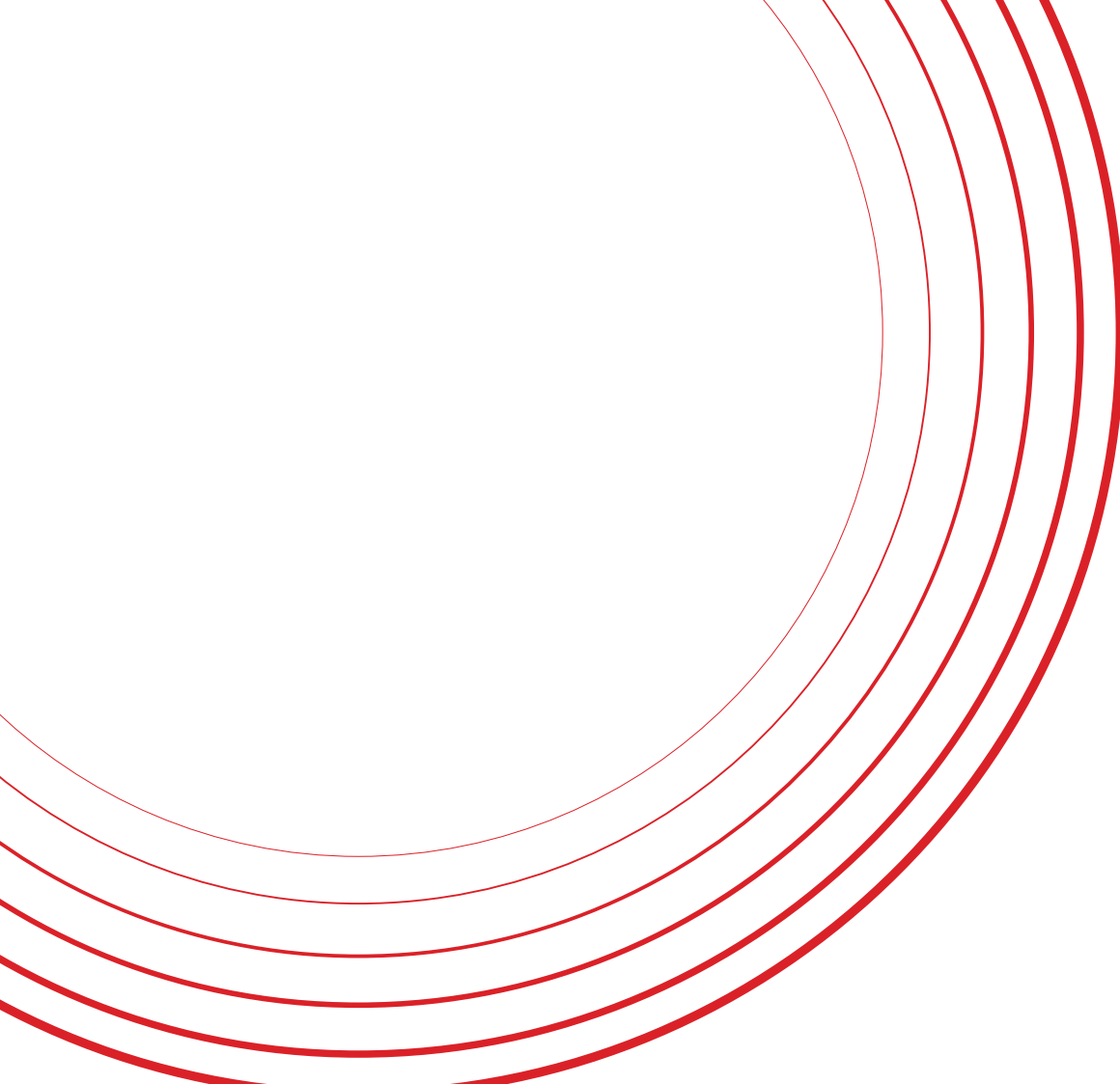
発行者 日本大学FD推進センター センター長 大貫 進一郎

〒102-8275 東京都千代田区九段南4-8-24

電話：03-5275-8314 FAX：03-5275-8315

E-mail：adm.aca.eps@nihon-u.ac.jp

所管部署：日本大学 本部 学務部学務課



Nihon University
Journal of Faculty Development
Vol. 10

